
リリカルなのは -Twin lightning-

金色の戦姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは - Twin lighting -

【Nコード】

N7230Q

【作者名】

金色の戦姫

【あらすじ】

幼くしてこの世を去った、一人の不幸な少女。

しかし『神』は彼女の事を見捨てなかった。

そして少女は、新たな生を受ける…

悲しき犠牲となったはずの少女の視点で描くリリカルストーリー、始まります。

プロローグ～発端～（前書き）

始めに断っておくと、この作品は書き直した物です。

ブローグ〜発端〜

私は、死んだはずだった。

研究者という職業柄、家に帰ることが少ない母が当時着手していたエネルギー炉の開発。

この件が無事に終わったらしばらく一線を離れ、私という時間を増やすと約束をしてくれた厳しくも優しい私の自慢の母。

それなのに、母に研究開発を依頼した会社のヒト達は安全性を十分考慮して研究していた母のやり方を非難し早期の完成を迫った。

まだ実用どころか試験運転すら危険だと警告する母を無視し、強引に稼働実験が始められた。

母の警告通りエネルギー炉は暴走。現場に居合わせていた私は、光の奔流に飲み込まれて母の悲鳴のような叫びを聞きながらその命を落とした。

暖かい光に包まれ目覚めた私は、自分以外に人影も…文字通り何もない世界に、死んでしまったことを実感した。

大好きな母を悲しませてしまった事と、5年で死んでしまった事への悔しさから次第に涙が溢れてきた。

死んでいる身なので、涙に殆ど価値はない。それでも泣かずには…抑えるべきの涙を止めずには、いられなかった。

しかし、救いの手というのは本当にあつたらしい。

ふと気付くと、目の前には水晶球程の大きさの、淡い光を放つ珠が宙に浮かんでいた。

「それ」は穏やかな女性の声で私の意識に、直接語りかけてきた。

——貴女は…まだ、生きていたいですか？——

——…生きられるのなら、生きていたいよ——

——何のために？——

——自分を死なせた者への復讐ですか？——

——違う……——

——では、貴女が望むものは何ですか？——

——私が望むのは……——

——…『笑顔』……——

——大切な人…私を大切に想ってくれる人の……——

— …ご自分で見出す事になりますが… —

— …構いませんか？ —

— …大丈夫… —

— 元の世界は貴女と同じとも言える… —

— …作られた存在ひつの女性がいますが —

— …構いませんね？ —

— …うん… —

— …では、貴女を現世へ送ります… —

— …甦生…いえ、転生に際して —

— …貴女の望むものを、如何なるものでも1つだけ差し上げましょ… —

— …じゃあ…私の世界でいう『魔法』の力を —

— …どの程度を、お望みですか…？—

— …『私と同じ人』に、負けない程度には…—

— 承知しました…では、少しだけ目を閉じて…—

声に従って目を閉じ、私の体が暖かさで満たされる。

— …それでは、現世への送還を行います—

— …もう一度、ゆっくり目を閉じて…—

— …あの、お名前聞いていいですか…？—

— …私は、運命と希望を司る女神…『未来』の守護スクルドと申します…—

そして、私は甦った。

しかしそこは、私のいた時より更に10年以上の時間が過ぎていた。

ブローグゝ発端ゝ（後書き）

スクルドは、あの超有名な三女神の末っ子。
リンディさんがいるので、出していました。
ただし性格だけは、次女のヴェルザンディです。

基本設定（前書き）

この話におけるアリシアやデバイス等の設定です。

状況により変わるかもしれません。

基本設定

【時系列】

新暦61（無印以前）～75年（Strikers）

【構成】

基本アリシア一人称。

【キャラクター設定】

アリシア・テストロッサ

CV：水樹奈々

年齢：18歳

（機動六課始動時）

フェイト・T・ハラオウンの『母』プレシア・テストロッサの実の娘だったが、新型エネルギー炉の暴走による事故で死亡。

余りにも可哀想だと感じた『神』が女神・スクルドに命じて助けさせる。

極めて優秀な魔導師として生き返り、その才能は母・プレシアを越える程。

ただし、甦生直後は殆どの才能が眠った状態。

先天魔導資質は「電撃」。

これは母プレシアの素質を彼女が受け継いだ形という事になってお

り、実際にはスクルドが与えたもの。

性格は生来から変わらず、明るく人当たりが良く余り物怖じしない。転生時に生前の記憶を全て消されているため、自分のために母が非道に走った事を知らない。

7歳の時に災害孤児として管理局に保護され、魔法の素質がある事が発覚。以来局の庇護下で生活しながら囑託魔導師としての仕事をしている。

しかし実際は…。

最初とある小さな村で保護されたとき名前すら憶えていなかったため「アリス・インテグラ」の名を与えられた。

最初は魔法もかなり弱いが成長するにつれ段々威力が上がっていき、敵に対して全く容赦をしない戦い振りで「管理局の白い死神」や「聖女の皮を被った悪魔」といった、有難くない異名をつけられてしまう。

魔導師ランク：空戦AA（入局時）↓空戦SSS+（機動六課転属時）

スクルド

CV：久川綾

非業の死を遂げたアリシアを救う為『神』が派遣した『運命の女神』の三女で、「未来・希望」を司る。

姉のヴェルザンディに似て慈愛に満ちており、今回の件を買って出た。

『神』

その名の通り、全能を操る超越者。

アリシアの事は偶々知った程度にしかすぎなかったが何か興味を引かれたらしく彼女を助けるよう『運命の三女神』に命じた。

基本的に過剰な下界干渉はしないが、たまにこうして理不尽な死を遂げた者達を救っている。

なお、神々は基本的に本編には登場しない。

【デバイス解説】

アルテミシア

規格：ミッド式のインテリジェント・デバイス

使用言語：日本語

CV：浅野真澄

アリス（アリシア）用に、管理局で開発された高性能デバイス。

愛称はアルティ、もしくはアル。

アリスの要望が可能な限り盛り込まれており、近中遠全てに対応できるように調整されている。

ロングソード状の基本形態デバイスフォーム、杖の形をした砲撃戦仕様のシューティングフォーム、手甲の接近戦用・ファイティングフォームがある。

シグナムとの戦いでアリスを守って大破、レイジングハートやバルディッシュと共にベルカ式カートリッジシステムCVK-792を搭載。

後に再調整が施され、バルディッシュのザンバーフォームに相当するバスターフォームを追加。

アリスを常に優しく支え、時に厳しい言葉で励ます。

アリス曰く「良く出来た、とてもいい機体」。

デバイスに珍しくお喋りで感情表現が豊かなのでよくアリスと他愛ない話をしている。

（主な使用魔法）

- ・ブレイクナックル

手甲に電撃魔法を付加する事で対シールド貫通能力を上げる。AMFに対しても一定の効果を発揮する。

ファイティングフォーム用自動発動型魔法。

- ・アークブレイド

フェイトのアークセイバーやハーケンセイバーに相当する中距離用攻撃魔法。

デバースフォーム用の攻撃魔法。

・フォトンシューター

マルチロックオンが可能な中長距離攻撃魔法。

最大16箇所を同時に攻撃でき、最大攻撃回数は何と256にもなる。

・サンダーブレイカー

スターライトブレイカー級超高出力砲撃に高圧電流を付加したアリス最強の攻撃魔法。

シューティングフォーム時のみ使用可能。

魔力消費が激しすぎるためカートリッジを使用しても一日一度撃てればいい方。

ちなみにこれだけは大人になるまで使用禁止、なっても多用は厳禁だとアルティに釘を刺された。

・エクスカリバー

アルティにカートリッジシステムを実装した事で使用可能になった魔力砲。

デバースフォームのフルドライブ攻撃。

基本設定（後書き）

なのはさん達との絡みは、全くと言っていいほど構築できていません。

3人より前に局入りしてる設定なので、その辺もどう書くか思案中です。

転生（前書き）

ここでオリジナルキャラの解説を。

セレス・ヒューラント

年齢：8歳

（アリシア転生当時）

CV：斎藤千和

髪色：ライトシルバー

虹彩色：アスールブルー

転生したアリシアが担ぎ込まれ保護された小さな村の村長夫妻の間に生まれた、明るく面倒見のいい少女。

両親が元管理局員で、父が元教導隊・母が元陸士隊である事から彼女も局入りを目指している。

普段は穏やかだが心身共に強い両親を尊敬しており、自分もそんな人になりたいと願っている。

両親と同じように、彼女も体内にリンカーコアを宿す魔導師。

まだまだ子供なので実力は低いが、その素質は非凡なものを感じさせる。

転生

声が、聞こえる。

——その娘か？

——はい、如何なさいますか？

——未だ幼いというのに、このような事になるとは…良いだろう、救ってやるといい

——有難うございます…

——今度は、幸福な生涯を送れると思うか？

——それは、この娘次第ですね…

そこで私は目を覚ました。

目覚めた場所は、柔らかなベッドの上。

飾り気はないが、殺風景という程でもない…雰囲気の良い部屋の中だった。

どうやら怪我をしているらしく、胴回りや腕に包帯が巻かれていた。

何故こんな怪我をしているのかと不思議に思っていると、軽いノックのあと部屋に誰かが入ってきた。

「あ、起きたんだ…だいぶ弱ってたみたいだから心配したんだよ」

長い銀髪と蒼い瞳が印象的な8歳くらいの少女。

「大丈夫？」

まだ痛いのなら無理しなくていいよ」

「ううん…大丈夫ですよ。」

まだ少し痛いけど、手足はちゃんと動くし…起きてても平気ですから」

「…そう？」

ならいいけど、痛い時は我慢せずに誰かに言った方がいいよ」

その子は着替えらしき服を小さな机に置くと私の顔を覗き込んだ。できた。

「…やっぱり綺麗な顔してるね、羨ましいな」

その言葉に、私は不覚にも照れてしまった。

「あはっ、赤くなってる！」

やっぱりかわいい…!!」

少女は悪戯っぽい笑顔を私に見せてから、その幼い顔を離して着替えの服を私に手渡した。

「私のお古で悪いんだけど無いよりは…ね？」

落ち着いた色のセーターとスカート。

まだじくじくと痛む傷に耐えながら、服を着替えていく。

「む…何か私より似合っているような…？
まあそれはさておき」

真剣な眼差しになる少女。

「どうしてあんなところに倒れてたの？」

「…あんなところ？」

「そうだよ、あんな森の中…って、覚えてないの？」

「…というより、解らないんだ…何でそんなところにいたのか」

「…一応聞くけど、自分の名前は思い出せる？」

痛む頭を巡らせて、自分の名前を思い出そうとするが何も出てこなかった。

「…どうやら、ダメみたいだね。
仕方ないかな…」

少女の表情が少しだけ暗くなるが、すぐもとに戻って私を気遣う。

「大丈夫だよ、失ったなら取り戻せばいい。
元々無いのなら作ればいい…ああ、まだ自己紹介してなかったよね。
私はセレス・ヒューラント…セレスでいいよ。
それとあなたの名前考えておかないとね、名前がないと色々不便だ

し」

「うん…有難う、セレス」

セレスは優しい笑みを浮かべてこちらを見ている。

「お礼なんて要らないよ、今日からあなたも『家族』なんだから」

「え…？」

「だから、あなたも今日から私達にとって家族も同然って事。身寄りなんて無いでしょ？」

「だったら、うちで暮らした方が安全だよ」

「で、でも…迷惑をかける訳には…」

「…人の好意は素直に受け取っていいんだよ。それに私も両親も、迷惑だなんてこれっぽっちも思っていないから…むしろ家族が増えて嬉しいんだ」

年齢不相応なほど大人びた考えを持っているセレス。行く当てのない私は、その好意に甘える事にした。

「そ、それじゃ…お世話になります」

「うん、じゃあ下に行こうか。」

ああ、言い忘れてたけど私の父はこの村長で、昔管理局で武装隊員をしていた人なんだ。

だから私も将来局員を目指してるの」

「管理局…って？」

「それも知らないんだね…まあ、その辺は父に聞いてもらっていいかな？」

私は銀髪の少女・セレスに連れられ、下階の居間へと向かう。

この平和な村での穏やかな生活が今、始まりを告げるのだった。

転生（後書き）

アリシアが保護された村はミッドの外れの方の、何の辺哲もない小さな村です。

しかし自然が豊かな環境で癒しを求める人々に人気があり、最近はリゾート地になりつつあります。

村長夫妻の他にも元局員やその関係者が大半を占めるため、管理局が財政援助をしています。

家族（前書き）

前回書き忘れてましたが、最初は過去の話です。

時系列では無印の4年前。

士郎さんが入院して、桃子さん達が忙しくなりなのはが寂しいと感じ始める時期です。

家族

前に行く銀髪の少女セレスと一階の居間を目指す。

「…そういえば、セレスは兄弟っているの？」

3人家族には些か広すぎるように感じる家。

私は何気なく、そんな事を聞いてみた。

「私は一人っ子だけど今は妹ができて嬉しいかな」

「えっ、妹って…私？」

セレスは無言で頷く。

そんなやり取りをしているうちに居間へ着いた。

セレスが先にドアを開けて部屋へと入り、軽い会話をして私を招き入れる。

「さ、遠慮しないで」

部屋に入ると若くはあるが少し年齢を重ねた感のある灰色の髪の男性と、その側に寄り添うように座る金の髪の見るからに優しいような女性がいた。

この二人がセレスのご両親なんだ…と私はすぐに理解した。

「もう起き上がったっても平気なのかい？」

「あ…はい、大丈夫です」

「そう…よかったわ」

今のは奥さん。

「とにかく、こっちに来て座りなさい。

そんなところに立ってたらまともに話はできないよ」

促されるままセレスと私は二人の反対側にあるソファへ座った。

「…初めまして、この村を纏める役をやらせて貰っているトレノ・ヒューラントです。

彼女は私の妻のマリノ」

「…初めまして、マリノ・ヒューラントです」

「あ、あの…初めまして」

柔らかな物腰の二人に私は一瞬ドキツとして、慌てて返事をする。

マリノさんが淹れてくれた紅茶を飲みながら、トレノさんが話を始めた。

「さて…娘から大体聞いたと思うが、先日君はこの近くの森で倒れていた。

そこを偶々娘が見つけて、ここに運んだんだが…君は記憶が全く無いらしいね。

自分が何者なのかも憶えていないそうじゃないか」

その言葉に私は驚く。

なぜならセレスは私が目を覚ましてから今まで一緒に誰にも会っていないのだ。

「どうしてそれを…とでも言いたそうだね。それは、君にも少しは関係している事なんだ」

一呼吸おいて言葉を続けるトレノさん。

マリノさんは穏やかな笑顔を全く崩していない。

「君は、魔導師という人達を知っているかな？」

セレスから少しだけ聞いた単語が出てきた。

「一時的にだが、天候すら意のままにする強大な力を持つ人達の事だよ。」

彼らは言葉を交わさずとも直接意思疎通ができる手段『念話』というのが使えるんだ…先程セレスと念話でやり取りしたから、少しは君の状況を把握しているんだが…」

真剣な顔になっているのが自分でもわかる。

「『魔導師』達は体の中に『魔法』を使うための力である魔力の源『リンカー・コア』を持っている。」

大きさは差があるものの、魔導師はみんな持っているものだ。そして魔導師は相手が自分と同じ魔導師なのか見分けられるように、

コアを視る力があるんだ。

私も妻も、それとセレスも『持っている』。

そして…君もね」

「…えっ？」

何を言われたのか即座には理解できなかった。

「つまり、君も私達と同じ『魔導師』なんだよ。
その才能は、まだ開花していないようだけどね」

「私…が…！？」

驚愕の表情を浮かべていると、トレノさんの顔が急に和らいだ。

「まあ、その話はまた今度にしよう。
とりあえず今はもうひとつの話が先だ」

「もうひとつの話…？」

不思議そうな顔をした私にトレノさんは続ける。

「ああ…君は記憶を無くして、頼る人も行くところも無いんだろ？」

「は…はい…」

自力では変えられない事実には私は顔を暗くする。

「更に、君はセレスよりも幼い…そんな君を放り出せる程私も人でなしではないつもりだ」

トレノさんが真剣な表情に戻る。

「どうだろう、かりそめの関係でもいいからセレスの妹に…私達の娘になつてはくれないだろうか？」

「えっ…私にですか…？」

「君にこんな事を言うべきではないだろうが…マリノは昔病に侵されて、子供ができない体になつてしまつてね…」

重々しい雰囲気伝わってくる。

「管理局時代は私達も仕事が忙しくて、セレスの側にいてやれない事が多かったんだ。

この子が寂しい思いをしている事も知っていた。

そして私は…まあ紆余曲折あつて管理局を退職して、この片田舎へ引つ込む事にした。

マリノは文句も言わず私に付いて来て、セレスと一緒にいられる時間が増えた事は確かだ。

だが…セレスが今でもふと寂しそうな顔をするんだ」

トレノさんの語気がわずかながら変わったような気がした。

「これは私の…私達の我儘だから、無理して聞き届けなくても一向に構わない。

だが…セレスのためにも、聞き届けて欲しいんだ。

この通り、頼むよ」

セレスが『妹ができるから嬉しい』と言っていたので予想はしてい

たが…改めて頭を下げられると、困ってしまう。

「顔をあげてください！」

どこの誰とも解らない私に対してそんな事までされる理由はないと思います！」

私が慌てると、隣のセレスが手を握ってきた。

「私からもお願い。

さつきはつい勢いであんな事を言ったけど…あなたが妹になってくれたら、私は本当に嬉しいよ？」

セレスにそう言われた私は断る事ができず、観念したように言葉を絞り出す。

「…解りました、では今日からお世話になります。

『お父さん』『お母さん』『お姉ちゃん』。

あ、でも…」

ここで私は今更だが大事な事を思い出した。

「名前…」

そう…私には『名がない』のだ。

正確には、思い出せないのだが…。

「ああ、そうだったね…。

名前を考えてあげないと」

「私、考えてあるよ」

ここでセレスが手を挙げて応えた。

「『アリス・インテグラ』ってどうかな？」

「…インテグラ？」

ヒューラントじゃなく？」

「うん、私の閃きで。

血が繋がってないんだから別に、ファミリーネームに拘る事ないと思うけど…」

「…綺麗で、とってもいい名前ね。

あなたはと思う？」

「あ、えっと…素敵な名前だと思います。

ありがとうございます」

「名前がないと呼びにくいから考えただけだよ…べ、別に感謝されるような事はしてないんだから！」

私が感謝の言葉を贈ると、セレスは慌ててそう言ってソッポを向いてしまう。

（ツンデレだな）

（ツンデレよね）

（ツンデレだ…）

トレノさんとマリノさんと私は意見が一致して思わず顔を綻ばせた。

「な、何で笑うのー!？」

顔を真っ赤にして抗議するセレス。

そのリアクションに今度は声をあげて笑ってしまい、セレスは頬をふくらませて不貞腐れてしまった。

彼女を宥めるマリノさん。

その一方で私は、こういうのが『家族』の形なんだと思った。

たとえ血が繋がらなくとも強い絆で結ばれて、些細な事で笑いあえる人と人との暖かい繋がり…それが本当の『家族』なんだと。

だが今度は私が恥ずかしい思いをする羽目に。

(…くううう…)

そのある意味では凄まじい音に、一瞬時間が止まったような錯覚を感じた。

私達は慌ててお互いの顔を見る。

そしてどうやら原因は私だと確信したらしく、3人は私を見て爆笑していた。

「あう…そんなに笑わないで下さいよう…」

私は耳まで真っ赤になっているのを自覚しつつ涙目になりながら俯く。

「ははは…いや、そんなに勢い良く鳴るのは元気だという何よりの証拠だよ。」

マリノ、済まないが彼女に何か作ってやってくれないか？」

「はいはい…うふふ、もう少しだけ待ってくれる？
すぐ用意してあげるから…セレス、手伝って。」

ああ…時間も時間だから、そのままご飯にしましょ」

窓から外を見るともう陽が暮れて、家々の灯りが点き始めていた。

「お、もうそんな時間か…済まないね、こんな長々と付き合わせて」

「あ、いえ…とんでもないです。
改めて、宜しくお願いします」

恐縮している私に、トレノさんは右手を差し出した。

「こちらこそ、宜しく頼むよ…『アリス』」

「はい…『お父さん』」

差し出された大きな手に、私は5歳のまだ小さい手で精一杯応えた。

優しい家族、暖かい家庭、そして穏やかな日々。

例え望んだとしても容易に手に入るものではない。

それを掴んだ私は、とても恵まれていると思う。

私はこんな平和な生活が、永遠に続いて欲しいとこの時から思うようになった。

家族（後書き）

セレスの両親は二人とも、元管理局員です。

トレノ・ヒューラント

年齢：35

CV：中田譲治

髪色：グレー

虹彩色：アスールブルー

アリシアがかつぎ込まれた村の、自称『纏め役』。

（実際は若き村長）

時空管理局・航空武装隊の元教導隊員で当時の階級は三等空佐。割と名の知られたエリートだが、決して驕らない性格で周囲の評価も高い。

10年前、出向先の任務で出会ったマリノに一目惚れしてすぐさま告白。

二つ返事でOKした彼女と翌年には結婚、さらに翌年待望の娘・セレスが生まれ公私共に充実していた。

しかしその半年後、任務中の事故に巻き込まれ入院を余儀なくされる。

この事で彼は今後を見つめ直し、退役を決意した。

退役後は長閑に暮らせるこの村に移り住み時々は管理局時代の仲間と語らいながら平和な暮らしをしている。
村では働き者として人々の覚えも良好。

移り住んで4年目に先代の村長が急逝し、村民全員の支持により32歳で村長になった。

「正義」を建前にする者を何よりも嫌う。
基本的に穏やかな好人物。

マリノ・ヒューラント

年齢：34

髪色：プラチナブロンド

虹彩色：リーフグリーン

CV：中原麻衣

トレノの妻。

時空管理局元陸士隊員で、退役時の階級は二等陸尉。
彼女もエリート魔導師だが出世欲がなく、二等陸尉になったのも当時の部隊長に頼み込まれて仕方なく拝命したのだ。

24歳の時出向で来ていたトレノに告白され、
「一年経って貴方の想いが変わらなかったら、改めて同じ言葉を私に下さい。」

その時は一緒に歩む決心をつけて貴方を待っていますから」と条件付きでOKし見事約束を果たして結婚。

その翌年に待望の娘セレスを出産するが、夫が事故に巻き込まれたという報せを受けて退役を考える。

その後退院した夫がどこかのんびりしたところで平和に暮らしたいと言った事で退役を決めた。

局時代はその美貌で人気者だった為家族で移り住んだ村でも一番の美人として、もはやアイドル状態。

娘セレスも器量良しなので美人母娘と言われている。

気品すら感じられる穏やかな性格をしており『淑女』という言葉は、彼女のためにあるといっても過言ではない。

人の親なので家事は一通りちゃんとできる。
料理はプロも唸らせる程の腕前を持つ。

勧誘（前書き）

今回は首都に行きます。
あと、あの人が登場。

では、過去編3話です。

勧誘

私がヒューラント家に迎えられてから、もう3カ月。

次第に村の人達とも仲良くなって、管理法に触れない程度のごく簡単な魔法なら使えるようになっていた。

そんなある日、お父さん…トレノ・ヒューラントが、私にこんな事を言った。

「アリス、一度お父さんの仕事場だったところを見てみないか？」

「…え？」

「あなた、それはまだ早いんじゃない？」

口を挟んだのはお母さん…マリノ・ヒューラント。

優しくて綺麗で、とっても若いお母さん。

二人とも昔は時空管理局に勤めていたらしい。

先日「どうしてお父さんと一緒になったの？」と聞くと、顔を真っ赤にしながらか話してくれた。

その話は後ですとして、私がきょとんとしているとお父さんはさらに続けた。

「いや、実はクラナガンに行く用事ができてな。

序でに当時の同僚や上官、後輩にも会おうかと。

そこでアリスに一度首都を見せてやろうと思ったんだが…」

言葉を濁すお父さんに、私は気にしないでという意味で返事をした。

「…私、行ってみたいな。」

クラナガンに」

「そうか…マリノ、アリスもこう言っているし連れて行ってやりたいんだ」

お母さんは観念したように溜息をついた。

「…わかりました。でも、誰と会うの？」

「君も知ってるあの人だ。あの『甘党の彼女』…」

お母さんは、誰の事なのか思い当たったらしく呆れた苦笑いを浮かべている。

「…ああ、あの人…。」

あの感覚は正直、今も理解できないわ」

「そうだな…あれは部下や同僚、上官も引くだろう」

「…何の話？」

私が聞くと2人は「会えばわかる」とだけ言った。

数日後。

私はお父さんと一緒に首都クラナガンへ向かうリニアレールに乗っていた。

もう少しで首都に着く…と思うとワクワクする。

出発前日『お父さんの昔のお友達に頼んで、管理局の施設を見学させて貰える事になった』と言われた。

それを聞いたお姉ちゃん…セレスが悔しがってた。

悪い事しちゃったかな？

施設を見学させてくれるんだから『友達』は管理局の偉い人なのは間違いない。

私はせめてその人にセレスの事を沢山話して、興味を持って貰おう…と考えたのだった。

…え、5歳児の考えることじゃない？

…まあ、そうかもしれないですね。

第一管理世界ミッドチルダ首都・クラナガン。

無数の次元世界を束ねる、超巨大治安維持組織「時空管理局」の本

部がある。

と言ってもここにあるのは「地上本部」で、総本部は別の場所にあるとお父さんが言っていた。

しかもお父さんが所属していた「空」こと航空隊と、ここに本部を構える「陸」こと首都警備隊をはじめとする地上部隊はかなり仲が悪いらしい。

お母さんが昔所属していた「陸士部隊」と航空隊は、それほど仲が悪くという訳ではないらしくむしろ良好だという。

「海」と呼ばれる次元航行部隊や「空」・「陸士」と「陸^{おか}」の不仲の訳は、上層部…陸のトップであるレジアス・ゲイズ氏の方針に依るところが大きいと後で知った。

首都にある次元転送ポートから、本部ドックに停泊中の次元航行艦「アースラ」へと向かう私達。

アースラに着くと、宝石のように綺麗な翠の髪をしたお姉さんが出迎えた。

「お久しぶりです…ヒューラント三佐。
いえ、元三佐でしたわね」

「ええ、ハラオーナー佐…いや、今は提督でしたか」

互いに敬礼と言葉を交わし久々の再会を喜ぶ。

「ふふ…昔みたいに名前で呼んで下さい。私にとって貴方は、今も

目標なんですから」

「お父さん、このお姉さんは…？」

私のこの一言でかなり彼女は喜んだようだ。

「あら、お姉さんだなんて嬉しいわ！

私もまだイケるわね」

お父さんはそれをスルーし私を紹介しようとする。

「…リンディ、大丈夫か？

娘を紹介したいんだが」

「ああ、ごめんなさい。

その子が前に話してた記憶喪失の…？」

「そう、2人目の『娘』のアリスだ。

…アリス、ご挨拶して」

「はじめまして、リンディお姉さん。

アリス・インテグラです。

お父さんがいつもお世話になっております」

私の挨拶に驚くリンディ・ハラウン提督。

「…あら、随分礼儀正しいのね？

アリスさん…だったわね、幾つなのかしら？」

提督の問いかけに私は少し意地悪をしたくなった。

「…女性に年齢を聞くのは失礼じゃないですか？」

提督の顔が、僅かに歪んだのを私は見逃さなかった。

「…生意気な事言っのね。
でも可愛いから許すわ」

「リンディお姉さん、お顔こわーい」

「…何ですって!？」

呆れたお父さんが、私達を止めに入る。

「2人共コントはその辺にしてくれ…リンディ、君も大人げないぞ？」

「…すみません、では艦長室にご案内します」

艦長執務室に向かう途中、リンディさんがお父さんに質問した。

『三佐、アリスさんは一体幾つなんですか？』

…念話で。

『…5歳だ、もっとも外見からの推定年齢だな』

『…っ!？』

随分大人びてるといっか、老成してるといっか…』

『あれで結構5歳児らしい可愛いところもある、勘弁してやってくれ』

艦長執務室。

次元航行艦「アースラ」の責任者、リンディ・ハラウン提督の仕事部屋。

…のはずだけど、ここ次元船の中だよね？

何か凄いイメージの異なるモノが色々あるなあ…。

中に通された私達はそこで更に、提督の驚きの行動を目の当たりにする。

「タタミ」という、とある管理外世界の敷物(?)に座りお茶を淹れる提督。

私が知っている「お茶」は紅茶というものらしく、系統が違らしい。

すると、提督は突然何かを取り出した。

そして躊躇いなく「何か」を「お茶」に投入。

よく見るとそれは、砂糖とミルク…本来はコーヒーに入れるはずの物だった。

あ、お父さんが露骨に嫌な顔をしてる。

…私は思いきって、提督に聞いてみた。

「リンディさ…提督、何でそんな…」

提督はさも当たり前のように軽い口調で答えた。

「あら、意外と美味しいのよ？」

アリスさんも、騙されたと思って飲んでみない？

甘いのが苦手なら、お砂糖少なくなるから」

そう言って、角砂糖を私の「お茶」に入れた。

「じ、じゃあ…頂きます」

恐る恐る砂糖入りのお茶に口をつける私。

……。

結論から言つと、飲めない訳じゃない。

だけど…私はあんまり好みじゃないし、何か違う気がする。

慣れれば違つだろうけど、相当勇気が要る事は…多分間違いないと思う。

私が苦笑いすると、提督の顔が少し暗くなった。

「まだちっちゃいものね…ごめんなさいね、美味しくないかしら？」

私は慌てて、その場を取り繕おうとする。

「あ…大丈夫ですよ」

ここでもうやくお父さんが提督とお話を始めた。

「…しかし、あれからもう7年も経つのか。

時の流れは残酷だと、最近よく思うよ」

「ええ…あの『事件』は、本当に悲しいものでした。

私達の心に刻まれた傷は、生涯消える事がないのですから」

「私は、よく自分を呪ったものだよ。

親友が『消えていく』その瞬間を…見ている事すら、できなかったのだから」

「『あの人』は自分の信念…『正義』を最後まで貫いていました。

その思いは『あの子』へ、しっかり受け継がれているはずです」

2人の昔話は興味あるけどきつと、教えてくれないんだろうな。

多分…「大人の事情」っていうのがあるから。

お話が済んだみたいだが、なんだか空気が重い。

私は幼心に、空気を変えるべく話題を探した。

「そうだ、私のお姉ちゃんが将来管理局員を目指しているんですけど…」

そこで私は、臆気な自身の夢を話す事に決めた。

「私も大きくなったら管理局に入りたいんです、何かアドバイスを頂けたらって思っんですけど…」

私のそのセリフに提督も、お父さんも驚いていた。

「…だったらアリスさん、アースラの中をもつと見てみたくない？管理局に入りたいのなら、見ておいた方が勉強になると思うわ。こういうチャンスは確実にものにするべきよ？」

そう言っ て提督はウィンクした。

… 大人なのにかわいい。

「済まない、すっかり忘れていた。

それじゃアリス、リンディ提督に艦内を案内して貰いなさい」

「はい。

… よろしくお願いします、リンディ『お姉さん』」

「あらっ、また!？」

んも、『お姉さん』嬉しすぎて思わずアリスさんをぎゅってしたくなっちゃっわ!!」

そう言いつつ、抱きついてくる提督。

私にはない、大人の女性の柔らかい感触が…私の体に伝わってくる。

同性だとしても…これは、ちょっと恥ずかしい。

お父さんはそれを、呆れた表情で見ていた。

『用事がある』と言って、私を提督に任せてお父さんはクラナガンへと戻った。

私は提督の案内でアースラの中を見学させてもらっている。

「…最後にここがクルーのお腹を満たす食堂よ。丁度いい時間だからお昼にしましょうか」

提督は空いている席に私を座らせ、まず私の分を確保してから自分の分を持つてくる。

一緒に食べ始めたが、提督は私が食べるのをニコニコしながら見ている。

「アリスさん、好き嫌いはないの？
トマトやピーマンが苦手な子は結構いるのに」

「えーっと…変わった物でなければ」

「そうなの、偉いわね。
うちの子にも見習わせたいくらいだわ。
ちゃんと食べて大きくなるのよ？」

「はい」

『もきゅもきゅ』と擬音が出るんじゃないかと思う程懸命に眼前の食べ物と格闘する私を笑顔で見つめつつ食べ進める提督。

食べ終わってから一息入れ私は提督とお話を始めた。

「アリスさんは将来、局に入りたいのよね？
お姉さんと同じように」

「えっ…あ、はい」

「本当ならしつかりお勉強しておかないと管理局には入れないけど、他の方法が無い訳じゃないわ」

「えっ？」

「でもこれは、あまり使いたくない方法なんだけど…きわめて優秀な『魔導師』ならスカウトするって手があるの。

お姉さんは解らないけど、少なくともアリスさんにはかなり『魔導師』としての才能があると思うわ。

早く管理局に入りたい…と思っているのなら、魔法の腕前を磨くのが一番の近道なのよ」

私は提督の話を、大人しく聞いていた。

「…あなたが近い将来に、もっと『魔導師』としての才能を開花させたら…私のところへ来ない？」

「え…ええっ!？」

本当に驚いた。

まだ、魔法の練習を始めて間もない私をリンディ提督はスカウトしたいらしい。

提督は穏やかな顔を崩さず付け加えた。

「もちろん、自分の実力に自信が持てるようになってからで構わないのよ。」

記憶の片隅にでも、留めておいてくれればいいわ」

「は…はいっ、ありがとうございます！」

私は力強く返事をした。

夕方、お父さんがアースラに戻ってきて『今からじゃ帰っても夜中だから今日はクラナガンに滞在する』と言った。

それを聞いたリンディ提督が、アースラの空き居室を使ってと言ってくれた。

部下の人が何やらぶつぶつ文句を言っていたが、提督がその人の名を呼んだだけで黙ってしまった。

…何だろう、こういうのが『威圧感』っていうもの…なのかな？

結局、その日はアースラに泊まって翌朝クラナガンを観光して帰る事に。

私はまだまだ提督とお話ししたくて、無理を言って夜遅くまで一緒に過ごした。

私のわがままに提督は嫌な顔ひとつせずちゃんと最後まで付き合ってくれた。

翌日、別れ際に私は提督と一つの約束を交わした。

「リンディお姉さん…じゃなくて、リンディ提督」

「なあに、アリスさん？」

「…今度お会いする時は、あなたの部下として会いに来ますから…約束を」

「…ええ、待ってるわ。
約束よ…頑張ってるね」

そう言っ提督は、母親のように私を抱き締めた。

いつか、一人前の魔導師になった時に…えへんと胸を張って、笑って再会できるように頑張っていこう。

私はこの約束と共に、そう固く心に誓った。

勧誘（後書き）

トレノとリンディの絡みは割と狙いました。

元々はマリノとリンディが親友同士で、その関係からトレノやクライドと仲良くなってます。

トレノはマリノ一筋なので浮気とか一切無いです。
あくまで相手夫婦はお友達でしかないって訳で。

次は悲しい話の予定です。

―嘘？予告―

永遠に続くと思っていた、平和な日々。

だけど…突然襲いかかってくる『終焉』の時。

それはとても悲しく理不尽で…少女の心に、深い傷を残す。

次回『暴走（仮題）』に、ドライブイグニッション！

暴走

「はっ、てやつ、たぁ！」

「えいつ、それっ、やつ、はいつ！」

え、何をしてるのかって？

魔法を使わない戦い方の、模擬訓練ですよ。

といつても実際は、これに魔力を上乗せして戦うのでこれがちゃんとできないと魔導師にはなれないらしいのです。

私は将来必ず持つ事になる『デバイス』に見立てた、木の棒で。

お姉ちゃんは本人の希望で格闘技をベースにした戦闘魔術・ストライクアーツで修行をしている。

「よし、そこまで！」

…2人とも、随分レベルが上がってきたな。

そろそろ、資質を重視した実戦練習へ切り替えようと思う」

「ホント！？」

「ああ、本当だ。

アリスも、最近はセレスの勉強を手伝ってばかりで不満だろうしな」

ちなみに今は私がこの家族の一員になってから2年が経とうとして

いた。

勉強というのはもちろん、魔法の構築理論や応用展開といったいわゆる座学。

普通の勉強はお姉ちゃんも割と優秀…のはずだけど、やはり勝手が違うのかな？

私の方は…お父さんが言う通りお姉ちゃんを手伝えるくらいかなり進んでる。

逆に体を動かす方は逆立ちしても敵わない。

言ってみれば私が理論派、お姉ちゃんが行動派…ってところかな。

丁度いい時間になったので昼食になった。

毎日がとても充実してて、不満は何もない。

あの日のリンディ提督との約束に向かって一直線に、だけど堅実に進んでいた。

…そう、この日まで。

昼食の後、私は村の近くの森に1人で来ていた。

2年前、私が倒れていたという森。

今はここで、魔導師に必須の集中力を養う訓練をしている。

スフィアと呼ばれる魔力の珠を出したり、隔離結界を展開する練習をするのにはこういう静かな場所が向いているらしい。

事実、ここで練習を始めてから驚くほど訓練の効率が上がった。

目を閉じてスフィア展開のイメージを固める。

一個…二個…私の周囲に、金色の魔力球が次々と出現していく。

お父さんは5個を15秒で出せば合格と言っていたけど、今の私なら10秒で10個出せる。

いつも通りスフィアを展開してそのまま収め、今度は隔離結界の練習に入る。

一人前の魔導師だとかなり広大な範囲を隔離する事ができるらしいのだが、私はまだまだ半人前もいとこなので自分の周囲ごく一部しか隔離できない。

ちゃんと訓練を受ければ並の魔導師なんか相手にならない程になる…とお父さんは言っていたが、正直実感がわかない。

まあ、とにかく今は自分にできる事を一つ一つ確実にやっていくしかないな…と思っている。

結界を解除し、意識を元に戻したところで村の異変に気づいた。

私が急いで戻り結界に干渉すると、そこは平和な村が一変して殺戮の嵐となっていた。

数名の魔導師らしき人達が村の人達をバインドという拘束用魔法で動けなくしたあと攻撃魔法で…あたかも射撃訓練の的でも撃つかのように、一方的に殺害していく。

私はこっそり習得していた視認・探知阻害魔法を使い可能な限り近づいてみた。

リーダーの男が足蹴にしている人をよく見ると、何とお父さんだった。

何重にも張られたバインドで縛られ、転がされているお父さんは、必死に犯人を睨み付けていた。

そうこうしている間にも、殺戮は続いている。

そしてリーダーの元に女性と女の子の2人が連れられてきた。

…お母さんと、お姉ちゃんだった。

そこへ私にお父さん達から念話が送られてきた。

『アリス…聞こえるか?』

『…お父さん?』

『こんな事になってしまい済まない…お前達姉妹だけは護ってやりたかったが、この状況では無理だろう。』

私達3人の代わりに、お前だけは何としても逃げ切るんだ。南の町まで逃げ切れれば、私達の友人に事情を話して管理局に保護してもらえるはずだ。

こいつらは昔私が逮捕した次元犯罪者…お前がかなう相手じゃない』

『イヤ、お父さん諦めちゃダメだよ！
今私が助け…』

『ダメだ、お前はあの約束を忘れたのか！？
リンディ提督と交わした、あの約束を！
私は簡単に約束を破る人間にお前を育てた覚えはないからな…お前の本当の親もそれは望まない筈だ！』

お父さんが私に対してここまで厳しく言い放ったのは初めてだった。

『まず自分の身を守る事を考えろ、泥水を啜るような思いをしてでも生き延びる事こそ大事なんだ…それがお前に教えられる、最後の人としての鉄則だ』

『お父さんっ…！』

ギリギリ探知されない魔力で念話をかわしていたが、リーダーの男はお父さんの様子に気づいて激昂した。

「…何やってんだあ！？
いい度胸じゃねえか、この状況で念話とはな！
誰と話してやがんだ…ま、大方『2人目の娘』だろうがよ！」

…この人、私の事を知っている！？

「おら、隠れてねーで出てこいよ！

大事な家族が潰れたトマトみてえになるのは、見たくねーんじゃねーのか！？」

私が躊躇っていると、男はさらに声を張り上げた。

「かーっ、情けねえ！

ま、ガキにそんな事できるはずねえか…。

聞こえてんならチャンスやるぜ！

俺と一対一で勝負して勝ったら3人を返してやるよ！」

私はその言葉に、阻害魔法を解いて男の前に立った。

「…ほー、なかなかの上玉じゃねーか。

あと10年もすりゃ美人になるぜ？

だが諦めな…！ テメエらは、ここで死ぬんだよ」

私は男を睨み付けた。

…許せなかった。

穏やかな暮らしを壊された事が。

大切な人達を傷つけられた事が。

命を何とも思わない彼等の凶行が。

そして…私はスフィアを、できる限り展開した。

それが合図となり、私達は魔法をぶつけ合った。

基本魔力値は私が上だが、習熟で劣るうえ相手がBJとデバイスを所持しているため少し押されている。

「はん、こんなモンか？

ま、ガキにしちゃよくやる方だな…！」

仕方なく、私はこんな時のために練習していたスキルを使う。

マルチロックオン…複数の目標を捕捉する技能。

これで牽制し勝負を有利に運ぼうと考え、発動した。

私の狙いはうまくいって、男のBJを破損させた。

しかし…

「おお、いいねえ〜！

いい腕してんじゃねえか、予定変更だ…オメーの限界見せてみるよ！
出せねえってんなら無理にでも出させてやんぜ…！」

そう言って男はデバイスを私の家族に向けた。

「っ、やめて!!」

勝負が終わるまで手を出さない約束のはず!!」

「ああ!？」

何綺麗事言ってやがる!!」

俺達や元々、お前の親父にお礼するためにこんな田舎まで来たんだよ!!」

『大切なもの』をみんな、ぶっ壊してやる為にな!!」

狂っているとしか言い様のない身勝手な理由。

「…やめて…」

絞り出す。

「…やめて…っ!」

声を。

「やめてええええっ!!」

悲痛な叫びとなって辺りに響き渡る。

そして…『死神の大鎌』が容赦なく振り下ろされた。

狂気に彩られた魔力光が、私の大切な『家族』3人を骸へと変えてしまった。

「あ…ああ…!」

「はん、エリートと言えど魔法がなきゃ怖かねえよ。
さて、お前の本気を見せてみる…よ…?」

そこでようやく、男は私の『変化』に気づいた。

「あ…あああああああああああああ!」

私は怒りと悲しみの感情を爆発させた獣のような絶叫を発していた。

近代的な作りをした医務室のような部屋で、私は目を覚ました。

あれからどうなったのか、全く覚えていない。

ただ解っているのは…あの村が跡形もなく消滅して、あの犯人達も犠牲となった村の人達と運命を共にしたらしいという事だ。

数日後、私の村はミッドの地図から削除された。

事情を聞いたリンディ提督が私のところに駆けつけてくれた。

「お久しぶり。

…具合はどうかしら?」

「リンディ…提督…」

「聞いたわ、例の話。

その…薄っぺらく聞こえるかもしれないけど、元気を出してね。
あなたのそんな顔を見るのは私も辛い…」

「提督…私…私…っ！」

提督は何も言わずに、私を優しく抱き締めた。

「…何も言わなくていい、思いきり泣いて、悲しみを洗い流すのよ！」

その女神のような優しさに私の涙はどんどん溢れて…提督の制服の、胸の部分を濡らした。

「うつ…うあああっ…！」

提督は私をただ抱き締め、母親がするように私の頭を撫でていた。

私が一通り泣き叫んだあと提督が切り出してきた。

「ねえ、アリスさん…。」

あの時の約束、憶えているかしら？」

「…約束…はい、ちゃんと憶えてますよ。破っちゃいましたね…」

「いいえ、私はそう思ってないわ。

それで、提案なんだけど…このままだとあなたは聖王教会の孤児院に入れられてしまうの。

でも…あなたさえ良ければ私はあなたの保護責任者になりたいのよ。実はあなたの『ご両親』にあなたの事を頼むと言われててね…」

「…そんなにも気にかけて頂いて、嬉しいです」

「じゃあ…」

「…申し訳ないですけど、お断りさせて下さい」

「…えっ、どうして!？」

「私はあの村の人達全員の血で生かされている…もう暖かな環境には、戻る事ができないかもしれません。」

「…失う事が、怖くなっただんです。」

「失うくらいなら、最初から望まなければいい…」

自嘲気味に言う私。

「…アリスさんっ!!」

次の瞬間、私は提督に頬を引っ叩かれていた。

なぜ叩かれたか解らずに、私は目を丸くする。

提督の目から宝石のような雫が滴り落ちる。

「…お願いだから、そんな悲しい事を言わないで。私はあなたに幸せになって欲しくて言ってるのよ」

「提督…」

「あなたが決めた事なら、孤児院に行っても私は何も言わないわ。」

でも幸福を望まないなんて絶対に間違ってる。

人はみんな少しでも幸せになるために生きてるの。

それを放棄するのは死んでいるのと同じなのよ。

あなたがそんな考えをしてたら、あなたを生かすために犠牲になった人達の死は全部無駄と言われるの。

あなたはそれでいいの？」

「…すみませんでした。

そうですよ…何でこんな簡単な事に気づかなかったのかな…私、どうかしてたのかもしれない…」

退院後、結局私は聖王教会系の孤児院に入る事に。

そのさらに数カ月後、私は管理局・嘱託魔導師の採用試験を受けた。

結果は…見事一発合格。

認定魔導師ランクは、何とA A +。

7歳でこれは、驚異を通り越して化け物だ…と、提督の親友のレティ・ロウラン提督が言ったとか。

…すみませんね化け物で。

そしてその翌月付けで私は希望通りアースラへ配属となったのだった。

「アースラへようこそ。

アリス・インテグラさん」

「よろしく願います、ハラウン提督。

それと…クロノさん」

これからはアースラを拠点として、様々な任務に従事する事になる。

「ああ…君のように優秀な人材が加わってくれと、こちらも助かるよ。

…あと僕の事は呼び捨てにしてくれて構わない」

提督の息子さんのクロノは多少融通効かないみたいだけど…悪い人では無さそうだ。

もう一度やり直せるかな、新しい自分を…。

それからだいぶ経って私は白と黒の『魔法少女』3人との出会いを果たす。

私の物語は、まだ始まったばかり。

暴走（後書き）

次元犯はスターオーシャン3のビウィグとノートンがモデル。

そして村消滅は同作主人公フェイト・ラインゴッドの特殊能力がモデル。

アリス↓アリシア↓

フェイト（なのは）↓

フェイト（S O 3）

…って事で（笑）

次はようやく無印・A SになりますがA Sはともかく無印には基本的に介入しません。

あ、でもプレシアがアリスを見て驚くところも見てみたいかも。アリスは基本的にアリシアですからね。

入局（前書き）

デバイス・アルテミシアのお披露目です。

相変わらず稚拙な文ですね…：すいません努力します。

では、どうぞ。

入局

あの悲劇から数日後、私は聖王教会系列の養護施設に引き取られる事となった。

古代遺失物・ロストログアや私のような次元犯罪者によって、身寄りを奪われた子供達が暮らしている。

中には魔導師としての才能を見出され管理局員になる子もいるとか。私はリンディ提督と約束があるので、それ程遠くない未来にここを出る予定だ。

リンディ提督が色々と奔走してくれたお陰で、3ヶ月ほど訓練校の生徒さん達と一緒に魔法の訓練をさせて貰える事になった。

それに伴い、管理局の技術部が私のデバイスを作ってくれるらしい。今日はそのデバイス製作の方針を決めるために、私の意見が欲しいとの事で本局技術部を訪ねたのだ。

技術部に着くと、若い女性局員が出迎えてくれた。

「アリス・インテグラさんですね？
ハラオウン提督からお話は伺っています」

局員さんは自己紹介すると私を会議室のような部屋に通した。

「早速ですが本題に入りましょう。
あなたの魔導資質に合わせデバイスの基本型を作るんですが…何か
形状に希望はありますか？」

私は自分の思い付くままに要望を出した。

「…近付かれても離れてもすぐに対応できる柔軟さが欲しいです。
あと、それとは別に接近戦特化型でナックルみたいな形態も」

その他にも色々要望を出し一時間後方針が決まった。

まず、近・中距離戦対応の西洋剣型武器「ソード」。

ミッドチルダ式では離れて戦う傾向にあるため、近接戦闘用の武器
を模した形状となると新たに作る必要があるのだと言われた。

それでも私はあえて希望をそのまま通して貰った。

根拠はないけど、何年後かに私と似たようなスタイルの魔導師と出
会うかもしれないと思ったから。

次に射撃・砲撃重視形態。

これは、既存のデバイスを外観ベースにしているので割とすんなり
決まった。

そして一番苦労したのが、接近戦特化型。

これはグローブより手甲の方が適しているので、そう決まったのだ

が…。

形態変化の時にどうしても時間を要してしまうらしく交戦状態での形態から、あるいはこの形態への変更が難しくなるらしい。

要するに使う時は最初から使えという事のようなのだ。

「…それと、恐らく規格はインテリ型になるから使う言語を決めて一応『地球』での主要言語は大抵使えるけど…これがデバイスに使える主要言語のリストよ」

英語（ミッド式）・仏語・独語（ベルカ式）・露語…色々ある。

その中で私はミッドチルダ主要言語である『日本語』を選んだ。

日本語なら、いちいち頭の中で訳さなくてもいい…という単純な理由だった。

それに理解の高い言語ならより早くデバイスに愛着がわくかもしれないし…。

そんな訳で、かなり無茶を言ったかもしれないけど…可能な限りは、要望通りに作ってくれるとのこと。

私は完成の連絡が来るのが今から待ち遠しくて仕方がなかった。

約3週間後、ようやく本局からデバイスが完成したと連絡を受けた。

施設職員さんと一緒に本局に行くと、あの時の技術部職員さんと一緒にリンディ提督がいた。

「アリスちゃん、こんにちわ。

かなり難しかったけれど、あなたの無茶な要望通り…いいえ、それ以上の出来に仕上がったわ」

「アリスさん…あまり無茶言って困らせちゃダメよ？

それはともかく、あなたもやっとデバイス持ちね。

早速起動してみて。

デバイスに魔力を送って、自分の情報を登録してから名前をつけてあげて。

この『マスター認証』っていう手順を終わらせたなら、晴れてあなたの相棒が目覚めますわ」

私は完成した新型デバイスに魔力をゆつくり送る。

『…マスターの魔力情報を認識しました。

初めまして、あなたが私のマスターですね？

あなたのお名前を登録したあとに、私の名前と愛称をつけて下さい』

デバイスからは優しそうで可愛い女の子のような電子音声がかえった。

「…私の名前は、アリス・インテグラ。

デバイス識別名称を登録。

知性と美貌を兼ね備えた、雄々しくも優しき海の女王『アルテミシア』。

登録する愛称は2つ…。

『アルティ』『アル』

『はい、マスター認証完了しました。
よろしく願いしますね、御主人様』

最後、何か凄い単語が出てきたような…？

「え…アルティ、今なんて言ったの？」

『はい？』

ですから、御主人様と。

アリス様は、私のマスターなのですから…そう呼び出した方がよろしいかと』

「あらあら…随分と従順なデバイスねえ。

ね、アリス『お嬢様』」

リンディ提督が、ニヤニヤして私をからかう。

「て、提督…！

冗談はやめて下さい！

アルティも、そんな呼び方しないで！

普通に『マスター』でいいから…あと『様』をつけるのも禁止！

私達は相棒同士なんだから様づけはおかしいよ！」

その時、アルティが器用に笑っている気がした。

…デバイスなのに。

『くすくす…すみません。』

マスターと私の間に遠慮をなくすための、私の気遣いだと思って下

さい』

インテリジェントデバイス『アルテミシア』の性能は色んな意味で想像を超えていた。

戦闘のサポートは言う迄も無いがコミュニケーション能力が凄いのだ。

まるで人間みたいに接する彼女に最初は戸惑ったが、囑託魔導師採用試験を受験する頃にはすっかり仲良くなった。

彼女はずっと前から一緒のような安心を与えてくれるとてもいい機こ体。

機械とは思えないほど感情豊かで、優しくてちょっとお喋りな子。

私はこの、いい意味で人間臭い彼女が好きだ。

…今日も私は、アルティと一緒に魔法の練習。

『…さあ、今日も頑張っていきましょうか』

「うん…今日は何を覚えてくれるのかな？」

『そうですね…空戦機動がまだ十分とは言えないのでそれを練習しましょう。』

この間と同じ要領で練習を重ねればすぐに十分動けるようになりま
すよ」

「ん、アルティと一緒に私はもつと頑張れるよ。
これからも、至らない私をサポートしてね？」

「ええ、もちろん。」

私はそのためにいるんですから…これからもよろしくお願いしま
すね。

とっても可愛らしい、私のマスター…」

「ありがと、アルティ。」

それじゃ…いくよ！」

「はいっ、マスター！」

「『アルテミシア』…！」

セーット・アープ…！」

『スタンバイ・レディ！

バリアジャケット・セツトアープ！』

どこか拙い英語でアルティは稼働を開始する。

私のバリアジャケットは…体にフィットした女性用の水着みたいな
ワンピースにベルトで留めたスカート、
オーバーニーソックス風のタイツとマント…ほとんど全部が同系色
の白。

…誰ですか、白スク水とか言ってるのは？

髪をまとめているリボン是自己主張という事で、蒼のまま変わらない。

普段のツインからポニーになっているもののちょっと恥ずかしい。

この「エリアルフォーム」（私命名）は空戦機動力が高め。

こう見えて意外と耐久力は高く、攻・防・速と三拍子揃ったバランスのいい性能になっている。

アルティと一緒に練習するようになってから、確実にレベルアップしてる感じはするけど…比較対象が無いからいまいち実感する事ができない。

私と似たようなスタイルの魔導師がどこかにいたら…なんて無い物ねだりしても仕方無いのは解っているんだけど…。

『…さすがですね。』

才能があっても、普通ならもつと時間をかけて覚えるものですが…。マスターは本当に空を飛ぶのが好きなようですね、凄く楽しそうですねよ。』

「えっ…そうかな？」

飛んでると風が気持ちいいから、ついつい楽しくなるのかもね」

いつもこんな感じで、主従というよりむしろ友達同士みたいに気軽に話している私とアルティ。

…ハイそこ、どこぞの死神少女と狼少女とネコ耳少女みたいだとか
言わない。

…って、誰ですそれ。

ともかく、私はアルティの助けもあつて囑託魔導師の試験を万全の
状態で受ける事ができた。

「ねえ、アルティ…」

『何でしょうか?』

「私、合格できるかな」

『大丈夫、自分に自信を持つて。
絶対に受かるというくらい自信を持たないと、本当に受かりません
よ』

「…そうだね、自信を持つ事が一番大事だね。
ありがとう、アルティ」

『どういたしまして…さ、そろそろ始まりますよ』

「…うん!」

「準備はよろしいですか?
それでは、囑託魔導師及びA A +ランク認定の試験を始めます」

担当試験官の魔導師さんの合図で開始された。

今回は実技で、筆記は事前に行われている。

筆記の手ごたえはバッチリだったので、まず問題なく通過しているはずだ。

お昼の休憩を挟んで数時間後、試験は終了した。

可否は最速で実技の直後と聞いていたので、私は早く結果が知りたかった。

担当試験官の魔導師さんはしばらく私にここで待っているように言っ
て何処かへ転移してしまう。

こんな時こそ、アルティに何かを言って欲しいのに…彼女は何も言
わない。

どうしよう…私不合格なのかな、合格しなかったなあ…と沈んでい
ると、不意に声をかけられた。

「あらあら…そんなに自分の出来に納得いかない？」

聞き覚えのある声に驚いて振り向くとリンディ提督が誰かと一緒に
立っていた。

「あの…リンディ提督？」

そのお姉さんは…？」

すると『お姉さん』は口許を綻ばせた。

「…リンディの言った通り随分空気の読める子ね」

「でしょ？」

もう娘みたいに可愛くって仕方がないのよ。

まあ実質、娘みたいなものだけど」

ニコニコしているリンディ提督。

はつと我に返った提督は、咳払いをして姿勢を正す。

「ああ、ごめんなさいね。

彼女はレティ・ロウラン、私と同じく管理局の提督で学生時代からの親友なの。

今回の試験の採点は彼女が担当しているわ」

「アリス・インテグラさんよね？」

…はじめまして、レティ・ロウランです。

まずはランク認定と嘱託の試験お疲れ様でした。

それでは、両試験の結果を伝えます。

ランクの認定ですが、全て基準をクリアしているので合格となります。

嘱託採用試験の方ですが…筆記・実技ともにA評価。

これで落とす訳にいけないので、この後簡単な面接を受けてもらい晴れて採用となります」

「おめでとう、本当によく頑張ったわね」

提督はそれだけ言って私をぎゅっと抱き締めた。

血縁も法的な繋がりもないけれど…私にとって、もうひとりのお母さんと言えるリンディ提督。

…いつか本当の『母娘』になればいいな…。

私はそう思いつつ、赤子のように提督の柔らかな体へその身を預けた。

数日後、私は提督と一緒に管理局次元航行部隊所属・L型航行艦船「アースラ」へ乗艦した。

「…という訳で本日から、アースラに新しいクルーが加わります。…さ、自己紹介して」

「…常駐武装要員として、本日付でアースラの所属となりました。アリス・インテグラです。

囑託の上に若輩で至らないところが多々ありますが、どうか皆さん宜しく願います」

わき起こる大きな拍手。

『頑張れ〜』とか『わあ、かわいい〜！』という声が聞こえて、私は恥ずかしくなり顔が赤く染まる。

これから時空管理局非常勤職員としての新たな生活が始まる。

誰かが言ったかもしれない「…ほんとの自分を始めるために、いままでの自分を終わらせよう!」と言える瞬間だった。

入局（後書き）

アリスが局の囑託魔導師になりました。

設定の段階で気づいたかもしれませんが、アルティの性格はリニスです。

フェイトに対するサービスみたいなつもりです。

フェイトの名ゼリフが多いのは、アリスがアリシア…フェイトと同じだから。

アリシアも大人しく優しい性格になれば、フェイトに自然と似てくるという理屈ですね。

将来的には、アリスの方が若干明るくなります。

別離（前書き）

アリス「…ねえ作者さん」

はい？

アリス「無印やA sには、基本的に介入しないはずだよね？」

…前は確かに、そういつてました。

アリス「じゃあ、これは何かな？」

いやね、いきなり3期っていうのは少し味気ないかと思って…。

アリス「それにしたって、1万文字超えは長すぎだと思っよ？」

あのね、ふえるワ メみたいに書きたい事がどんどん増えてってね？

アリス「…まあ面白いなら別にいいんじゃないかとは思っけどね」

…それでは無印及び映画のあの名場面です。

別離

新暦65年。

あの悲劇から、2年が経過しようとしている。

時空管理局の嘱託魔導師になってからの私は、任務として実に多くの世界を渡り歩いてきた。

…といってもクロノや他の先輩方と一緒にだけ。

この1年余り、私の仕事は異常生物の討伐に随行して経験を積む事だった。

どうも私はデバイスの影響と先天資質から、後方支援より前衛迎撃の方が向いているらしい。

そのお陰というか何というか、今は私の事を『純白の小天使』と陰で呼んでいる局員が多いとか。

「只今戻りました、提督」

出向任務から帰り、提督に挨拶すべくブリッジに行くと…クロノや、エイミー・リミエッタと一緒にとある記録映像とにらめっこしている提督がいた。

「3人共何見てるの？」

「うわ!？」

…何だ、アリスか…。

いるならいるってちゃんと言ってくれ…」

ちゃんと、3人に聞こえるよう言ったのにな…。

提督とエイミーは私が映像を確認する前にモニターを消してしまった。

どうやら、私に見られるとマズいものらしい。

そんなものがそうあるとは思えないけど…。

すると提督が内容を話してくれた。

「…お仕事に関する、映像データよ。

ある管理外世界からのものなんだけど…」

言葉を濁す提督。

どうやら私を参加させられない理由があるらしい。

「…提督、どうします？」

この事件にアリスちゃんを関わらせるのは酷だと思えますけど…」

エイミーが、提督に意見を求める。

「そうね…確かにそうなのかもしれないわ。
けど、決めるのは彼女。」

私達にそれを止める権利はないわ」

提督は神妙な面持ちで私に向き直り、覚悟を聞くため口を開いた。

「アリスさん…よく聞いてね。

今回の『任務』はあなたに関わって欲しくないの。

最悪、あなたの心が壊れてしまいかねないから。

それでも構わない…と言い切れる覚悟があるのなら、内容を話すわ」

私の答えは、最初からただひとつだ。

「…話してください」

自分にできる事をする。

「困っている人を見過ごすなんてできません」

自分の力全てを使って。

「どんな状況にも、耐えて見せますから」

自分のような悲しい存在をこれ以上増やさぬため。

「…提督、任務内容を」

「提督、僕らの負けのようです。

彼女に任せましょう。

こうなった彼女は僕よりも頑固ですからね…」

クロノの言葉で諦めたように溜息をつき、提督は私に話をしてくれ

た。

「…わかったわ。

まず、さっきの写真を見てもらわないとね。

エイミィ、お願い」

「了解」

何とも軽い口調でパネルを操作するエイミィ。

普通なら問題のある態度だが、この気さくさが彼女のいいところなのだと提督も黙認している。

映し出されたのは、小さな青い宝石のような石。

「これはジュエルシードと呼ばれる、願いを叶えるとされている石よ。

正確には『ロストロギア』なんだけど…」

「ロストロギア…？」

確か超文明の遺産で莫大な魔法のエネルギーを有し、暴走すれば次元世界を複数

容易に破壊できる危険指定物品ですよね？」

「そうだ。

この『ジュエルシード』を巡って、ある管理外世界でちょっとした事件が起きているんだ。

その関係者の一人…いや、正確には二人が今アースラ（ここ）にいる。

彼らと話し、協力して事件に当たってもらいたい」

「わかりました…それで、その人達は？」

「今は居住区の41号室で休んでもらっているの。
…これがアリスちゃん並にかわいくってね。」

「エイミィ、不謹慎だぞ」

「へいへい、ほんとクロノ君は真面目だよな。」

「艦^{ふね}にいる間は、常に仕事中の様なものだ。
端から見ると、君が一番だらけていると思われるんだぞ？」

「あはは…まあまあ。」

「それじゃお話聞いてきますね」

「そう言って私は居住区へと向かった。」

「私が退出する間際、3人が何か話していたような気がする。」

「…いいんですか？」

「あの子の事言わなくて」

「『彼女』に会えばいずれわかってしまうわ。」

「『彼女』が『あの子』と、『お話』したがっている事くらいは…」

「アースラ居住区。」

『事件』の関係者がいるという部屋に着いた私。

インターホンを鳴らし在室を確認する。

「どうぞ〜！」

まだ幼い…同い年くらいの女の子の声が聞こえた。

中には予想通り、同い年に見える女の子。

綺麗で大きい、吸い込まれそうな笑顔がきつと似合う蒼い瞳と長く
白いリボンでツインテールに纏める栗色の髪。

もちろん顔立ちも非の打ち所がない、まるでアニメや漫画に出てる
『美少女』の様な子が…そこにいた。

私もよく容姿をほめられているけど、たぶん私よりも…って、そう
じゃない。

見るとその子も私の容姿に驚いていた。

でも、彼女はまるで『本来ならここに居るはずのない人が居る』と
言いたそうな顔で私を見ている。

「…ふえ…」

彼女が声を絞り出す。

「ふえいと…ちゃん…？」

「どうやら『私にそっくりな知り合い』の名前らしい。」

思わず平仮名になっているのにも気づかない程驚いたようだ。

「…じゃないよね、ごめんなさい」

だがすぐ我に返り、慌てて謝る。

「ううん、大丈夫だよ。」

えと…初めましてだね、アースラ所属武装部隊員で管理局嘱託魔導師のアリス・インテグラです。

あなたのお名前は？」

「わ、私…高町なのは！」

私立聖祥大学附属小学校の三年生で…あの、その！」

……？

どうやら知り合いと余りにイメージが近かったのか、あたふたしながら自己紹介する彼女…高町なのは。

「なのは…うん、いい名前だね。」

私の事はアリスって呼んでいいから、私もなのはって呼んでもいい？」

私のその言葉と、まっすぐになのはを見つめる視線が彼女の顔を更に赤くする。

「ふええ！？」

そ、そんな～！」

更に気が動転したらしく、あわあわしている。

そして、私にとっては何気無い提案が彼女にトドメを刺してしまった。

「…そうだ。

私この歳で仕事してるから友達が少ないんだ…。

良かったら友達になって…くれる、かな？

…なのは（くすっ）」

「……はうっ」

頭から湯気が出そうな程、顔を真っ赤にしていわゆる『ばたんきゅ』となってしまったのは。

なんたる…いろいろ手順をすつとばして、かつ横取りしているような気が…。

「だ、大丈夫!？」

私が慌ててなのはの状態を確認すると、譫言のような彼女の声が聞こえた。

「うっん…ふえいとちゃん…こんなに早く『友達』になれるなんてえっ…」

…『似ている子』の名前。

どうやらなのははその子と本気で友達になりたがっているようだ。

ともかく埒が開かないので正気に戻ってもらったため、私は彼女のおでこに手刀をお見舞いした…といっても軽くだけ。

「（ゴツ）痛っ!？」

あう…アリスちゃん、酷いよお…」

「…しっかりしようね。

これから、私達は味方同士なんだから…。
ところで…その子は？」

「あ、この子はユーノ君。

こんな見た目だけど、私と同じ魔導師さんなんだ」

「魔導師…という事は」

『…初めまして、ユーノ・スクライアです。

僕もあなたと同じ、魔導師なんですよ。

ブリッジにクロノっていう少年がいたでしょ？

彼と僕は知り合いで…』

『…ストップ、管理外世界じゃないんだから別に念話じゃなくてもいいよね？

それと、早く事件の詳細が知りたいの。

…話してくれる？』

色々と長くなりそうなので私は強引に話を切った。

『…わかりました。

でも、なのはは僕の本当の姿を知りません。

だからこのまま話を進めていいですか？』

『うん、それでいい。』

あと、敬語は使わなくてもいいよ？』

『わかったよ…じゃ…』

念話を切り、今までの経緯を話し始めるユーノ。

かいつまんで説明すると…ユーノが属していた考古学探索チームが発掘した件の『ロストログア』である、ジュエルシードが輸送中に事故に巻き込まれて第97管理外世界…つまりなのはの世界・地球の、更に彼女の故郷である『海鳴市』に散ってしまったらしい。

しかもマズい事にジュエルシードを集めている人達が他にもいるという。

なのははその人達の片方が私にそっくりだという。

そして今はそのフェイトという子と、本気で勝負する約束をしたらしい。

それならば当面私の出番は無いな…と思い、それでは私達が協力する事の意味がない事に気づく。

二人の真剣勝負に水を差す訳にはいけないので、魔法のちょっとした応用技術を教えようかと考える。

「…なのは、少しいい？」

バインド…って解るよね、あれを早く外すコツがあるんだけど…」

「え、ホントですか!？」

食いついたところを見るとどうやらバインドが得意な相手らしい。

「うん。

口で言うより実際に見せた方が早いね…バインドを、私に強くかけてみて。

遠慮無しのギチギチでいいからね」

「え…大丈夫ですか？」

「うん…お願い」

なのはは小さく詠唱して、術式を完成させる。

次の瞬間、バインドの光が私の体を隙間なくガツチリと縛りつけた。

「こんなに…きついなんて…ちよつと…誤算…かな。
じゃ…よく見てて、一瞬で解けるから…ふっ!」

私が短く気合を入れると、あれだけ強力なバインドが悉く崩れていく。

「え、ええ!？」

一体どうやったの!？」

「そんな難しくないよ。

瞬間的にバインドへ魔力を直接流し込んで、構築式の自壊を促したの。

例えるなら大きく膨らんだ風船に、更に大量の空気を送って破裂させたような…わかるかな？」

「…ああ、なるほど」

私の説明にうんうんと頷くのは。

そしてなのも同じように拘束をあつさりと崩す。

「…なののはは凄いね。」

たった一度見ただけで簡単に真似しちゃうなんて」

「ふえっ！？」

そそそ、そんな事無いですよ！！

これでもかなり難しかったんですよ！？」

私の素直な賛辞に、またも茹で蛸のように顔を真っ赤にするのは。

そのあとはお互い、他愛の無い話をした。

なののはのご両親が経営する喫茶店「翠屋」に、いつか行ってみたいと私が言つとなのはは絶対に来てね…と言った。

数日後、なののはは『決戦』のために一度海鳴へ戻っていった。

私も万が一の事態になった時万全の状態であるために艦内で待機していた。

私が暇そうにしていると、なのはと私がお話してから珍しくずっと沈黙していたアルティが突然話しかけてきた。

『マスター、お暇でしたら少し私の話を聞いてもらえますか？』

「どうしたの、アルティ？

珍しく、ずっと黙っていたけど…」

『なのはさんが気になっている、フェイトという子について少し調べていましたので。

…どうやら、かなり複雑な事情があるようです』

「どんな事情なの？

…話してくれる？」

『…わかりました。

フェイト・テストロッサ。

とある事故を引き起こしたとして表舞台を追放された魔導師、プレシア・テストロッサの…表向きでは娘という事らしいですが…』

「…表向き？

じゃあ実際は違うの？」

『ええ。

プレシアには、追放された理由とされる事故で犠牲となった一人娘がいます。

アリシア・テストロッサ…あくまで外見の話ですが、フェイトさんやマスターと瓜二つなんですよ。

なのはさんが、マスターをフェイトさんと勘違いしたのはそのためです』

思わず息を呑む私。

『プレシアは同じ技術者の夫との早期離婚後、再婚はしていないようです。』

元夫との間の娘だと年齢が合いませんから、本当の娘ではないと推測します』

アルティは更に続ける。

『それに、フェイトさんとなのはさんの交戦記録映像におかしなところがあるんですよ…』

「え、画像加工とか？」

『いえ、そうではなくて…最初と最近では二人の力が接近しています。』

この短期間であり得ない程拮抗しているんですよ。

もしかするとフェイトさんは何らかの理由で日を追う毎に弱ってきているのかもしれない。

それが病なのか、それとも別の原因なのかは…わかりませんが』

フェイトの身を案じているアルティ。

でも、私達にはどうしようもない。

これは…彼女達自身の問題だから。

そして…その日が来た。

97 管理外世界『地球』の島国・日本、その海沿いの街…海鳴市。

なのはの地元であるこの街を決戦の舞台に指定したのは、他でもないのは。

フェイトもジュエルシード収集のため近くに活動拠点を持っているはずだけど、それはこの際どうでもいいことにしよう。

約束の時間まであと5分となったところで、例の二人がやって来た。

ちなみに私はユーノと一緒にこの決闘を見届けるためなのはから少し離れた位置にいる。

「…来た！

アリス…あの金髪の子が、例のフェイトって子だ。
一緒にいるのは、あの子の使い魔のアルフだよ」

ユーノが私に教える。

…なるほど、遠目に見ても判るくらい私に似てる。

違いはバリアジャケットが黒を基調にしている事。

それはまるで大罪を犯した者を裁くために遣わされた『金色の幼き死神』…。

私がそんな事を考えていると、急に二人が私に念話を送ってきた。

『…あんた、誰だい！？
フェイトにそっくりな顔をしてるけどさ…！』

『アルフ、落ち着いて。

…あなたが何者なのか私は知らないし、知るつもりもありません。
ただ、あの子との戦いの…邪魔だけはしないで』

『…わかってる。

私は見届け人、余計な手は出さない。
ただしどちらかが命の危機に瀕する恐れがあると判断したら、力ず
くでも止めるよ…それでいいなら』

『…構いません。

配慮、感謝します』

『…フェイト、本当にいいのかい？』

『…あの子の力は私よりも遥かに強い。
敵に回す必要が無いのならその方がいいし、今はあの白い子との戦
いに…全力を注ぎたいんだ』

『何だって！？』

フェイトよりも強いなんてあの子と、あいつだけかと思ってたけど
…！』

…アルフ、念話がこっちにも聞こえてるよ。

あいつというのは恐らく、プレシアの事だろう。

プレシアは追放されるまで魔導師としても、技術者としても極めて

優秀だったと聞いている。

アルフがフェイトから離れなのははフェイトと会話をかわす。

「…来てくれたんだね。

嬉しいよ、来てくれるとは思ってなかったから…」

「…私の目的は、ジュエルシード。

それは今も変わらない。

だけど…君との決着は私も望んでいた事だから…」

時刻は明け方。

「そっか…。

じゃあ…始めよう………」

まだ薄暗く、朝靄が視界を狭くする。

「うん……。

最初で最後の………」

そんな中、二人の少女が。

『……………本気の勝負!!』

ジュエルシードと、互いの矜持プライドをかけて激突する。

まだまだ肌寒い晩春の朝に魔法の光が踊るのだった。

私とユーノ、アルフの3人は海鳴市で最も高いビルの上屋上に移動し二人の戦いを見守っていた。

もちろん隔離結界は始まる前に私達が張っている。

私は二人の戦いぶりに目を奪われているのに気づいていたが、あえてそれを正す事はしなかった。

何しろなのは魔法の練習を始めてまだ2ヶ月も経過していないらしい。

それで経験で勝るフェイトと互角以上の戦いを演じていられるのは、彼女の素質があまりにも高い…という証拠だろう。

「…でも、それでもあの子はフェイトには勝てないんだよ」

アルフが自分の主を信じる力強い言葉を放つ。

確かに経験やデバイスとの連携はフェイトが上だが、私は気づいていた。

フェイトの動きがこの間の記録映像よりも、わずかに鈍い事に。

恐らくアルティのいう通り何らかの原因でゆっくりと休めなかったのだろう。

いくら総合力で勝っても、体調が万全でなければ意味はないのだ。

片やなのは、自分の家でゆっくり休めており体調は万全。

これでは戦わずして勝敗が見えたようなものだ。

フェイトもそれがわかっていているらしく、次第に焦りの色が見えてくる。

（くうっ…強い…！

でも、私がここで負けたら母さんを…助けてあげられない…。

『あの頃』にも…戻れなくなる…！

何としても…勝つんだ…！

勝って、母さんのところに帰るんだ……！！）

悲壮な決意を胸にフェイトはなのはをバインドで拘束する。

「…まずい、フェイトは…あれを撃つ気だ！

このままじゃあの子…多分死んじゃうよ…！」

「…アルフ、だったよね。

あれ…って一体…？」

私の問いに、アルフは動転しながらも答えた。

「…フェイトの最強魔法、『フォトンランサー・ファランクスシフト』だよ。

正直あの、なのはって子に耐えられると思えない！」

不安げに訴えるアルフ。

次の瞬間、なのはに無数の光の槍が降り注いだ。

大量の爆煙がなのはの周囲を包む。

確かに並の魔導師ならば、ここで終わっていても何ら不思議じゃない。

でも、私とユーノは知っている。

なのはが、わずか40日でここまでのレベルになった事を。

フェイトの体調が万全ではない事を。

そして何より…。

「ふうゝ、危なかった。

アリスちゃんにバインドの外し方を教わらなかったら今頃どうなっていたか…」

なのはが、対処法を知っている事を。

『…なっ！？』

フェイトとアルフが同時に驚きの声をあげる。

なのはが使った手段はまず拘束された状態で砲撃魔法ディバインバスターの詠唱を始め、フォトンランサーを限界までひきつけてからバインドの瞬間破壊とほぼ同時に発射。

これによりバインドの破壊とフォトンの相殺を同時にやってのけたのだ。

一方のフェイトは、決着を急ぎすぎたばかりに詰めを誤ったという事になる。

焦りはミスを呼び、そして自滅への第一歩となる。

フェイトもその例に漏れずなのはに魔法で拘束されて動けなくなる。

「うっ!？」

しまった、バインド……!!」

そこへ、すかさずなのはが新たに詠唱を始めた。

「……レイジングハートと考えた、知恵と戦術。

最後の切り札、ディバインバスターのバリエーション……受けてみて！これが私の全力全開!!」

なのはの前方に魔力が収束される。

「スターライトお……」

桜色の魔力球は巨大な光球となり……。

『Starlight breaker』

「……ブレイカー……!!」

射出された暴力的な魔力の奔流は、一瞬でフェイトを飲み込んだ。

フェイトはなのはに敗れ、魔力も尽きかけていた。

一方なのはも戦闘の影響で魔力を多く消費した。

決闘に敗れたフェイトは、自分の持つジュエルシードをなのはに渡そうとする。

なのはも更に自分が集めたジュエルシードを取り出しフェイトの分と合わせる。

だがそこへ、思わぬ横槍が入った。

無数の雷が放たれ、なのはとフェイトを撃つ。

『なのは、フェイト!!』

私はその場から飛び出し、雷に撃たれた二人をアルフと一緒に救出した。

「いけない…二人共今のでかなり弱ってる。

アルフ、一緒にアースラへ来て！

「ああ、わかったよ！」

「アースラ…エイミィ！

至急転送をお願い！」

『了解っ！

緊急転送陣を展開!』

ジュエルシードは雷に紛れどこかへ消えてしまった。

恐らく、プレシアが奪ったのだろう。

これは…私達アースラ組の失態だ。

フェイトが自分の意思だけでジュエルシードを集めているとは思えない。

今回の決闘を好機とみて、フェイトになのはの申し出を受けさせたのだろう。

そのくらいの事をしてくるのは、私もリンディ提督達もわかっていたのに…。

『…転送開始!』

私は苦虫を噛み潰すような思いで、アルフ達と一緒にアースラへと帰還した。

アースラに戻った私達は、あの雷撃によりプレシアの拠点を掴んだ事を知った。

「ジュエルシードをすべて奪われたのは仕方ない。だが全部揃わなかったのは幸運というべきだ。

今は一刻も早くプレシアの凶行を止めなければ」

クロノが私達を労う。

これから、プレシアの居城『時の庭園』へと突入するらしい。

既にアースラから武装隊員が先発隊として現地に突入している。

『…動くな！』

プレシア・テストロッサ、ロストログア不法所持及び略取教唆等の
管理法違反の容疑で逮捕する！！』

プレシアは武装隊員の口上を意に介さず、虚ろな瞳で虚空を見つめている。

しかし、局員の一人が奥に繋がる通路を発見した途端プレシアの様
子に変化。

『な、何だこれは！？』

死んで…いるのか…！？』

『…私のアリシアに…触らないで…！』

次の瞬間、多数の雷が武装隊員達を襲う。

『いけない、すぐに局員達を転送させて！』

『は、はい…！』

提督の指示で、武装隊員がアースラへ転送される。

なのはとユーノとクロノ、私とアルフはフェイトと共にその様子を見ていた。

ちなみにユーノは、決闘の少し前なのはに自分の正体を明かした。

その時なのはは色々な意味で大変驚き、顔を真っ赤にしていた。

どうやら彼の事をなのはは喋る不思議なフェレットと思っていたように、お風呂も一緒だったらしい。

それはともかくとして今はプレシアである。

通路の奥には大型の水槽のようなものが置いてあり、その中にあった『モノ』に私とフェイトは絶句。

他のみんなも動揺を隠す事ができなかった。

それは…私やフェイトより少し幼いものの、瓜二つと言わざるを得ない少女の…遺骸だった。

私は、その時全てわかってしまった。

『ねえフェイト…聞こえているんでしょう？』

プレシアがなぜ、ジュエルシードを求めたのか。

『あなたの思っている通りよ…』

なぜフェイトという存在がいるのか。

『フェイト…あなたは私の娘なんかじゃないわ』

なぜプレシアはフェイトを虐待したのか。

『…ただの失敗作』

それは彼女の、ただ一人の娘のためだけの狂気。

『アリシアを生き返らせるまでの間、私が慰みに使っただけのお人形
そのために禁じられた術に手をつけたのだ。

「やめて…」

『…だから、あなたはもう要らないわ』

古くからフィクションでも使われてきた、人工生命体の作成…フェイトはそれによって生まれたのだ。

「やめてよ…！」

なのはもそれ以上聞きたくないらしく、悲痛な叫びをあげる。

『…どこへなりとも、消えなさい…！！』

これで確定だ…プレシアはフェイトに対して、娘だと思った事が無い。

先程のように、フェイトを道具としか見ていなかったのだ。

「…プレシアああ…！」

私は怒りのあまり、映像に向かって叫んでいた。

その声は自分でも驚くほど年齢不相応に低かった。

プレシアは私に気づいて、少し驚いたようだった。

『あら、あなたフェイトにそっくりねえ…。』

…でも私には関係ないわ、私はアリシアだけが居ればいい…』

そしてプレシアは映像通信を強引に切ってしまう。

「…アリス、アルフと一緒にフェイトを医務室へ。」

そのあとで話がある」

「うん…じゃあアルフ…」

「わかった、そっちの肩を頼むよ」

「フェイト…」

フェイトの瞳は全てに絶望したかのように虚ろなものとなり、焦点が定まらなくなっている。

信じていた『母』にあんな事を言われてしまったては、心が壊れない方がおかしいと思う。

フェイトをアルフに任せ、私はブリッジへ戻る。

時の庭園に突入し、事件の容疑者プレシアを逮捕するためのブリーフィング。

なのはとユーノが動力炉を破壊、プレシアの逮捕にはクロノと私で当たるといふ事になった。

時の庭園。

傀儡兵と呼ばれる、無数の機械兵器が私達5人を待ち構えていた。

「一杯いるね…」

「だが、こいつらは魔導師じゃない。

ただの機械だ…こんな入口で手間取る訳にいかない。

だから一撃で複数…例えば全機落とせるくらいの魔法が必要だ」

クロノがデバイスS2Uを構え、誘導弾で傀儡兵達を薙ぎ倒していく。

「…こんな風にな」

たった一発で傀儡兵を全て倒すクロノ。

しかし新たに大型の傀儡兵が私達の行く手を塞ぐ。

その時後方から金色の光が傀儡兵を撃つ。

振り返ると、そこには…。

「ごめん、私はもう大丈夫だから…」

アルフの必死の説得が功を奏し、復活を遂げた金色の死神が立っていた。

「フェイトちゃん!!」

「フェイト!!」

喜ぶのはとアルフだが、敵は待ってくれない。

アルフとユーノのバインドで動きを止め、フェイトとなのはによる協力砲撃魔法で撃破。

「私は母さんと話したい。

ただど一人じゃ無理だから君達に手伝って貰いたいんだけど…いいかな?」

フェイトがここに来た真意を私達に伝える。

私となのはの答えは、最初から決まっていた。

『…もちろん!』

フェイトは、私やクロノと一緒にプレシアのもとへと向かう。

そして…。

「…母さんっ!」

プレシアとの対面を果たす私達。

「フェイト…何しに来たの…消えなさいと言ったはずよ…」

「…あなたに、伝えたい事があつて来ました」

それに呼応して、私も口を開いた。

「…フェイトが、ここまであなたを思う理由…決して解らないでしようね…」

フェイトがあれだけ酷い目に遭わされても、プレシアを信じていた理由。

「私が、あなたの娘だからじゃない…」

それは、至極当然の事。

「あなたが私の…」

「あなたがフェイトの…」

『母さんだからです!』

フェイトの思いの丈に私が合わせる。

「…下らない、だから何？」

そのお人形を、娘と呼べとでもいうの？

…笑わせないで!

私の娘はこの子…アリシア一人だけよ」

徹底した完全なる拒絶。

まあ、説得に応じるくらいなら最初からこんな事件は起こしていないか…。

その時、足下が崩れて娘の遺骸と共にプレシアは虚数空間へと落ちていく。

伸ばされたフェイトの手もわずかに届かなかった。

「か……」

その時、私は確かに見た。

プレシアが最後の最後で、フェイトに対し母としての優しさを見せた瞬間を。

『…ごめんなさい、こんな酷い母で。
幸せにおなりなさい…』

あまりにも声が小さすぎて聞き取れなかったが、唇は確かにそう動いていた。

「…母さあああん!!」

母の手を掴み損ねて、泣き崩れるフェイトをアルフが慰める。

崩れ行く庭園から脱出し、私達6人はアースラへ帰還を果たす。

間もなく、庭園は大爆発と共に次元の塵と消えた。

運命を狂わされた、一人の天才魔導師が引き起こした事件は…とても悲しい結末で終わりを告げた。

結果的には次元断層は発生せず、周辺の次元世界にも影響はほぼ皆無。

あれだけ大事件だったにも関わらず犠牲者がプレシアただ一人だったのはむしろ僥倖じやうじんだと、クロノが語っていた。

だが私はやりきれない思いを感じていた。

そしてそれはクロノ達も…なのはやフェイト、アルフも同じだった。

別離（後書き）

アリス「…作者さん？」

な…何ですか？

アリス「決闘と対峙なのはまあいいとしても、何で私フェイトよりも先に彼女と友達になってるの！？」

いや…それは…。

アリス「しかも、なんだか妖しい関係っぽいフラグが立ってるじゃない！」

き…キノセイデス…タブン

アリス「何で片言！？」

……………（逃）

アリス「ちょ、待てー！

逃げるな〜！！」

…という訳で、無印編でした。

無印はもう一話ありますがAsは…どうしよう？

3期も、かなり短くなってしまいかもしれません。

感想などお寄せくだると嬉しいです。

名前（前書き）

あの有名シーンにアリスを絡ませるのは難しい…。

って事で無印ラストです。

名前

『ジュエルシード事件』の終結から、今日で一週間。

結局事件は『主犯格であるプレシア・テストロッサが娘としていたフェイトに、虐待によりジュエルシード収集を強要していた』…という結論となった。

真偽はともかくフェイトを極力傷つけないためには、この線でまとめるのが最良だとクロノは言う。

確かにフェイトを被害者にする事で、彼女の未来等は護れるだろう。

だがこれは彼女のわずかに残ったプライドすらも砕きかねない、危険すぎる選択でもあるのだ。

この選択はプレシアを侮辱していると思われるても何らおかしくないのだから。

事件解決に際して、多大な功績をあげたとしてなのはとユーノが略式ながら表彰される事になった。

表彰は構わないがなのはに与えられる褒賞に私は納得できないでいた。

『時空管理局・囑託魔導師への無条件採用』だ。

これでは遠回しになのはに『管理局に入れ』と言っているようなものだ。

私は身寄りがいなかったし他に道も見つからなかったからいいが、なのはは帰る場所…地球の高町家という『居場所』があるのだ。

才能があるからといって、まだ9歳の女の子を無理に家族から引き離すべきではない。

私がそう言つと、ユーノがなのはの側について魔法を練習させると言い、結局はその案で落ち着いた。

「あの…フェイトちゃんはこれからどうなるの？」

なのはの問いに、クロノが答える。

「彼女は事件の重要参考人だ…いくら心身喪失に近い状態だったとしても、彼女がプレシアに言われるままジュエルシードを収集していた事には変わらない。

通常であれば次元断層発生の危険性が高い事件に関与していた場合、1000年以上の勾留というのが普通なんだが…」

「そんな…！」

「…なんだが！」

悲しそうな顔をするなのはに、続きがある事を語気で伝えるクロノ。

「事情が事情だし、彼女を罪に問えるのかというのはかなり微妙なところだからそんなに重罪にはならないだろう。

そして無罪を勝ち取る為の弁護だが、これには自信があるんだ。
必ずフェイトの無罪を勝ち取って見せるよ」

そついうクロノの顔には、自信が溢れていた。

なのはがユーノと、海鳴に帰ってから数日。

フェイトの本局移送が正式に決定した。

私はそれを彼女に伝える為隔離施設の、彼女の部屋を訪れた。

「フェイト・テストロッサさん、本局への身柄移送の日時が確定しました。」

2日後の正午です。

出発前に何か要望があれば聞きますが？」

フェイトは消え入りそうなか細い声で私に言った。

「…あの子に…あの、白い魔導師に会いたい…」

「海上で決闘した子…の事ですか？」

「そう…そしてあなたともお話したい」

「私…ですか？」

意外な言葉に私は少しだけ戸惑いを見せた。

「うん…他人とは思えないあなたと、一度でいいから話したいんだ…」

隔離施設。

フェイトがアルフと一緒に収容されている。

提督に許可をもらった私は今こうして、フェイト達と対話の機会を持った。

でも…困ったな、一体何を話したらいいのか…。

私が話題に窮していると、アルフが口を開いた。

「すまないね…あたし達のせいで、あんたにも迷惑をかけちゃって本当なら、あたし達だけで解決するべきなのにさ」

「あ、いえ…迷惑だなんて思ってないですから。
…改めて、初めまして。

時空管理局の囑託魔導師、アリス・インテグラです」

アルフがきっかけになってくれたおかげでだいぶ楽になった。

「フェイトさん…ううん、今はあえて呼び捨てさせてもらうね。私と話したいんだよね？」

「…はい…」

「…私もね、前は身寄りが無かったんだよ。4年程前、ミッドの外れにあった村の近くで倒れてたところを保護されたの。」

当時の私は、名前すら思い出せない重度の記憶喪失で今の名前も保護された村の人達がつけてくれた」

「…」

フェイトは黙って私の話を聞いていた。

「…でも、その時保護してくれた人達も2年前の事件で村もろとも居なくなってしまった。」

とある次元犯罪者が、村に入り込んでみんなを…。

知ってるかな、とある村が謎の大爆発で消滅したっていう事件」

「…噂で聞いた事が…」

「私はその事件の、唯一の生き残りなんだ。どうやって助かったのかもわからないけど…。」

その後、ちょっとした縁で知り合っていた提督が私の保護責任者になりたいて言ってくれてね…」

「提督ってこの艦の？」

「そう。」

それから色々あって今はこうして、リンディ提督の下でお仕事してる訳なの。」

結局は何が言いたいのかというと、悲しい事は永遠に続かないんだって事。

プレシアさんの事は確かに悲しいけれど、フェイトがそれを乗り越

えて…笑って生きていけるようになれば
それで十分だと思うよ」

「…そう…なのかな」

「そうだよ。」

それと、あの白い女の子はあなたと友達になりたいと言ったのを覚えてる？」

「…うん…」

「彼女は、あなたがとても寂しそうな目をしていたと言ってたの。優しい子だから『どうかして力になってあげたい』って。」

人は独りで生きてゆけないから辛い時に支えてくれる人を求める。決してそれは恥じゃないんだよ？」

「…」

「どうか…あの子と友達になつてあげられない？」

私も彼女と友達になりたいんだけど、まだ返事貰ってないんだ。

明後日の朝、あの子に会いに行くんだけど…あなたも一緒に来て欲しいの。」

あの子に言っておきたい事があるのなら、この機会に言っておかないと後で絶対後悔するよ？」

思いは言葉にしなければ、決して伝わる事ないんだから」

フェイトは少し考え込んで私に力強く答えた。

「私は…会いたい。」

会って、伝えたい…ありのままの私の気持ちを。

あの子のもとへ…！」

「…わかった。

クロノ達には、そう伝えておくね。

じゃあ…明後日の朝に」

「うん…また」

翌日、なのはにフェイトの本局移送が伝えられた。

本来は当日だったのだが、肝心のなのはが遅刻するといけなかったので連絡しておくべきだと私が言ったのだ。

そして当日、海鳴市。

海鳴臨海公園にはクロノと私とフェイトとアルフの、4人で訪れていた。

「…まだ、来てないみたいだね…」

まずアルフが口を開く。

「だが彼女は必ず来るさ。そうだろ、アリス？」

「…うん、あの子の性格を考えれば絶対来るよ」

「……」

程なく白くて小さな人影がこちらへとやって来た。

私立・聖祥大附属小学校の制服を着たのはだ。

…うん、制服姿もやっぱりかわいいな。

私は学校に行った事がないので、憧れから余計にそう思えるのかも。

「フェイトちゃん、アリスちゃん…」

「あまり時間がある訳じゃないが…時間まで、3人で話すといい。僕らは向こうに行っているから」

クロノはアルフやユーノと向こう側にあるベンチへと向かった。

「ありがとう、私の我儘に付き合ってくれて…」

「ううん、気にしないで。」

…私も、フェイトちゃんに会えて嬉しいよ。

アリスちゃんもごめんね…このために頑張ってくれたんだよね？

…なんだろ、一杯話したい事あったのに…二人の顔を見たら何を話しているのか忘れちゃった…」

「…私も、何を話せばいいのかわからなくて…」

「…実は私もなんだ…」

でも、余計な言葉は…必要ないと思うよ…」

「…フェイトちゃん。」

これからお出掛けしないといけないんだよね？」

「そうだね…少し長い旅になりそうなんだ。
だけど、その前に…君だけにはどうしても会って伝えたかった事があるの…」

フェイトはじつとなのはの顔を見つめる。

「…ありがとう。」

君のおかげで私はやっと、ほんとの自分を始められるようになったの。

…いつか君が言ってくれた『友達になりたい』って、暖かい言葉…
その返事をしたくて。
でも…わからないんだ。
どうやったら…『友達』になれるのか」

私はなのはに目配せをし、なのははそれに応えた。

「…簡単だよ…」

私は無言で頷く。

『…なまえをよんで…』

「…初めは…それだけで、いいの…」

「…『君』とか『あなた』とか、そういう他人行儀な呼び方じゃなく…」

「ちゃんと相手の目を見てしっかりと、相手の名前を呼ぶの。
…私、高町なのは。」

『なのは』だよ…!」

なのはは私の方を向く。

「この間の返事、ちゃんとしてなかったよね。
ね…『アリスちゃん』」

『な…のは…』

私とフェイトの声がピッタリと重なる。

「…うん…」

『な…のは…』

いわゆるステレオ状態で、正直妙ではある。

「…うん…!」

『なのは…!』

だが…この感動シーンに、突っ込みは無粋だろう。

「うん…フェイトちゃん、アリスちゃんっ…!」

なのはは私達に抱きついてくる。

私もフェイトも、なのはを抱き寄せつつ優しく撫でてあげた。

フェイトがなのはに言葉をかける。

「寂しくなつて…会いたくなつたら、きつと…名前を呼ぶよ。
だから…なのはも…寂しくなつて…会いたくなつたら…私の…うう
ん、私達の…名前を呼んで。
どこにいても私は…私達はなのはもとへと、すぐに羽撃いていく
から…」

そこへ、時間が来たらしくクロノがやって来る。

「…時間だ。」

「すまないが3人共…」

「…じゃあ、そろそろ行かないと…」

「あつ、二人共待つて！」

なのはは髪のリボンを解き予備らしき分とあわせて、一組ずつ渡してきた。

私は桜色で、フェイトには白のリボン。

「…思い出になるものが、これくらいしか…無いんだけど…」

「それじゃ、私達も…」

私とフェイトも髪のリボンを解いてなのはに渡す。

フェイトが黒で、私の方は空色。

そして…迫る別れの時。

「…また、会えるよね!？」

なのはは再会を望み必死に訴えかける。

「うん…また会える」

「…いつかまた…絶対に、会いに来るから…!」

フェイトと私なのがとの再会を約束する。

それを聞いて安心したのかなのはは笑って私達の事を見送っていた。

その後、フェイトの裁判が行われた。

裁判といっても決定的証拠はなく、重要参考人であるフェイトは虐待に起因する判断能力の欠如が注目され結果的に形骸化した。

フェイトは公判中に管理局囑託魔導師の試験を受け、見事一発合格した。

また本局のギル・グレアム提督がフェイトの保護司になった事もあって、5ヶ月という異例のスピード結審となった。

結果は保護観察つき無罪という温情判決。

罪に問われないという事がわかって、フェイトの顔に明るさが戻っていた。

なのはとフェイト、そして私の物語はまだ…始まったばかり。

しかし、またすぐ大事件に巻き込まれる事になるとはまだ知る由もなかった。

名前（後書き）

アリス「作者さん、A sは何話やるの？」

予定ではまた、3話以内にまとめようかと。

アリス「異様に長くなるんじゃない？」

まあそこはそれ、現在製作進行中の劇場版A sみたいにつて事で。
あと、魔法家族ヴォルケンはやてが笑えた。

アリス「リリパ？ネタ！？」

あと、露骨に宣伝するのはまずいよ！！」

いいじゃないか、埼玉S A行けなかったんだし。

っていうか行けた奴等マジ羨ましい、奈々様とゆかり姫のライブと
いつでもいくらいだよ内容的に。

忘れてると思うがアリス、君もフェイトと同じように奈々様声だからね。

典型的にはコ ット？

アリス「伏字になってないからね！？」

私の事ドジっ娘にしようとしてない！？

あと逆恨み自重する！！」

…いかがでしたか？

ようやくはやて達のターンへと移れそうです。

「もうやめて!!」

とつくに、なのはのライフ（魔力的な意味で）はゼロよ!!」 的な
展開がw

やっぱり来ました奈々様の神曲ネタ。

今回はファンマイですが、露骨すぎますかねw

騎士（前書き）

AS編です。

相も変わらず文才の無さを露呈してます。

案内ページのキーワードにあるように、ザフィーラはこのお話では女性となっています。

理由はリイン？とアギトの居る八神家で凄く居心地が悪そうだから。

ならばいつその事八神家は女の園でいいんじゃない？という訳で…。

ちなみに盾の守護『騎士』なので人間形態のみ。

こちらにおけるザフィーラのプロフィールです。

ザフィーラ

性別（？）：女

年齢：外見でいえば19歳前後

身長：186？

体重：????？

（尊厳保護の為非公開）

B W H：不明

（グラビアアイドル顔負けなのは間違いない）

C V：浅川悠

（魔法少女リリカルなのはS t r i k e r Sサウンドステージ・X
／ルネッサ・マグナス）

（F a t eシリーズ／ライダー）

（アニメ版君が主で執事が俺で／南斗星）

（V O C A L O I Dシリーズ／巡音ルカ）

（あずまんが大王／榊）

浅黒い肌と、見事なまでの銀髪が目を引き美女。

女性としてはとても大柄な見た目とは裏腹に、口数は少ないものの
優しい性格で子供好き。

目立つのが苦手だが彼女の外見では無理がありすぎるといふもの。
サイズが無いため、私服は男性用を着用。

騎士

あれから、半年が過ぎた。

季節は冬、なのはの世界でいう『クリスマス』という聖者の祭典が近いらしい。

ミッドにはそういった習慣がないので、私には関係がないと思っていた。

だが、思わぬ形で関わっていく事になる。

それは一枚の映像ディスクがきっかけだった。

「フェイト、何の映像見てるの？」

私が声をかけると、少女…フェイト・テストロッサはこちらを振り向いた。

彼女は半年前の事件を経て私と同じ管理局員となり、今はこの次元船アースラの常駐魔導師として私と共に働いている。

容姿は私に瓜二つとっていいくらい似ており、長い金髪に真紅の瞳が同じ姿をした私でさえ虜にするほど凶悪な魅力を放っている。

「…ああ、なのは達からのビデオレターだよ。
なのはが以前アリスの事を向こうの親友の二人に話しちゃったみた

いで…」

フェイトは、この半年間で変わった。

いや、変わったという方が的確だろう。

クールで口数が少ないのは相変わらずだが近寄り難い雰囲気なくなり、年相応の可愛らしさが身に付いて来ている。

「そっか…」。

フェイト、今度のお休みは私も地球に行くから、一緒なのはとその友達に会いに行こう?」

「…いいの?」

「元々なのはいつか翠屋に行くって言ってたから、丁度いいしね。あ、翠屋っていうのはね…なのはのご両親がやってる喫茶店の事だよ」

一方、海鳴市。

喫茶店兼洋菓子店『翠屋』に、少し変わった女性5人組が来店していた。

まずなのはと同じくらいの年頃の、車椅子の少女。

2人目は桃色の髪をポニーテールに結んだ、物静かなスタイル抜群の美女。

3人目は、赤毛を三つ編みお下げにした勝ち気そうな幼女。

4人目は女性としては短めの金髪の、先程の美女にも負けない体型の優しそうな女性。

そして浅黒い肌と少し長い銀髪が目を引く、桃と金の髪の2人にも劣らない体型の美女。

どうやら、車椅子の少女がまとめ役らしいが…それがかえって異様な空気を発生させており浮いてしまっている。

「…はやて、ここのシュークリーム超うめーぞ！」

「こらこら…そのくらいにしておけヴィータ。夕食が入らなくても、私達は知らんぞ」

ヴィータと呼ばれた赤毛の少女が、シュークリームをおかわりする。

銀髪の女性が、ヴィータを注意するが言って聞くようならとつくに直っている。

「県外から来るお客さんもよーさん、いてるらしいしなあ…」。

さすが、名物になるだけの事はあるって訳やな」

はやてと呼ばれた少女は、この店の名物であるシュークリームの絶大なる人気に改めて感嘆した。

「すずかちゃんにはあとでお礼を言わなければいけませんね、はやてちゃん」

「せやな、シャル。

…シグナムとザフィーラはどうか？」

シャルと呼ばれた金髪の女性が、この喫茶店を知るきっかけとなったはやての友達に思いを馳せる。

「これ程いい腕をした職人がこの街に住んでいるとは知りませんでした」

「私も同じです。

人気があるのも頷けます」

桃色の髪の女性シグナムと銀髪の女性ザフィーラも、素直に感想を述べる。

しばらくして、5人の皿とグラスやカップが空く。

シャルが会計を済ませ、揃って店を後にする。

5人は談笑しながら夕食の買い出しのため、街の大型スーパーへと向かう。

彼女達は知らなかった。

『翠屋』が、ある目的の為に対立する幼き白い魔導師と関わりのある人物によって経営されている事を。

深夜の海鳴に、突如戦いの花が咲き乱れる。

「仲間か…！」

赤毛の少女が金髪の少女を睨み付ける。

「『友達』だ…！」

金髪の少女も負けじと睨み返す。

金髪の少女の後ろには戦闘で傷ついた彼女の『友達』である白い服の少女。

それを、もう一人の金髪の少女と少年が抱きかかえて応急処置を施す。

「フェイトちゃん…アリスちゃん…ユーノ君…夢じゃないよね…？」

ユーノは少女に魔力を送り私は魔法で傷を癒す。

フェイトは赤毛の襲撃者と鏢競り合いをしている。

「ごめんね…遅れて。」

私もフェイトも、なのはの家に行こうとしたんだけど突然結界が現れて…」

「それで僕が2人になのはの救援を頼んだんだ。2人とも気を付けて…まだ相手は他にもいる！」

その時襲撃者の仲間2人が合流してきた。

「ヴィータ、苦戦しているようだ」

「うるせー、こっから逆転するところだったんだ！
…邪魔すんな、シグナム！ザフィーラ！」

桃の髪の剣士・シグナムが苦笑する。

「…そうか。」

なら『この程度の相手』はお前1人で十分だな？」

「なっ…！」

誰もそんな事いつてねーだろうが！」

赤毛の少女・ヴィータが、シグナムに弄られる。

銀髪の女性・ザフィーラはヴィータに帽子を渡す。

「ほら…。」

損傷した部分は可能な限り直しておいたぞ？」

「あ…ありがとう…」

ヴィータは帽子で顔を隠しながら礼を言う。

「さて…我々も引けぬ訳があるからな、ここは互いの剣で語るとしようか。」

そうだな…金髪の双子」

シグナムは私とフェイトを指差した。

「…私達は似ているけど、双子どころか姉妹でもありません」

「それは失礼した。」

お前達のどちらかで、私と手合わせして貰いたい。

私としては白い騎士甲冑…ああ、お前達の場合バリアジャケットか。ともかく、白い方のお前と手合わせを願いたい。

見たところ、お前が一番の実力者のようだからな」

シグナムは早くもデバイスを構えている。

「わかりました…ただし、条件があります。」

私が勝ったら、何もせずにこのまま引いて下さい」

「わかった、騎士の誇りにかけて約束しよう。」

だが、途中で『外野で何があるうと一切責任は持たんがな』」

この時のシグナムの言葉にもっと注意するべきだったと思う。

これが、あんな事態になるなんて…。

シグナムは私と、ヴィータはフェイトと…ザフィーラはアルフとそれぞれ戦う事になった。

彼女達によれば、一対一の方が互いの实力を知る事ができるらしい。

「さて…始める前に、何か聞きたい事があるなら今のうちに聞いてくれ。」

当然、答えられん事もあるのだが…な」

「…最近、管理局員が多数何者かの襲撃を受けて魔力を奪われています。

もしかとは思いますが犯人はあなた達ですか？」

私の問いかけにシグナムは口の端を吊り上げる。

「…ほう…まだ子供だが、なかなかに聡いな。

いかにも、それは我等が…『ヴォルケンリッター』が起こした事だ。何の為に…という問いには悪いが答えられん。

ただ我等の守るべきものの為と言っておこう」

そう言つてデバイスを構えシグナムは気を入れる。

「…まだ幼いお前の為に、殺さぬよう手加減は加えておいてやろう。幼き黄金の戦士よ…お前の名を聞かせて貰おうか」

「…時空管理局の魔導師、アリス・インテグラ」

「…良き名だな。

ヴォルケンリッターが将、剣の騎士・シグナムだ。

…お前は、私を失望させてくれるなよ。

…さあ、お前の信念を私に見せてみる！」

『マスター、気を付けて。

このシグナムという方は、かなりの使い手です』

「わかつてる…。

いくよ、アルティ！」

『はい、マスター！』

「アルテミシア、ブレードフォーム！」

『ブレード、セット！！』

待機状態だったアルティが片手剣へと変形する。

シグナムはアルティを見て目を輝かせていた。

「ほう、それがお前の相棒しんねんか！

いいぞ…私も久々に本気で戦えそうだな！」

剣士としての性が、自分と同じ『剣』の使い手である私に興奮している。

「…ゆくぞ！

私とレヴァンティンの技、お前に見切れるか！？」

私とシグナムの一騎打ちが始まった。

「…はああっ！！」

「…むうつ…！？」

せやあっ！！」

「…くうつ…！

…てえええっ!!」

私とシグナムの戦いは双方譲らぬ凄絶なものとなっていた。

ただ剣を打ち合わせる戦いだ、見る者が見れば相当高度な駆け引きが行われているのがわかるだろう。

事実私もシグナムも魔法は身体能力とデバイスの強度向上にしか使っていない。

「やっぱり強いな…」

無詠唱魔法を使う隙すら、全く見当たらない」

「驚かされたぞ…」

その幼き体でこれ程までに私と渡り合うとは…!

その強さに免じて、お前の最強の技を撃たせてやる。

さあ、来い!!」

「…アルティ、ごめんね。

あの魔法を使う…」

『…仕方ありませんね。

では、サポートします』

「お願いね…アルティ」

私は詠唱を始める。

以前私が編み出し、魔力の消費量と身体への負荷から使用を禁じられた超威力の砲撃魔法。

なのは魔法スターライトブレイカーに似た砲撃系の雷撃魔法。

「これが私の全力全開…！」

ライトニング……」

『…ライトニング・ブレイカー！』

「ブレイカー……！！」

収束された魔力を、一気にシグナムへ撃ち込む。

大抵のシールドは、これの前には実に無力。

これで決まったと…そう、思っていた。

「…はあ……はあ……」

私の魔力は、もうそれほど残っていない。

お願い…立たないで…と、そう願っていた。

しかし…。

「…さすがだな。

カートリッジ無しで、この威力とは…。

ならば私もそれに応えねばならんな。

…レヴァンティン……！！」

『jahowl』

シグナムはデバイスの柄の先と鞘を連結させた。

まるで和弓のようになったデバイスからは魔力の矢が生み出される。

「お前にこれが耐えられるかな？

…駆けよ、隼！！」

『Schtlmfalken』

シグナムが放った矢が私の胸を正確に射抜く。

「が…はっ…！！？」

「お前達の間どころの、非殺傷設定だから死ぬ事はないだろう。だが…敗者のお前は相応の代償を払ってもらうぞ。

魔力という形でな」

シグナムの右手が淡く光り私の胸から体内へと入っていく。

これは「旅の鏡」という、部分転移系魔法の一種だと後で知った。

「あう…あ…あ…ああ…！

あっ…うあああっ！？」

ぬるりとした嫌な感覚に、私は悲鳴を抑えられない。

私のリンカーコアが魔力を奪われて、どんどん小さくなっていくのがわかる。

なのはも同じ頃、もう一人いたヴォルケンリッターに魔力を奪われていた。

ギリギリ魔法資質の喪失を免れるまで魔力を吸われ…いや、奪われていた私達はこれ以上戦えない。

シグナム達はこの、魔力を奪う行為を『蒐集』と最後呼んでいた。

本来辞典などの編纂で使う専門用語なのだが…。

「あちらは20ページか…こちらは23ページというところだな。

お前には感謝するぞ。

一気に遅れを取り戻せたんだからな…。

お前には見込みがある。

今よりもっと強くなって、私を楽しませてくれ」

そう言って、シグナム達は撤退していく。

「うつ…くつ…うつ…」

私は自分の力の無さに涙を止められなかった。

ボロボロになりながら私を助けてくれたアルティにも申し訳が立たなかった。

なのはのレイジングハートや、フェイトのバルディッシュも今回で大破した。

幸い、デバイスコアは無事だったので急ぎアースラで修理される事となった。

ちなみに、デバイスの無いアルフはそれほど負傷していなかった。
彼女によればザフィーラは自分から仕掛けてくる事がなかったとい
う。

盾の守護騎士と名乗った…という事から、専守防衛が彼女の本領な
のだろう。

その後、私達はなのはとの再会を果たした。

もう少し落ち着いた状況で会いたかったのだが仕方がない。

アースラと本局の情報から『闇の書』という、ロストロギアに関わ
っている事を私達は知った。

11年前の事件において、管理局の次元航行艦一隻が沈んでいる。

艦の責任者は提督のご主人クライド・ハラウン。

その事を話してくれた提督は珍しく少し辛そうな顔をしていた。

最愛の夫を亡くしているのだから当然なのだがやはり提督には母性
溢れる優しい微笑みが似合うと思う。

提督とクロノのためにも、『闇の書』が起こす悲劇を止めなければ
ならない。

理由があろうとも理不尽で悲しい犠牲は絶対出してはならないのだから。

アースラが事件担当となりクルーは一時的に海鳴市へ常駐する事に。私とフェイトは、なのはが通っている私立・聖祥大学附属小学校に編入する事になった。

しかも2人とも、なのはと同じクラスに。

一体どんな手を使ったのか気になるが、提督は答えてくれなかった。

「…という訳で、今日から新しいお友達が増えます。

2人ともご両親の都合で、この海鳴市に引越してきたそうです」

「フェイト・テストロッサです…。

よ、宜しく願います」

「…アリス・インテグラといいます。

宜しく願います」

フェイトがたどたどしく、私は驚く程落ち着いて自己紹介をこなす。

担任の先生が気を効かせてくれたのか、私達は隣同士となった。

転校生の宿命か休み時間や放課後で、クラスメイトの質問責めに遭った事は言つまでもない。

それを助けてくれたのは、一年生の時からなのは親友アリサ・バニングスと月村すずかだった。

「月村すずかです。

アリサちゃんに、フェイトちゃんだよね。
よろしくね」

「アリサ・バニングスよ、よろしく。
それにしても、よく似てるわね…。
ホント、双子みたい」

「すずかにアリサ…だね。

2人とも、私とフェイトの『友達』になって…くれるの?」

「もちろんだよ!

私達の方からお願いしようと思ってたんだよ」

「当然じゃない!

なのはの知り合いなら信用できるしね」

ニコニコしているすずかとウインクするアリサ。

こうして私達5人はこの日『親友』となった。

騎士（後書き）

次は大体決戦から、A Sのエピローグまでの予定。

かなり長くなりますよね、間違いなく。

暴露（前書き）

ASの中核となる管理局と八神家の遭遇です。

今回も、アリスさんには超頑張って頂きました。

グレアム悪者っぽくなっていますが仕様です。
だってグレアムだし。

はやてを氷漬けにしようとしたし。

猫使ってフェイトを騙して蒐集したし。

アリアとロツテが名前だけなのも仕様です。
だって面倒だし（殴

暴露

私とフェイトが聖祥小学校へ編入して数日。

私は海鳴市の市立図書館を訪れていた。

地球…特に日本の文学作品は読んでいて面白い。

他の国の作家にはそれほど見られない独創的な切り口の作品が多いから。

ミッドにも日本の文学作品はあるのだが、数が少ない上に古いのでこうして直接触れているのだ。

棚の間を縫って適当な本を見繕っていると、車椅子に乗った女の子が懸命に手を伸ばして上の本を取ろうとしていた。

私は近付いて、本を取ってあげようと手を伸ばす。

女の子が「あ…」と思わず少し恨めしそうな顔をしたので、どうやら正解だったらしい。

私は微笑んで、手に取った本を差し出した。

「…これですか？」

女の子の表情が、ぱあっと明るくなる。

「…ええんですか？」

「もちろん…はい」

私は女の子の膝の上に本をおいてあげた。

「何かすいません…手間をとらせてしもたみたいで。
しかも、車椅子まで押してもらって」

「気にしないでください…私が勝手にやってる事ですから」

「ここへは、よく来はるんですか？」

「私、事情があつてこの街に来たばかりなんです。
本が好きなので、図書館に自然と足が向くんです」

「さよですか、私もこんな足やから本くらいしか趣味があれへんか
ら…」

女の子は何か懐かしむように話している。

「初めての友達も、ここで今日と同じような出会いをしたんですよ」

「そうなんですか…」

「こうして会ったのも何かの縁やし、嫌やなかったら私と友達にな
つてくれへんですか？」

「…いいですよ。」

あなたのお名前は？」

「…私は、八神はやていいいます。
…あなたは？」

「…アリス・インテグラといいます。
よろしくね、はやて」

「うん、アリスちゃん」

はやてが目的の本を借りて私と一緒に図書館を出るところには私の
見知った顔がいた。

「あつ…あなたは！」

「お…お前は！？」

「うん？」

シグナム、アリスちゃんの事知つとるんか？」

はやての問いかけに構わず私に殺気を放つシグナム。

…まさか、こんなところで戦闘をやらかす気じゃないだろうな。

「貴様、主から離れろ！」

今にも、レヴァンティンを呼び出しそうなシグナム。

それを止めたのは『主』と呼ばれたはやてだった。

「こら、シグナム！」

こんなところで喧嘩になるような事したらあかんよ！
アリスちゃんはさっき私の友達になってくれた子や。
失礼な事をするんは、私が許さへんよ！」

その叱責でシグナムは私に向けた殺気を収めた。

「…申し訳ありません」

「…アリスちゃん堪忍な。

シグナムは真面目すぎて、ちょう融通聞かるところがあるよってな
…」

「…ううん、大丈夫」

その時建物から3人の女性が出てきた。

一人を除いて、私の知った顔だった。

「…はやてちゃん、ひどいですよ！

先に出るなんて…あら？
この子は…？」

「はやて、用事済んだのなら早く帰ろうぜ…って！
オメーは…っ！！」

「ヴィータ、一体どうし…あら、君は確か…」

「みんな丁度よかったわ、この子はアリスちゃん。
ついさっき知り合って友達になってくれたんよ。」

ところで、シャル以外は何でアリスちゃんを知つとるんや?」

私はこの時隠し通せないと思い、はやてに全てを話す事を決意した。
何も知らないまま流されるより、こちらの方が遥かにいいだろう。

4人も私のアイコンタクトに頷いてくれた。

「…その事は、私から説明するよ。
4人ともそれでいい?」

「ああ、お前に任せる。
3人ともそれでいいか?」

シグナムの言葉に、無言で頷く3人。

「せやったら、今晚は家に来てくれる?
その方が話しやすいやろ」

「え…でもご両親は?」

「大丈夫、お父んもお母んもちっちゃい頃のうなっでもうたけど…
今はこの4人が私の家族やから」

「そっか…。
はやては強いんだね」

「嫌やわ、誉めたって何も出えへんよ?」

「私はそんな考え方できなかったと思うな…」

その日の夜、八神家。

リンディ提督達を説得してはやてに知る限りの全てを打ち明ける事に。

ご主人を失っている提督は私の真意をすぐに理解してくれた。

クロノがまた何かブツブツ文句を言っていたが、私は無視する事にした。

ちなみに話は夕食後という事になって『八神家特製・東西いいこと取りおでん』（私命名）に感動のあまり迂闊に泣いてしまった。

「『夜天の魔導書』？」

はやての言葉に私は頷く。

夕食が終わり、一息入れたところで話が始まった。

「うん、はやてが持つてる『闇の書』は本来その名で呼ばれていたの。

歴代の主の誰かが、無理な改変を施したせいで夜天の魔導書はプログラムバグが起きている。

そのせいで主の命を喰らう『闇の書』となり、ロストログアとして今もこうして存在しているの。

これが管理局の辿り着いた結論だよ」

黙って聞いている5人に、私はさらに続ける。

「…はやては、生まれつき足が悪いといってたけど…それは間違いじゃない。」

闇の書ははやてが生まれた時からここにあった。

ヴォルケンの4人は知っているとと思うけど、闇の書は一定期間以上蒐集が行われないと…」

ここで一呼吸おき、言葉に重みを持たせる。

「リンカーコアを通して、主の体を侵食していく。」

シグナム、間違いない？」

視線がシグナムに集まる。

「…その通りだ、よく調べたな」

「そして、蒐集が捗らずに焦ったシグナム達は管理局の魔導師を襲ってページを進めようとした。」

実際私や私の仲間もこの前襲われて、魔力を奪られてしまったんだよ…」

「…何やって!？」

シグナム、それはほんまの事なんか!？」

「…すみません、主。」

ですが我々は…」

私はすかさずシグナム達のフォローに入る。

「…はやて、みんなを怒らないであげて。
彼女達も、はやてを思ってた事だし…」

「せやけど、あれ程人様に迷惑かけるな…っていうてあつたのにそれを破つてたのが許せんのや！
いくら私の為っていうても納得いかへん！！」

八神家のリビングを、重い空気が支配する。

「…はやてを救う方法は、闇の書に喰らい尽くされてしまう前に一刻も早く蒐集を完了させる事。

その上ではやてが闇の書の管制を取り戻して、管理者権限行使で防衛プログラムをパージ。

あとは、切り離された防衛プログラムを破壊する。

これで計算上は全てうまくいくはずだよ。

その為はやてには闇の書の管制人格を説得しておいて欲しいんだけ…ど…」

私が構築した案に、みんな啞然としている。

「…アリスちゃん、あんた何者や？

…9歳の考えたプランとはとても思えへん」

私は苦笑する。

「…ここまで来るのに半年かかったよ。

様々な記録から推理して、決定的なのがとあるお金の動きかな。
あとは闇の書の特性から、最良の手段を考えて…」

シグナムが苦笑する。

「全く…お前は聡い。
聡過ぎるくらいだな？」

「とにかく、魔導師からの蒐集は基本的に禁止ね。
ただ保険はかけておくべきなんだけど…。
シグナム、あと何ページで蒐集が終わるの？」

「現在536ページだから残り130ページだな。
少々遅れ気味だったのだがお前のお陰で取り戻せた」

「…なら、急がないと。
管理局に、今回の件で暗躍してると噂がたってる人がいるの。
11年前、闇の書のせいで友人を失った人。
…そうですね、グレアム提督！」

「…えっ？
グレアムのおじさん？」

私が虚空に声を張り上げると、モニターが現れた。

そこには初老の男性が。

『…君の推理力には本当に感服するよ、アリス君。
だが私もここで引く訳にはいかないのだ。
それが…』

「…それがはやての為でもある、ですか？
管理者ごと氷漬けにしての永久封印が！？
その為にクロノへあれを…デュランダルを渡したって言うんですか

！？

「11年前の悲劇…とまではいかないまでも、関係者に大きな過ちをさせるような事がベストだとしても！？」

私の追求に、はやても便乗する。

「…おじさん、彼女の言う事はほんまなんですか」

「…すまない、はやて君…私は君を騙していた。
だが私にはこれ以上の案が浮かばなかったんだ。

その為にクロノ君には辛い役目を負ってもらう事も、私にはわかって
いた。

全て悲しい犠牲を出さぬ為だという事だけはわかって欲しいんだ」

「…フェイトの裁判に関与したのもこの為ですか」

「…その通りだよ。

今更何を言っても言い訳に聞こえるだろう。
だから、あとは君達に託す事にする。

私達の悲劇を…今度こそ、終わらせてくれ。
若者達よ…頼んだぞ」

そう言つてグラム提督は通信を切った。

「…ごめんね、はやて。

あの人の事、信じてたんだよね…？」

私ははやてに、グラムを弾劾した事を詫びた。

「…ううん、平気だよ。

私も薄々気がついてたし、何よりアリスちゃんが私の為に怒ってくれたんが私は嬉しいんよ」

はやては優しく微笑む。

「…絶対に、悲劇の連鎖を断ち切らなな。
アリスちゃん、私達に力を貸してくれる？」

「…うん、もちろん！」

この日私達二人は『親友』の固い絆で結ばれた。

リンディ提督にはやて達が協力してくれる事を報告、翌日に引きあわせた。

「…という訳で、彼女達が『夜天の魔導書』の現在の主と守護騎士達です」

「…驚いたわ。

アリスさんの推理力にも、はやてさんの救済プランにも…。
グレアム提督がそんな事を計画していたなんて…」

「グレアム提督の使い魔…アリアとロッテでしたか、彼女達の協力も取り付けてあります。

全てがうまくいけば、防衛プログラムだけを破壊して管制人格も救えるはず」

「しかし、あまりにも無謀すぎる！

失敗すれば彼女の死だけですまなくなるんだぞ！？
リスクが高すぎる！！」

クロノが何か喚いているがあえて無視。

「このまま手をこまねいているよりも、遥かに望みはあると思います。
す。」

私はやらずに後悔するよりやって後悔する方がいいと思いますが…」

リンディ提督は考え込む。

そして…決断した。

「…わかったわ、あなたのいう通りよね。
あなたに全て任せるわ。」

そのかわり約束して…何があろうと絶対に作戦を成功させなさい。
そして…必ず全員で生きて帰って来るのよ」

「はいっ…必ず！」

私は力強く答え、同席していたのはとフェイトにも協力を仰ぐ。

「…ごめんね、二人とも。」

そういう訳だから協力して欲しいんだ…」

「にはは…大丈夫だよ、よろしく、はやてちゃん」

「…私も平気だよ。」

よろしくね、はやて」

「…うん！」

なのはちゃんに、フェイトちゃんやったよね。
よろしゅうな！」

この瞬間に、3人は友達となった。

暴露（後書き）

シグナムのは「旅の鏡」を真似たものです。

漫画Asで局員に蒐集しているシーンがあるので。

悪魔なのはフラグ、および猫姉妹によるなのフェイの擬装フラグ消去。

リイン？の救済フラグは…未定です。

本人も言ってる通りアリスが11年前の悲劇を調べていたのは、ジユエルシード事件終結後から。

養父トレノの親友で提督の夫だから興味が出たという設定です。

夜天（前書き）

『闇の書の闇』との決戦。

ここでもネタ満載です。

ではどうぞ。

夜天

12月23日。

私がグレアム提督の計画を看破し、はやて達の協力を取りつけてからというものの蒐集は順調に進んだ。

なのはとフェイトが、危険生物からの蒐集を手伝ってくれたお陰で残りページは10を切っていた。

管制人格の説得もはやての優しさのお陰で何とかなるようだった。

「…現在665ページ。

インテグラよ、何故ここでわざわざ止めた？

ここまで来たのなら一気に完了させた方が良くはないのか？」

シグナムの問いかけに私は回答する。

「…人手が確保できたとはいえ、連日の戦闘でみんな疲れてますからね。

今日はゆつくりと休んで、最後の詰めは明日…という事にしたんです。

残り1ページならほとんど影響しないので、再度蒐集しても大丈夫かと」

「再蒐集…誰からだ？」

「もちろん、私です。

みんなに無理を言ったのは私ですしはやても了承してくれています」

「何…いや、そうか。」

言い出しっぺであるお前が責任をとる…という事か、皆にわずかも後悔させぬように。

そついう事なら、済まんがお前に任せる」

「…はい」

私は言えなかった。

蒐集が完了したら守護騎士達は、一時的とはいえ消滅してしまう事を。

だけど私ははやての優しさが打ち勝つ事を信じる。

…この作戦の要は『信頼』なのだから。

そして、もし失敗した時は暴走する前に私がはやてを闇の書ごと殺す。

それが作戦開始前に、私とはやてが内緒で交わした…願わくば実現して欲しくはない条件だった。

明けて、12月24日。

海鳴だけじゃなく、日本中がクリスマスムード一色のこの日を迎えた。

そして私達は、別の意味で節目を迎える。

闇の書事件の終結という、とても重要な節目を…。

「3人とも準備いい？
昨日ちゃんと休めた？」

「うん、大丈夫！」

「私も絶好調だよ」

「いつでもいけるで！」

「クロノ？」

「…大丈夫だ、問題ない」

「ユーノ、アルフ？」

「僕も大丈夫」

「あたしもOKだよ！」

「ヴォルケンはどう？」

「子細整った、後は号令を待つだけだ」

「…絶対に、はやてを助けようぜ！」

「…アリスちゃんに、全部お任せします」

「…アリス、指示を」

「リンディ提督？」

『アルカンシエルの準備、全て完了したわ。
後は転送を待っただけよ』

「…了解。

ごめんねクロノ、本来ならあなたの役目なのに」

「…気にするな、立案したのは君だ…ならば最後まで責任を持つのが筋だ」

「…うん。

それじゃシグナム、最後のページを…」

「…承知した。

ゆくぞ…インテグラ」

言葉と共にシグナムの手が私の体へと沈んでいく。

「…つく…」

やはりこの感覚は何度経験しても慣れそうにない。

「…蒐集…！」

「っう…みんな…！」

はやてから離れて…！」

私とシグナムを含め、全員はやてと距離をとる。

はやてが黒い霧に包まれ、姿を変化させる。

髪は若干青みを帯びた銀色で長くなり、瞳は血の如き赤へと変わる。

胸は大きくなり、背中には6枚の漆黒の羽根。

四肢と頬には、赤い帯状の紋様が浮かんでいる。

それと同時に…。

「…な、何だ…!？」

体が…消えてゆく…!？」

「アリス…!

てめえ、どういう事だ!？」

「アリスちゃん…!

私達を騙してたの…!？」

ザフィーラ以外の守護騎士3人が私に抗議する。

「…今は少し我慢して!

これもみんなを救けるためだから…!」

「…わかった!

私は最後まで信じる!

だから必ず主を救ってくれ…頼んだよ!」

意外にもザフィーラが私を信じると最初に言った。

3人もそれに続いて、私に希望を託した。

ここまでは予定通り、後は私とはやて次第…。

そして『覚醒したはやて』から、驚きのセリフが発せられる。

「…幼き金の戦士よ、我が主や仲間と共に私の覚醒を促してくれた事を…大変に感謝するぞ。

主は間もなく我が糧となるだろう…。

お前達もそうなるが良い」

私はその時、最悪の事態が頭をよぎった。

アルテミシア・ブレードの柄に力を込める。

何を思ったか、フェイトが高速接近し斬りかかる。

「はやてと、ヴォルケンのみんなを…返せえっ!!」

「フェイト、駄目!!」

だがバルディッシュの刃と相手のシールドが衝突した瞬間、フェイトは淡い光に包まれて消えてしまう。

程無く『八神はやてだった存在』は私に念話を送ってきた。

『幼き金の戦士よ…』。

聞こえるか？』

『はやて』よりも、憂いを帯びた穏やかな声。

『あなたは…闇の書の管制人格ですね？』

『…そうだ…』

このような事に巻き込んで本当にすまない。

今お前達の前にいるのは、闇の書の防衛プログラム。

今は主と融合して、強引に力を抑えられている。

いつ暴走するかわからない危険な状態でもある…』

…どうやら最悪の事態は、回避できたようだ。

『…お前達の目的を達するために、私も協力するのは吝かではないのだが…』

…私と今の主の力では防衛プログラムの暴走阻止だけで精一杯なのだ…』

これは想定していた。

『…お前達に頼みたい。

全力を以て、私の姿をした主を叩いてくれ。

主が管理者権限を奪回するにはそれしかない。

あのお前達の仲間は、書に取り込まれて夢を見ている状態だ…助けられる』

『…本当ですか？』

『ああ…誓ってもいい。』

ともかく…頼んだぞ』

管制人格の願いを聞き私はなのは達に指示を飛ばす。

「なのは、魔力ダメージで『はやて』を私と共に攻撃して！

クロノ、ユーノとアルフと一緒に『はやて』の動きを止めて！

アリアとロッテは、私達の援護を！

エイミィ、リンディ提督にアルカンシエルをいつでも撃てるよう待機させて！」

『了解！！』

私の指示で、みんなは散開して攻撃を開始。

永きに渡り繰り返された、多くの悲劇に終止符を打つ時が来た。

「ストラグルバインド！！」

『チエーンバインド！！』

クロノ・ユーノ・アルフが『はやて』の動きを止めるべくバインドを展開。

「…レイジングハート！

エクセリオンモード！！」

『All right ,

eccelion mode！！』

「…アルテミシア！
リミットブレイク！！」

『オーバーリミットモードスタンバイ！！』

「私達は牽制に入ります！
あなた方は、全力で魔力を叩き込んで！！」

「私達が手伝うんだから、絶対に『お父様』の悲願を成就させてよね！」

リーゼ姉妹がありったけの魔力を駆使し『はやて』を牽制する。

この戦闘の目的は『勝利』ではない。

あくまではやてが闇の書の管制人格を『救出』する、その為の時間稼ぎだ。

そして、私となのはの砲撃魔法が完成する。

「エクセリオン…」

「インディグネイト…」

『バスターーーー！！！！！！』

ただし、これは通常の砲撃魔法ではない。

魔力スラスターを使って、相手に突貫する魔法だ。

…そこ、『それ魔法か？』なんて突っ込まない！

『はやて』は、両腕が拘束されている状態でシールドを展開。

私となのはの攻撃が無詠唱シールドで防がれるもののこれは想定内。

私もなのはも、二段構えの手を用意している。

『……ブレイク……！

…シューーーー！……！』

私達の魔力と『はやて』のシールドがぶつかり合い、大爆発を起こす。

凄まじい爆煙の中なのはと私は荒い息をしていた。

「…ほぼ零距离で、ツインバスター直撃…。

これで、駄目なら…！」

なのはが荒い息のまま絶望的観測を述べる。

ようやく煙が晴れて、姿を現した『はやて』。

甲冑（ベルカ式なのでこう呼ぶらしい）はボロボロの状態で、しかし嬉々とした表情を浮かべていた。

「…ふふ…素晴らしい！

私も永い時を生きてきたがここまで私を苦しめたのはお前達が初めてだ！

さあ…もつと楽しませて…うつ！？
こ…これは…しまった！！」

「…間に合った…！」

「何…！？

最初から、これがお前達の目的だったのか！？」

「…そう。

私達を選んだのは破壊でも封印でもなく…」

それは『闇の書』が歪んだそもそもの原因。

「…防衛プログラムであるあなたのリンクを切り離し独立させる事
！」

漆黒に彩られた空間。

車椅子の少女が銀髪的女性と話をしている。

『せやけど、それはただの夢や…。

夢はいつか醒めなあかん。

…例え苦しくても、現実で頑張る事自体に価値があるんよ…。
みんな少しの幸せ目指して頑張つとるんや。

今も私達を救う為にみんな頑張ってくれとるのに私達だけ、逃げる
つちゅう訳にいかへんやろ…』

跪いた女性を諭す少女。

『ですが…私は…!』

女性の紅い瞳から、大粒の輝きが滴り落ちる。

少女は女性を、優しく抱き締める。

『誰でも幸せを追い求めてええんよ。

誰にもその権利がある。

もう、悲しむ事はなくていいんよ…』

一方、草原に立つ大木。

とてもよく似た少女二人が互いを抱き締めている。

『ごめん…ごめんね…!』

背の高い方の少女が、涙を溜めながら謝る。

『…いいよ、だって私は…お姉さんだから』

背の低い『姉』が『妹』を慰める。

『…現実でも、こんな風にしていたかったな…』

その言葉と、淡い光と共に『姉』は消えていく。

周囲の様子が変わり、城のホールのような場所。

『…バルディッシュ、ここから出るよ…』

…ザンバーフォーム、いける…?』

『Yes sir.』

『主人』の問いかけに普段と全く変わらぬ返事をする『相棒』。

『ん…いい子だ…』

『相棒』を構え帯電させる少女。

『疾風…迅雷…!』

スプライト・ザンバー!!』

空間を切り裂く斬撃。

再び漆黒の空間。

少女は女性を優しく撫でている。

『防衛プログラムの暴走は止まりません…!』
管理局の魔導師が、戦っています…!!』

『…知つとるよ。』

後は、私らに任せてな?』

泣き続ける女性に、優しく言葉をかける少女。

『名前をあげる…。』

闇の書とか、呪いの魔導書とか…そんな言わさへん。
私が呼ばせへん!』

魔法陣を展開する少女。

『…管理者八神はやての名において、汝に新たな名を贈らん。
…それは幸福を届ける風、幸運の追い風。
祝福のエール…。
…リイン…フォース…』

現実世界。

「くっ…体が動かん…!!」

もがく『はやて』…いや、防衛プログラム。

ちなみに甲冑は既に魔力で修復されている。

「これは、あなたのせいで『こんな筈じゃなかった』という思いをした…全ての人の恨みです！
…受け取りなさい!!」

私となのはは再び、一撃を与えるべく詠唱を開始。

「レイジングハート！
中距離砲撃モード!!」

『All right!』

「アルティ！」

再度リミットブレイク―！」

『了解―！』

「エクセリオン…」

「インディグネイト…」

『バスター――！！』

再び砲撃を撃ち出す。

桜色と金色の閃光に包まれ防衛プログラムは大打撃を負った…はず。

爆煙が晴れると人影はなく黒い球体がそこに浮かんでいた。

まさか…と、最悪の結果が頭から離れない。

しかし橙の狼少女…アルフがいるのでフェイトは無事だろうか…。

その時金のミッド式魔法陣と、白いベルカ式魔法陣が上空に展開された。

更に白い魔法陣の周囲には4色の光が見える。

…もう、間違いない。

私の予測を裏付けるようにフェイトとはやて、そして守護騎士達が現れた。

守護騎士の4人が、口上を述べる。

「…我ら、夜天の主の下に集いし騎士…」

「主の命有る限り、我らの魂尽きる事無し」

「…この命続く限り、その魂は御身と共に」

「…我らが主、夜天の王・八神はやての名の下に！」

順番にシグナム・シャマル・ザフィーラ・ヴィータ。

中央には、騎士甲冑を着たはやてが立っていた。

「…夜天の光よ、我が手に集え！」

祝福の風リインフォース…セーット・アープ…！」

はやての姿が変化し本来の騎士甲冑になる。

髪は乳白色に変化し、管制人格と融合…『ユニゾン』したのだろう。

「フェイト、はやて！」

みんな…！！」

私はなのは達と、はやて達に近づき生還を喜ぶ。

…あ、ヴィータが私を凄いい形相で睨んでる。

それをザフィーラが、手で制した。

「…アリスちゃんの考えた作戦、ドンピシャや。
ちよう誤算があつたみたいやけど、結果的にはうまくいきすぎて正
直怖いわ」

「つて事は管制人格も？」

「うん、リインフォース…今は私の中におるよ」

ここで、クロノがはやてに質問する。

「はやて、暴走開始までのタイムリミットは？」

「あと15…いや10分も無いかもしれんね。」

リインフォースが今、防衛プログラムを抑えてくれているけど…」

「そうか…。」

アリス、急いだ方がいい。

君の考えた作戦…僕は最後まで付き合わせて貰う」

「…ん、わかつてる」

今月の初旬。

私の『作戦』を説明する為なのはとフェイト、八神家のみんなには
アースラへと集まってもらった。

提督とクロノとエイミィは当然いるし、協力しているリーゼ姉妹も
同席。

「…防衛プログラムの切り離しに成功しても、本体を完全破壊しなければ意味がありません。

『闇の書の闇』…暴走した防衛プログラムを破壊する方法は現時点で2つ。

クロノが託されたデバイス『デュランダル』の魔法・『エターナルコフィン』で内部まで凍結させる。

あと『アルカンシエル』で地上砲撃…まあこれは却下の方で。

アルカンシエルは最低でも着弾点から半径百キロ以上を消滅させますから…」

私は、周囲への影響を考慮しない現時点で実行可能な方法を説明していた。

シャルがおずおずと手を挙げて発言する。

「…あの、デュランダルの魔法でっていうのも無理があると思うの。防衛プログラム自体魔力の塊だから…」

「…焦らないで、手はまだ用意していますから。そこで…3つ目の方法。

私達みんなで、シールドを波状攻撃によって破壊。

コアを抉り出してユーノとアルフ、アリアとロッテで衛星軌道上に強制転送。

そして待機するアースラのアルカンシエルで攻撃して完全破壊…。これが成功確率はともかく最もベストな手だと…私は考えています。軌道上なら環境に配慮する必要は、ほとんど無いですから…」

私の説明に合わせモニターが展開される。

説明を聞いていた全員が、呆気に取られていた。

石化したように、動かないみんなはちょっと間抜けに見えてしまう。

最初に発言したのは、提督だった。

「…凄いわ…」。

アリスさん、何でそんなに頭がいいの？

私含めて、管理局の誰もが辿り着けなかったのに。

何か『名探偵アリス』って感じだわ…」

そこへなぜか、フェイトが続ける。

「『真実はいつもひとつ』とか『見た目は子供、頭脳は大人』とか
言い出さないよね…？」

2人して何を言っているんだか…。

そんな2人に、私はなぜかこう言いたくなった。

「…バーロー（低声）」

その時エターナルコフィンでも発動したかのような、瞬間凍結の錯覚を感じた。

そこに、はやてまで乗ってきた。

「おお、コン君や！

まさか奈々様の声で聞けるとは思わなかったわ…！」

大半の人は頭上に『？』が出ている。

ともかく話が進まないなので軽く咳払いを。

「…こほん。」

とにかく、3つ目の方法で行きたいと思うのですが…異論はありますか？」

…異論を唱えられる者は、一人もいなかった。

「…無いようですね。」

では『決戦』の予定日は、今月24日です。

全ての準備は22日一杯に終わるようお願いします」

「…みんな、無茶な作戦に乗ってくれてありがとう。」

ここでしくじれば、全てが終わると思って。

軌道上にいるアースラとのタイミングが最重要だから転送組は4人同時でね。

何としてもコアを抉り出し転送するために攻撃は休むことなく順番に行つて。

さあ…私達の手で、悲劇に終止符を打とう！」

私の『号令』に、みんなが力強く頷く。

私達13人はまるで伝承のように『夜天の王と円卓の騎士』と言つていい状態で『闇の書の闇』を包囲していく。

『最後の詰め』の瞬間が、刻々と迫っていた。

「大人しくしてな!!」

アルフが気合と共に先陣を切り、ユーノとリーゼ姉妹もそれに続く。

『チエーンバインド!!』

補助こそが本領の、4人の全力バインドに絡め取られ動けなくなる
『闇』。

「今だみんな!

全力全壊の、手加減なしでぶっ飛ばして!!」

ユーノが私達を促す。

「じ、字が違うよ!

ユーノ君!!」

なのはが何かいってるが…細かい事は気にしない方がいいよね、多分。

「おっしやあ!

一番槍、貰うぜ!!

…『アイゼン』!!」

『jahowl! g i g a n t f o r m!』

ヴィータのデバイス『鉄の伯爵』グラーファイゼンがカートリッジ

をロードし、巨大化していく。

「……おおおおっ！

轟天…爆碎っ！！

ギガントシュラク…！！！！」

ヴィータの一撃が『闇』のシールドと激突する。

一方私は、アルテミアにカートリッジ・システムを搭載し使えるようになった新モードを発動していた。

「アルティ、例のあれって何分で準備できる？」

『…お望みならすぐにでもいけますが、できれば最後までとっておくべき…かと思いますが？』

「…ギガントシュラクであれだから、そんな余裕は無いと思うけど」

『…わかりました。

マスター、ご命令を』

「ん、いくよアルティ！

ブレードフォーム、モード『カリバーン』！！」

『オーバリミット展開、モードEX起動。
カートリッジロード！』

アルティがカートリッジを3発ロードする。

刀身が格納され、かわりに光の刃が展開される。

バルディツシュのザンバーフォームより小さいのだがこれで十分。

その頃みんなはというと『闇』の攻撃をザフィーラが防ぎ、反撃していた。

「『盾の騎士』の私の力、あまり見くびるな！

邪なる光は、一筋たりとも通させん！！

…縛れ、鋼の軛！！！！」

無数の白い光の槍が『闇』を撃ち貫く。

続いてシグナムが『闇』のシールドを穿つため、相棒レヴァンティンの柄と鞘を繋げる。

「主とその友の涙は、私の手で止めてみせよう。

…駆けよ、隼！

シュツルムファルケン！！」

光の矢が『闇』のシールドを全て破壊する。

「…よし、ハラウン！」

クロノが、デュランダルを構えた。

「…世の中は全て『こんなはずじゃなかった』という思いで溢れる。

でも…僕達の悲しみは、今これで終わらせる！
永遠なる眠りを、彼の者に与えん…凍てつけ！

「エターナルコフィン!!」

『闇』が久遠なる氷の牢獄へと囚われる。

「シャル、まだか!？」

クロノがハラハラしながら『闇』のコアを探查魔法で探すシャルに叫ぶ。

「待って下さい…！」

あと…もう少しで…!!」

このまま攻撃していても、こちらが疲弊するだけ。

私は切り札を使うべきだと判断した。

「…なのは、フェイト!

はやても聞いて!

やはりこのままでは暴走を止められない…!

私達4人のフルドライブで強引に切り開くよ!!」

「あゝ、やっぱり…」

「まあ、想定内…だね」

「ま、予定通りやな」

苦笑するなのは達。

「じゃあ…いくよ!!」

『応!!』

何か9歳の少女らしからぬ格闘家みたいな返事。

まあいいか、私もこういうノリは嫌いじゃないし。

4人のデバイスが、一斉にカートリッジをロード。

「これが私の全力全開!」

「雷光一閃っ!

いくよバルディッシュ!」

「ごめんな…おやすみな」

3人が詠唱に入る間、私は少し長い詠唱に入る。

「…正しき力を求めし者にその祝福は約束される。

邪なりしその力、聖なる光で砕かれん。

弱き涙を守る為、その力を今…ここに!

…いくよ、魔力の貯蔵^{ぶき}は十分か!？」

アルティの刀身が、眩くも優しい光に包まれる。

『おお、その剣はっ!

騎士王の女の子やな!

あと、弓兵の人!？」

こんな状況でもツッコめるはやてはある意味凄い。

「スターライトお……」

「プラズマザンバー……」

「響け、終焉の笛！
ラグナロク……」

「エ・ク・ス………」

私達は魔力を、一気に解放した。

『ブレイカー……！！』

「カリバー……！！」

私達の4点同時攻撃である『テトラ・ブレイカー』は大打撃を与えてシャマルの探査を援護した。

「……見つけた！

防衛プログラムのコア！

……クラールヴィント！」

相棒にコアの拘束を任せ、「旅の鏡」を使ってコアを捕獲する。

「……つかまえ……たっ……！！」

コアが引きずり出されて、ユーノ達が強制転送魔法を発動する。

『転送っ……！！』

軌道上で待機する次元艦・アースラの前方へと、転送されていった。

軌道上。

アルカンシエルで砲撃するため、待機するアースラの前方に魔法陣が出現。

「…来ました！

地上からの強制転送！」

「アルカンシエルの出力、射線共に異常無し！」

「コアの露出まで、あと…20秒！」

「私達の苦しみがようやく終わるのね…」

リンディ提督が起動のため『鍵』を差し込む。

「『アルカンシエル』！

…発射っ！！」

『鍵』を回し、急造仕様の魔導砲・アルカンシエルを発射させる。

正確にコアに命中し、形が大きく歪んだあと大爆発を起こして消滅した。

「コアの消滅を確認！」

防衛プログラムは、機能を完全に停止しました！！」

エイミィの嬉しそうな報告に、沸きあがるアースラのブリッジクル
ー。

地上では、アースラによる砲撃の是非を全員が待っていた。

エイミィから通信が入り、その顔が喜びに満ちているあたり答えは
1つだ。

「みんな、お疲れ様！」

作戦は成功、コアも無事に消滅したよ！」

「……やったあ！！！」

私達4人は手を高く挙げていわゆる『ハイタッチ』をした。

しかし、まだ全て終わった訳じゃない。

残骸の回収とかはやて達の処遇、私達の進路……。

いわゆる『残務整理』が、私達を待っている。

大変なのはむしろこれからなのだから……。

夜天（後書き）

16000もの字数になると、
携帯での分割は大変です。

次回はその後半部分、
リインフォースの消滅？
です。

祝福（前書き）

リン？の名シーン。
結局こうなりました。

後半は砂糖でできています（鮮血の刻印さん・談）

どうしてこうなった…。

では、再編後半どうぞ。

祝福

決戦の日の夕方。

夜天の魔導書の管制人格：『リインフォース』が私のもとを訪れた。

「…お前が主や守護騎士達のために、色々と苦勞してくれたそうだな。

私からも礼を言わせてくれ…本当にありがとう」

「私は方法を提示しただけで、頑張ったのははやて達です。
…顔をあげてください。
はやての足の具合は？」

「快方に向かっている。
遅くとも1年以内に元通り歩けるだろう」

「…そうですか。
本当によかった…」

「お前のもとに来たのは、お前と白と金の少女に頼みがあったな…」

「私となのはと…フェイトに？」

「…ああ。
確かに、防衛プログラムは破壊されたが…放置すればバックアップでいずれ復活してしまう。
そこで…お前達3人の手で私を…管制人格である私を消滅させてほしいのだ」

「…え!？」

「私が消えれば、件の防衛プログラムも消滅する。

『闇の書』は本来の姿に…『夜天の魔導書』へと戻る事ができる」

「でも、それじゃ守護騎士達は…!」

「守護騎士プログラムは、元々夜天の書のものだ。

主に蒐集した魔法を行使、或いは教授させるための…護りの力だからな」

「…はやてや守護騎士達は知ってるんですか？」

「知らぬのは主だけだ。

騎士達も面と向かって言う事はできぬだろうが…」

「そんな…そんなの…」

私もリインフォースの決断が解らない訳じゃない。

でも、それは…。

「…そんなの、悲しすぎるだけです!」

私の両の頬には大粒の涙がぼろぼろと零れていた。

リインフォースは、そんな私を見て気まずそうに顔をしかめている。

「お前も私のために泣いてくれるのだな…。

その思いやりの心、決して忘れないでくれ。
だが、私もこれ以上悲劇を繰り返したくない…。
だから、ここは私の願いを聞き届けてくれないか」

「……」

「…2人には、話だけでも通しておいてくれ。
決行は明朝の桜台公園。

…最後まで苦勞をかけて、本当に済まない…」

翌朝、桜台公園。

2人には一応事情を話し、一緒に来てもらった。
しかし納得はしていない。

「何とかならないの!？」となのはは私に食って掛かりフェイトも
無言だが怒りを顕にしていた。

そして…。

「来てくれたのだな…。

では、邪魔が入らぬうちに済ませるとしよう」

私達はバリアジャケットに着替え…もとい換装する。

でも…本当にこれでいいのだろうか、他に方法はあるのではないか
…と自問自答する。

そんな状態だから、術式の構築がうまくいかない。

リインフォースが心配そうに私を見ていた。

「…大丈夫か？
私の事は気にせず…」

その時、リインフォースにとって最も来て欲しくない少女の聲がした。

「リインフォース!!」

「…主!？」

「何してるんや…!」

私に何も言わんと、こんな勝手な事…!

なのはちゃん達も、なんで何も言うてくれへんの!?

さ、リインフォース…うち帰ろうな?

私とリインフォース、守護騎士達が揃って『八神家』やないか!

こない勝手な事する子は、叱ったらなあかん!」

はやての悲痛な叫びにも、リインフォースは…優しく微笑んで首を横に振る。

「…主の御心を私は十分に受け取りました。
もう私がおらずとも、主は十分強い御方です」

「…あかん!!
必要かどうか決めるんは、主である私や!!」

私には…リインフォースが必要やから言っんや!!
主従だからやない…。

『家族』だからなんや!!

私には両親がおらん…。

だから余計家族を失うのは嫌なんや!

お願いやリインフォース…もう私を悲しませんで!!」

「…私はあなたに、とても素敵な名を頂きました。

その名はこの十字の象徴を継ぐ子に与えて下さい」

はやてとリインフォースが話している間、私は彼女…リインフォースを救う手は無いのかと思考をフル回転させていた。

しかし、有効な手は何一つ浮かばなかった。

このままリインフォースが消えるのを黙って見ているしかないのか…と絶望的な思いが支配した時…。

私の意識に直接語りかける声が響いた。

念話とは違うが、どこかで聞いた事がある声。

『…お前は、彼の者を救いたいのか?』

『だ…誰ですか!?!』

『誰でもない…、彼の者を救いたいのか?』

『…救いたい、どんな事をしてでも!』

『汝の願い聞き届けた。
与えよう…その力を』

直後に私の体が内から熱くなり、瞳が凍てつくような蒼へと変わっていく。

「うつ…」

私が漏らした呻きに、まだ誰も気づいてない。

「…うああああっ!!」

何事かと4人が振り向いて私を見る。

「…ど、どないした!？」

「…何があつたの、アリスちゃん!」

「…アリス、大丈夫!？」

駆け寄る3人だが、リインフォースは『私』の気配が違う事に気づいた。

「…はっ、いけません!
3人とも離れて!!」

『私』はゆっくり顔をあげ品定めでもするかのように4人を見回す。

同時に、本来は手足にあるはずのフライヤーフィンが大きく背中に出現する。

それはまるで天使のような神々しさを放っていた。

「くくつ…私を化け物か何か、卑下たる者と勘違いしていないか？」

挑発するような余裕の笑みを浮かべる『私』。

「アリス…じゃない。

何者ですか、あなたは」

フェイトの質問に『私』は答えた。

「アリス…ああ、この娘の事だな？

私は誰でもない…。

だが名を聞きたいのなら…そうだな、ナギサ…とても名乗っておこうか。

私は『熱意』を聞く者。

強く清く切なる願いを持つ者に力を与える存在」

『ナギサ』の言葉に、息を呑む4人。

なのはが口を開く。

「神様…って事ですか？」

…ナギサは肯定も、否定もしなかった。

「ふむ…通俗的な喩えだが強ち間違いではない。

ああ…このアリスという娘だが…今はただ眠っているだけだ。

事が無事済んで私が去ればちゃんと目覚めるぞ」

「…そうですか…」

ほっ…と胸を撫で下ろしたなのは。

ナギサは本題に入る。

「さて…リインフォースといったか、汝は滅びを望むと言っている
そうだな」

「…はい…」

これ以上主や、その仲間迷惑をかける訳には…」

リインフォースを一喝するナギサ。

「…馬鹿者が！」

思いやりと自己満足は似て非なる物だ…履き違えてはならない！
それにな…汝の顔に書いてあるぞ、まだ主達の未来を見ていたいと
もう少し己に素直になって構わないんだぞ」

「……………」

何も言えなくなる、リインフォース。

ナギサは更に続ける。

「この娘…アリスの悲痛な心の叫びで私は彼女に力を与えたのだ。
当然彼女に与えた力の一部だけだな。

…八神はやて…とやら」

「…は、はい!？」

突然話を振られて、慌てるはやて。

「汝は、自らが祝福の風と名付けた彼の者を…本当に救いたいのか？
例えば自分の全てを差し出す事になるとしても」

はやてに彼女自身の覚悟を聞くナギサ。

はやては一瞬だけ考えて、力強く答えた。

「…はい、覚悟は…できてます！

例えばこの命のほとんど、引き換えてでも!！」

「…汝らの覚悟は、確かに受け取った。

本来なら対価を貰うのだが特別に無償で応じよう。

アリスにも、この力を一部分け与えておいた。

では、リインフォースよ…始めようか」

「…はい、お願いします」

ナギサとリインフォースが向かい合い、足元にミッドともベルカとも違う魔法陣が出現する。

「まず汝の体を調べさせてもらうぞ」

そう言ってナギサはリインフォースの、お腹の辺りに触れる。

「…んっ…」

くすぐったさを噛み殺した色っぽい声をあげるリインフォース。

「…なるほど、プログラム生命体か。

ヒトの姿を取るのは、主と共に…時には同化して戦うためか…。

…む、汝が気に病む原因はこれだな？

一部のプログラムが、改竄されたあとバグを起こしているな。

少々待て…今プログラムを新しい物に代えてやる。

同時に、バグの原因の古いデータを抹消する」

お腹に触れているナギサの手が淡い光を放つ。

数分後、リインフォースのお腹から手を離す。

「…ふう…。

少し苦労したがこれで本来の状態…『夜天の魔導書』とやらに戻ったはずだ。

もう防衛プログラムが暴走する事はない。

私が作った新型を組んだ。

ヒトの技術ではまず強引な改竄は不可能だよ。

全体の機能はほとんど変化していないが…その方が、逆にいいだろう？」

はやてがナギサに力一杯のお礼を述べる。

「あ…！

ありがとうございます…！！

もう少しで私は『家族』を失うところでした！」

ナギサは照れ臭そうに頭をぼりぼりと掻いた。

「…礼なら娘に…アリスに言ってやってくれ。
私は…彼女の切なる願いに応えたに過ぎない」

ナギサは表情を戻す。

「さて、最後に私がアリスに与えた力の事だ。
そうだな…白いお前」

ナギサはなのはを指名。

「え、わ…私ですか？」

「そうだ…」

これから私が伝える事を、子細漏らさず正確に伝え…いや、よそう。
長すぎて伝えられんか。

重要な部分だけ教えるから間違えずにアリスに伝えておくんだぞ。

間違えて教えればアリスの身が減る事になる。

自信が無いのなら…リインフォースに頼むが…汝は、記憶力に自信は？」

なのはが申し訳無さそうに答える。

「あう…すみません。

あまり自信がなくて…」

「そうか…仕方ない。

何、気に病む事はない。

正直は恥ではないのだ」

ナギサはリインフォースに向き直る。

「では、リインフォース…間違えずにアリスに伝えてほしい。まずは…」

私に与えた『能力』の説明を、リインフォースにするナギサ。

「…はい、心得ました。

一字一句違わずに、彼女へ伝えます。本当に…ありがとうございました」

ナギサは初めて、穏やかな微笑みを見せた。

「ああ、主達と壮健にな。では私は行くでしょう」

光の『羽根』が消え、目を閉じるナギサ。

『私』が目を開けて最初に見たのは、優しい微笑みを浮かべるリインフォースの顔だった。

「…おはよう…。

よい夢は見られたか？」

「リイン…フォース…？

消えたはずじゃ…？」

リインフォースは…右腕で私の背中を、左腕で太股を支えている。

…つまり『お姫様だっこ』という体勢で、私を抱えているのだ。

「私が今ここで、こうしていられるのも全て…お前のおかげだ。本当にありがとう…」

魔導書の全てのプログラムは安全なものに調整され、もう改竄の末暴走する事は無くなった。

資料書としての本来の姿を取り戻したんだ。

お前の強い願いが、本当の奇跡を起こしたのだ…」

私は状況が呑み込めずに、きょとんとしたまま。

「わ、私…その…」

何か…しましたか…？」

「ああ…」

それを実現した『力』は、一部だけがお前の中にもあるらしい。聖なる夜に輝く深紅の星として、私は主達を…そしてお前達を常に照らし見護る『約束の証』となれた。

本当に…お前には、いくら感謝しても足りないな」

「そうですか…」

ところで、はやての視線が凄く痛いんですけど…」

青筋が立ちそうな凄い形相で私を見ているはやて。

「…二人共、いつまでそうしとるんや？」

ずるいわ、そんな羨ま…いやいや恥ずい事主の私もして貰うてないんよ？

シグナムはようしてくれるけど、これ（車椅子）から乗り降りする

時だけや」

つい、本音が漏れてしまふはやて。

「す、すみません…主」

リインフォースは、優しく私を降ろす。

「…アリスちゃん、まるで天使みたいだったよ」

「…うん、思わず見とれてしまっくらい綺麗だった」

なのはとフェイトの素直な感想に、私は顔が真っ赤になる。

私は照れ隠しに、無理矢理話題を変えた。

「と…ところで！

その『力』っていうのは、どういうものですか？」

「ああ…そうだな。

それについては伝言があるのだ…。

『力』を与えてくれた者…ナギサという方からな」

リインフォースが『力』について説明してくれた。

「まずは『論より証拠』というだろう…実際に使ってみようか。
お前の背に、羽根が生えるイメージを固めてみる」

言われた通りにイメージを徐々に固めてみる。

すると、魔力で形成された『天使の羽根』が私の背に生み出された。

リインフォースによれば、これもフライヤーフィンの一種らしい。

ちなみに羽根の色は当然の如く金色、同時に瞳の色が蒼に変化していた。

『力』を収めて元の姿へと戻る。

「これがお前に与えられた『力』だ…。

使う時は掌に魔力を込める必要もあるがな。

滅びに向かう者を救う力…名前は自分の好きにつけていいとの事だ。だが…一度使えば暫しの間攻撃に関する一切の魔法が使えなくなるそうだ。

当然この魔法もな。

早くて一日、長くて十数日程度らしい。

もちろん無闇に使えば罰を受ける事になる。

まあ…お前ならその心配は億に一つも無いだろう」

私は少し考えて、この能力の名称を決めた。

「…それは、慈愛の光。

傷つく迷い子、優しく導く癒しの歌。

立ち上がる力、勇気と共に戦士達へと祝福与えん。

滅びの運命を、打ち消す力。
さだめ

…『ホーリーソング』」

私が述べた、祝詞のような口上に『おお』と感嘆を漏らすはやて

達。

「凄い…凄いよ！

凄くかつこいいよ、アリスちゃん！！」

「…うん、惚れ惚れする程綺麗なフレーズ…。
嫉妬するくらい、センスがいいよね…アリス」

「…まさに『天使』や。

でも私には、どうもアリスちゃんが何も無いところで転ぶ姿が頭を
離れん。

イマジネーションが足らんのかな…それともある意味終わつとんの
かな…」

はやての意味不明な発言になのはが続ける。

「はやてちゃん…色々と、台無しになるから。

まあ私も、玩具のハンマー降らせる姿想像しちゃったんだけどね…」

ミッド人であるフェイトは頭の上に『？』がいくつも浮かんでいる。

まあ…ある意味フェイトも私と同じく、それらが当てはまるんだけ
ど。

「まあ…ともかくや。

ほんまおおきにな…アリスちゃん。

何やアリスちゃんにとても大きな、今年のクリスマスプレゼントを
貰った気分。

おおきにな、アリスサンタさん♪」

そう言つて私を弄りながらケラケラと笑つ、はやての表情は…清々しいくらいにとても晴れやかだった。

「…さ、みんな帰るか。」

こんな寒いとこいつまでも居つたら、風邪ひいてまうからなあ…？」

『…うん！』

「…はい、我が主」

その後、はやてが運ばれた大学病院へ戻つた私達。

無断外出という事で主治医の石田女史に、こつてりと全員が絞られたのは…当然言うまでもない。

こうして『祝福の風』は、滅びの運命を回避した。

小さな主を優しく包みこむ『幸運の追い風』として、これからも共に歩み続けるだろう。

はやての足は極めて順調に回復しており、4月迄には十分間に合うらしい。

この事になのはもフェイトも、アリサやすすかも大変喜んでいた。

さらに数日後、3家族合同旅行で温泉へ行く事に。

場所は海鳴温泉…ではなくとある全国で有名な温泉郷の老舗旅館。

スキー場もあるこの地で、私達は事件の疲れを存分に癒した。

驚いたことに守護騎士達やリインフォースはみんな、プロ顔負けの滑りを周囲に披露し注目されていた。

はやては足の状態から滑れないので、高町家の人達とロッジで寛いでいた。

私かというと、フェイトやなのはと一緒にゲレンデを動き回っていた。

軽快に滑る私と、馴れない為かついてくるのがやつの二人。

「ふえゝ…アリスちゃん、ホント滑るの上手いね」

「そうだね…ちょっと自信無くなっちゃうな」

「あっち守護騎士達に比べたらまだまだだよ」

『あゝ…』

二日目の朝、私の元に再びリインフォースが訪問してきた。

「金の…いや、アリス。

少しいいでしょうか？

一緒に朝風呂でもどうかと思いまして…」

浴衣姿のリインフォースは淒く色っぽかった。

「ど、どうしたんです？

そんな他人行儀な…。

まあ、構いませんけど」

旅館内を一緒に歩く、私とリインフォース。

邪魔の入らぬ館内の死角に2人つきりとなった私達。

「…それで、私に何か話があるんでしょう？」

「相変わらず聡いですね…いえ、大した事では」

わずかな間流れる沈黙。

「…単刀直入に言います、あなたを『主』と呼ばせて頂けませんか？」

「…え、ちよつと！？」

幾らなんでもそれはマズいですよ！！

はやてがいるのに…！」

「…ああ、別に契約などの話ではないのです。

今回の件で、私はあなたに大恩を賜りました。

しかし私にはそれに報いる術がありません。

ですが私にとってあなたは主はやてと同じく、とても大切な存在…。

『第2の主』といつても、過言ではありません。

ですから、あなたを主と…心の主と呼びたい。

端的な言い方をするなら、あなたを愛してしまった…間違った事な

のは理解していますが、それでも…」

「リインフォース…」

「…あなたの事を思うと、胸が締め付けられる…。
…どうか、わがままな私の願いを聞き届けてくれないでしょうか…
？」

美しい銀の、糸髪を垂らした美女の頬が薄い紅を差す。

そんなリインフォースの…彼女の切なる願いを、誰が断れるだろうか？

誰にも断れはしない、例え当事者の私でも。

「…私でいいなら、いくらでも呼ばせてあげるから…だからもうそんな顔をして私達を困らせないで」

私は…リインフォースの体一杯に腕を回して、彼女を抱き締めようとする。

リインフォースは、屈んで私を受け入れた。

「…ありがとう…あふれる優しさを持つ、私だけの…誰よりも強く可憐な主。

幸運の追い風…祝福の風は常に、あなたの心を満たし続けるでしょう…」

私達は強く、しかし優しく互いを抱き締めあう。

「リインフォース…私も、あなたが大好きだよ…！
恋愛感情じゃなくなつて、その想いは一緒だよ…！」

その時無粋な邪魔者の声が脳へと響く。

『おい、アリスちゃんにリインフォース？
2人共どこにおる？』

…はやてだ、あのちび狸に見つかったら色々な意味で大変な事になるのは間違いない。

私達は念話を遮断した。

「よいのですか『主』？
主はやてでしたが…」

「いいの…今は私達二人の時間にしたいから。
ねえ、リインフォース？
私の…わがままも…聞いてくれる…？」

「…はい…？」

鼓動が徐々に速くなるのを感じる。

「私達の、絆の証として…キス…してくれる…？」

「…本当に、私で…よいのですか…？
いつか出会う伴侶のためにとっておくべきではないのですか…？」

「地球では、挨拶代わりにする地域があるの。」

それに比べたら…ね？」

「…承知、しました…」

互いの顔に薄紅が差す。

2人顔が徐々に近づいて、そして…。

『…んっ………』

互いに信を誓う繋がり。

それはどんな甘味よりも、蕩けるように甘くて。

『はやてを裏切っている』という、良心の呵責に苛まれるが。

『もっと味わっていたい』という欲望が、私達の心を麻薬のように蝕んでいく。

気づいた頃には…お互い、むさぼるように相手の唇を求めている。

『…ん…んっ…ふ…っく…んう…んふ…っ…！』

…リインフォースの導きで『大人のキス』を、早くも経験する私。

「…ん…はあ…っ！」

もおっ…リインフォースのえっち…」

「……す、すみません……（／／／／／／）」

「ん…いいよ。」

私も…同罪だしね…」

顔を真っ赤にしてるリインフォースに、くすくす…と笑う私。

「じゃあ…もう一回。」

今度は、軽く…ね？」

ああ…私は何ていやらしい子供なんだろう、この味にやられてしまっている。

今度は唇が触れる程度の、軽いキスをする。

2人の世界に入っていた為気配に気づかなかった。

「…うおっほん！」

驚いて声のした方を見るとそこには…。

「2人とも？」

こんなところで一体なにをしとるんやあ？」

夜天の王が仁王座（車椅子だから）していた。

…その笑顔は…『作り物の笑顔』に染まったように、1ミリも笑っていない。

私達の顔からは、血の気が引いていく。

「…リインフォース？」

…アリスちゃん…？」

『…は、はいっ…!!』

声が裏返っているあたり、恐怖は相当なもの。

「やっていい事と悪い事があるくらいわかるな？
2人はそれを犯したんや…覚悟はできとんやろ？」

抱き合ってガタガタ震える私達2人。

「…帰ったら…ゆっくり…なのはちゃんと…フェイトちゃんに…
お話』…してもらおうな？」

死刑宣告。

生きて新学期を迎える事ができたら…それだけで私は幸せかもしれない。

2日目のリインフォースと私は、誰の目にもわかる程動揺していたらしい。

それをはやては、にやにやしなから横目に見ていた。

ち…ちび狸…っ！

それでも再びふたりきりになって話をした。

…今度は話だけで。

海鳴に帰ったあとはやての告げ口でなのはとフェイトとシグナムと
ウィータから凄い勢いで問い詰められたのは…。

無論言うまでもない。

祝福（後書き）

アレなシーンは狙ったわけではないです。

あれ以上やると問題なので（十分問題だが）

次からは漸くStS編。

始動（前書き）

Strikers 編、始まります。

始動

あれから、9年余り…。

新暦75年、第1管理世界ミッドチルダ。

管理局・統合本部で私は、事前に一通の辞令を渡されていた。

『次元航行部隊次元航行船クラウドニア所属アリス・インテグラー等空佐

上記の者、4月29日付で管理局古代遺失物対策室・第六機動強行対策課へ転属を命ずる。

転属に関する詳細は部隊の責任者に指示を仰ぐ事。

尚、当辞令の異議及び拒否は一切認められない。

- 時空管理局統合本部』

突然の辞令に驚いたが部隊責任者に懐かしい名を見て合点がいった。

陸士108部隊特別捜査官八神はやて二等陸佐…。

そう、あの『夜天の王』のはやてだ。

はやて達とはもう、何年も会っていない。

私が何となく距離を置いているだけなんだけど…。

75年4月29日。

古代遺失物対策室第六機動強行対策課・部隊長室。

この『機動六課』が、私の新しい仕事場だ。

インターホンを鳴らして在室を確認。

「どうぞー！」

部屋の中では部隊長と銀髪の女性と空色の髪の妖精が私を待っていた。

三人とも、同じ制服を着ている。

「…失礼します。」

次元航行部隊所属アリス・インテグラ一等空佐、辞令により本日付で機動六課に転属となりました。
よろしく願います」

「…久しぶりやな、アリスちゃん」

「…久しぶり、はやて。」

三人共元気そうだね」

「はいです！」

はやてちゃんも、アリスお姉さまもツヴァイも元気ですよー！！」

空色の妖精が答える。

彼女は、リインフォース？（アインス）の妹である？（ツヴァイ）

だ。

ツヴァイは8年前はやてがアインスの希望で製作した『ユニゾンデバイス』。

ストレージ『蒼天の書』のマスターでもあり、戦闘ではやてと一緒に戦う小さな『祝福の風』。

一方の初代は現在戦闘から離れはやての秘書を務めているが、その力はまだまだ健在。

「…本当に久しいですね、インテグラ―佐…。
いえ、我が『心の主』」

信愛の意味を込めて、今も私をそう呼ぶアインス。

はやても最早諦めて、苦笑するばかり。

「とにかく…や。
アリスちゃんは部隊司令部『ロングアーチ』で2つのフォワード部隊のサポート頼みたいんよ。
ツヴァイと一緒に、前線で…な」

「了解、ところで…。
一等空佐の私が二等陸佐のはやての部下ってのは正直マズいと思うんだけど」

「ああ、構へんよ。
六課は試験運用部隊やし、表向きは出向って事やから誰にも文句は言わさん」

「なのは達はいるの？」

「…愚問やね、当然いるに決まっとるやろ？
2人ともフォワード部隊の隊長やで。」

「スターズがなのはちゃん、ライトニングが…フェイトちゃんや」

「2人とも怒ってるかな…私ここ何年も『友達』とか言いながら、
会わなかったから…」

「まあ、心配はしてた。
どうして、避けようとするのか…ってな？」

「あの…ごめん…ね？」

「別に謝らんでええわ。」

「まあ今日は疲れとるやろし顔合わせは明日かな？
…アインス、彼女を部屋に案内したってな」

「はい、八神部隊長。
では一佐…こちらです」

六課隊舎内廊下。

金と銀が並んで歩く姿は、誰もが振り向くだろう。
事実擦れ違ったみんなが、驚いて振り向いたから。

「…この部屋です。
振り分けの都合がつかずに実質個室ですが…」

中に入ると、元々は2人用だったらしく広めにとった間取りの部屋だった。

すでに私物の入った箱が、幾つか置かれている。

私は、女性としてはかなりモノを持ってないほうだとよく言われている。

服にそれ程金はかけないし装飾品にあまり興味ない、化粧も最低限できればいいので荷物は少ないのだ。

モノ持ちではないフェイトすら私の事を変わってると言っていた。

『折角綺麗な見た目をしているんだから、もっと気を遣わなきゃダメ』と。

言いたい事はわからなくもないけど、ヒトは外見じゃないと思う。

「…では、明日は朝8時にホールに来て下さい。

それまでは自由時間という事になりますので、隊舎を見て回られています？」

なんでしたら、私が隊舎を案内致しますが…」

「…じゃあ、お願い。

リインフォース・アインス二等陸尉」

「畏まりました。

…アリス・インテグラ―等空佐殿」

妙に他人行儀な呼び方に、思わずくすくすと笑いあう私達。

アインスの案内で隊舎内を回る私。

「ここが六課司令部である『ロングアーチ』です。
所属こそここですが、基本フォワード隊と一緒に行動して頂くので
そんなに来る事はないかと思っています」

「ここは高町一尉が隊長を務める『スターズ分隊』のオフィスです。
あの…高町一尉は日頃からあまり休まれない方なので一佐からもき
つく注意して頂きたいのです」

「ここはハラウン執務官が隊長を務めるフォワード部隊『ライト
ニング分隊』のオフィスです。
ハラウン執務官は多忙な方なので、彼女の代わりに新人達を見て
頂ければ」

そしてとある薄暗い部屋に入る。

「ここがデバイスの調整室になります。
…ああ、丁度いますね。
フィニーノ一等陸士？」

「…あ、アインス二尉！

そちらの方は？」

「お待ちかねのインテグラ一等空佐だ」

階級が下なので、敬語ではなくなっている。

「…初めまして、デバイス担当兼ロングアーチの通信担当シャリオ・フィニーノ一等陸士です。

…アリス・インテグラ一等空佐ですよ、一度お会いしたかったです。

弱冠15歳で一佐となった超エリート魔導師…あなた凄い有名人ですから」

「…光荣だ、とだけいっておきますね」

シャリーリーの言葉に、苦笑する私。

隊舎の外に出る。

「ここは見ての通り六課の足となるヘリが離着陸するヘリポート…
そしてヘリはあれです」

アインスが指差した方向を見ると、最新式ヘリが鎮座していた。

「あれは…JF-704式武装ヘリ？」

「わかりますか？」

後ろから声がして、驚いて振り向くと…整備士姿の男性が立っていた。

「…失礼しました。」

ヴァイス・グランセニック陸曹であります。

機動六課にはパイロットとしてヘリ操縦等に従事しております」

爽やかな印象の好青年だが異性好きかもしれない。

「初めまして。私は…」

自己紹介しようとしたが、彼は手を私の前にかざして制した。

「アリス・インテグラ―等空佐ですね、あなたの噂は聞き及んでおります。」

次元航行部隊の誇る最強の『スーパーエース』、その圧倒的な實力は他の追隨を許さぬ『白い死神』…」

「く…くすぐりたい…」

くさい賛辞に、私は思わず体をくねらせる。

「はは…ま、あなたに一度『逢いたかった』のは確かですがね。何たって俺…自分は…」

「『俺』でいいですよ？」

あと階級は意識しなくてもいいですから」

「…じゃ、これだけ言っていていいですか？」

…『君の存在に心奪われた男だ…!!』」

ヴァイスの、芝居がかったセリフに吹き出してしまう私。

「…ぷつ、くくく…ダメ、面白すぎるっ…!!」

「…そんな笑わせるつもり無かったんですがね？
心云々は本当だし」

気を取り直して、隊舎前を歩く私とアインス。

「ここが六課の誇る屋外型VR訓練場です。
あらゆる地形を本物以上に再現する最新型です。
今は高町一尉がフォワード新人達の訓練をつけているようですね。
…ああ、どうやら丁度終了したようです」

アインスが念話を飛ばしてなのはに何か話す。

なのはと一緒に新人隊員の4人がやって来た。

「アリスちゃん…！
5年ぶりかな…また会えて嬉しいよ！」

「そうだね、なのは。
でもよくフェイトと間違えなかったね？」

「にやはは…制服を見ればわかるよ、フェイトちゃんの制服には階級証がついてないもの」

「…そうだったね。」

執務官だから階級がないんだっけ」

「でもアリスちゃんも今や一佐殿だもんね。私達4人の、出世頭だからねえ」。

そうそう、紹介するね。

スターズとライトニングの新人の子達だよ」

「…スバル・ナカジマ二等陸士です」

「…ティアナ・ランスター二等陸士です」

「…エリオ・モンディアル三等陸士です」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。

…この子は、パートナーのフリード」

「キュク〜！」

新人4人と白く小さな竜が私に挨拶する。

…何となくフリードの目が笑っていたようだった。

「…初めまして、アリス・インテグラです。階級は一等空佐」

「…えええええっ！？」

驚く4人の新人達。

「…インテグラ一佐って、あの超有名な…！？」

「…15歳にして一佐まで上り詰めた超エリート…」

「25歳以下で唯一の空戦SSS+保有者『心優しき白の閃光』…」

「…フェイトさんとともに『ツイン・ライトニング』と呼ばれる次元航行部隊のスーパーエース…！」

『そんな雲の上の人が何で機動六課に！？』

彼女達にとって私は同僚である事すら、憚られる存在らしい。

最初からこんな調子じゃ、先行き不安だよ…。

私は少しだけ運が良すぎる『普通の女の子』であって少々力のある魔導師なだけだっていうのに…。

「いやいやいや！！」

15で一佐つてだけでも、十分凄過ぎますから…！」

藍色の髪の子のスパル・ナカジマが、謙遜するなと言いたそうに手を顔の前で左右させる。

…しまった、内心の呟きが声に出ていたのか…。

「…さっきのやり取りで、気づかなかった？」

私はなのは…高町一尉達と10年来の友人でね…」

「もっとも5年前から全然会えなかったけどね」

なのはが余計な事をいつたので、一瞬だけ睨む。

「とりあえず施設内を案内して貰ってるんでしょ？」

「私達はまたあとで挨拶に行くから」

なのは達と別れて、隊舎に戻る。

「ここが医務室です。」

あまりお世話になるべきでない部屋ですね。

「シャル、いるか？」

「あら、アインス。」

どうしたの…って、後ろに隠れてるのは！

「…一佐、隠れないで挨拶してください」

「お…お久し振りです」

「アリスちゃん…！」

ああ、インテグラ―佐って呼ぶべきよね」

「あう…」

自分でも情けないと思える声をあげてしまう。

「朝はいなかったわよね、ギリギリまでクラウドにいたの？」

「…まあ、そうですね」

「ダメじゃない、ちゃんと結成式に出なきゃ。」

はやてちゃん凄い怒ってたのよ？

『事前に辞令を出したのにこの場にいないっちゅうのはどういう料簡やー!!』

…ってね。

あなたも幹部なんだから、ちゃんとしないと」

「…すみません」

「まあ、これから一年間は同じ部隊なんだからはやてちゃんをあまり困らせないでね？」

「…はい」

「それはそうと、今年度の定期検診まだ受けてないんですって？
体型データだけでもないとまずいから、できれば今日やらないとね。
アインス、悪いけど…少し手伝ってくれる？」

「身長162？。

体重？…
ビ―

フェイトちゃんよりも細いわね、彼女が聞いたら何て言うかしらね
…？」

ちなみにフェイトの身長は161？らしい。

体重は名誉のために非公開で。

「…なんか微妙に、無駄に大きいわね…。
はやてちゃんじゃないけど触り心地も良さそう…」

私の、はやてに言わせれば『至高の逸品』らしい胸を見たシャマルがそんな事を言い出した。

「…トップ9（ピー）？…あらあら、こっちもアリスちゃんが勝ってるのね。

あの子泣いちゃうかも」

そんな調子で、シャマルの『身体測定』は進んだ。

…異様に疲れたような気になった。

「ここが食堂です。

ご存知かと思いますが利用料は手当が出ますから実質無料ですね。そつえばスバルとエリオの二人が常人の10倍以上食べるとか…。本当だとしたら彼らの胃は虚数空間なんですね」

そう言つてくすくすと笑うアインス。

この10年で彼女は本当に明るく人間味のある性格になった。

恐らくは、ツヴァイの影響だろうか…。『妹』の存在が好影響を与えたか。

「あとは大浴場とシャワールームですが、行かずとも特に問題ないでしょう。

では、明日の朝にホールで会いましょう」

翌朝、隊舎内ホール。

「えー、一部の人は知っているかと思いますが…我々機動六課に心強い助っ人を呼びました。

…アリス・インテグラ―等空佐です！」

「おはようございます。

只今ご紹介に預かりましたアリス・インテグラです。
フォワード陣全員のバックアップアタッカーとして、この部隊に参加します。

未熟者ですが、皆様どうか宜しくお願い致します」

ぺこり、と頭を下げた六課隊員達の拍手を受ける。

暖かな拍手は何度受けても気持ちいい。

私の六課での仕事は、大体新人達の教導と隊舎内での事務…フォワード隊長陣と同じ。

あ、あと隊長陣に対しての教導も私がやる事になっている。

今日は早速、フェイトとの戦闘訓練。

私とフェイトが対決するとあってバックヤードの人達まで屋外訓練場に集まってきた。

「フェイト、この5年間で腕は落とさなかった？
最初から全開でいくよ」

「それは私のセリフ…」

今度こそ勝ってみせるよ、アリス…！」

『ツイン・ライティング』との異名を取る私達2人の真剣勝負が始まった。

能力限定によって、同等の魔力に制限されているとはいえ私がフェイトに訓練で負けた事はない。

純粹なパワーはフェイトが勝り、スピードは互角。

なら、なぜ私はフェイトに負けないのか？

それは…。

『はあああああつ！！』

ぶつかり合うお互いの愛機^{デバイス}。

「きやあああつ！！」

フェイトが吹っ飛ばされ、廃棄ビルを模した障害物に激突する。

フェイトが、私に勝てない理由。

それは彼女が『甘すぎる』から。

戦っている相手に対してもどこか遠慮して力を抜いてしまっている。
甘さは即、死へと繋がる… 8年前の事故で嫌と言う程痛感したはず
なのだが。

本来の力は私と互角なのにこの癖のせいで力を殺してしまっている
のだ。

まあ、はやてやなのはにも言える事ではあるが。

「…フェイト、癖が抜けてないよ？」

昔言ったよね、戦う相手に情けをかけるなって。
執務官やつてるくらいだしわかってると思うんだけど… 失望したよ。
フェイトは甘すぎる。

何が何でも勝ちにいくって覚悟を感じない」

自分でも、少し厳しすぎる言い方だったかなと… 少し反省している。

「…くっ…」

「昔はあんなに、強かったのにね…」。

普通は守るものができると強くなるのに。

まあそれがフェイトのいいところでもあるけどね」

フェイトはようやく、瓦礫から抜け出してヨロヨロと立ち上がる。

非殺傷設定とはいえ、少しやり過ぎたかな？

「… やっぱり、アリスには敵わないな…」。
5年前より格段に強い。

でも次こそは勝ってみせるからね…！」

うん、それでこそフェイトだね。

『バトルマニア』…なんて言われているけど、決して諦めない直向きなところが私は好きだ。

この性格があつたからこそ『あの事件』で心が壊れる事が無かつたのだろう。

フェイトに初級治療魔法で痛みを取ってあげた。

「相変わらず奴は強いな…それでこそ戦い甲斐があるというものがな」

シグナムが何やらうずうずしているようだ。

「フェイトさんがあんなにあつさり負けるなんて僕じゃ相手にすらならないのかな…」

エリオが戦慄を覚える。

「さすがSSS+保有者…つてところね。
あの人が敵に回らない事を祈りたいわ…」

ティアナが苦笑する。

「能力限定かかって、あの強さ…。
ちよつと異常だよな」

スバルが呆れて。

「限定されてフェイトさんと同じなんてちょっと考えられません」
キャロが、信じられないと首を傾げる。

こうして、六課で初めての私の訓練はみんなに一種の恐怖心を与える形となってしまった。

始動（後書き）

アリス、一等空佐になってましたね。
自分でもビックリだ。

リイン？が別人臭くなっているのは仕様です。

エルフェンリートにゆう（後期）をイメージしたらこうなった。

空戦SSS+て何だよ！！

…と、自分にツツコみたくなったのは秘密。

小説タイトルにもなってる「- Twin lighting -」
が、ようやく出てきました。

アリスとフェイト、2人の「閃光」という意味です。

何か「アリス無双」っぽくなってるwww

次回はなのは達と、5年間会っていない理由かな。

軋轢（前書き）

本編 7、8 話です。

ある作品の主人公がゲストとして出ます。

先に謝っておきます…。

勝手に出してすいません！！

ダメだ… 内容が中途半端すぎる。

では、13 話をどうぞ。

軋轢

新人達が新型のデバイスを受領し初陣を経験してから暫く後。

私達の信頼に、亀裂が入る出来事があった。

ミッドの高級ホテルに密輸品が運び込まれたと匿名の情報を掴んだ私達。

近日そのホテルで開かれるオークションに出品される可能性があるため、私達は警備につく事になった。

密輸品の中に、私達が追う古代遺失物『レリック』があるかもしれないから。

「ホテル・アグスタ…」

セレブに人気の高級ホテルだね。

私の給料でも簡単に泊まらない程高いんだよね…」

「私より高給取りのくせに何言うつるんや…」

とにかく、オークションの会場となるアグスタに密輸品が運び込まれたって情報があつたんや」

「会場警備に出品予定の品の確認、関係者や参加者のチェック…仕事多いね。」

六課で人手足りるの？」

「それを何とかすんのが、私の役目やないの。陸士隊も手伝ってくれるし何とかできるよ」

「会場警備は隊長『4人』ってなってるけど…?」

「もちろんなのはちゃんとフェイトちゃんと私。あとアリスちゃんもや。」

先方に話通つとるから拒否でけへんよ?」

「え…ええっ!?

わ、私そんな場所を着る服なんか持ってないよ!?!」

「大丈夫やって!

私に全部任しとき!!

最高に似合う服、用意してあるからな〜!!」

こうしてホテル・アグスタで警備任務を行う事に。

私はシグナムと一緒に前日入りしていた。

渡された服に、袖を通しておけとシグナムが言うので試着してみようとケースを開けてみると…。

シンプルだが気品漂う薄緑色のドレスと銀のブレス、ユリの花をかたどった銀の飾りのついたネックレスがあった。

それらを身につけた自分の姿を鏡で見てみる。

…うん、自分でも似合っていると思う。

シグナムも珍しく『まるでどこかの国の姫君だな』と素直にほめてくれた。

オークション当日。

私ははやて達と一緒に招待客を装って会場内の警備を担当。

有事の際、私は周辺を警戒するシグナム達と合流して防衛に当たる手筈だ。

ティアナ達はシグナム達や陸士隊の隊員と共にホテル周辺部の警戒・防衛を担当している。

オークションは何事もなく進むかに見えたが、やはりホテルにガジェットと呼称される機械兵器が接近してきた。

オークションの開始が突如遅れた事で参加者達に動揺が広がる。

私は事前の指示通りはやて達と別れティアナ達と合流してホテルを防衛する。

それなら最初からそっちに回った方がいいはずだが、お察しの通りちび狸の策略でこうなったのだ。

『スバル、ティアナは北側で私と敵の各個撃破！

シグナムは南側を！

ヴィータは東側、ヴィレイサー一尉は西側に！

エリオとキャロとシャマルとザフィーラは、密輸品の確保を――！』

『了解――！』

私はロングアーチを通じて全員に指示をする。

この振り分けは敵の戦力層に偏りがあるから。

特に北側は、アンノウンの反応があるという事で最も実力の高い私とティアナ・スバルが受け持つ事に。

ちなみに、ヴィレイサーというのはスバルのお父様である陸士108部隊隊長・ナカジマ三佐の部下。

彼も機動六課に勧誘されていたらしいが、断られたとはやてから聞いていた。

他のみんなは順調に敵機を退けていたが、私達北側は紫の髪の少女の『相棒』に苦戦を強いられていた。

「……はあああああつ！

『ブレイク』っ――！」

私はガジェット群の撃破を二人に任せ、少女の相棒と激戦を繰り広げていた。

対AMF兵器群という事で普段訓練でしか使った事がないアルティの格闘形態で戦っている。

私の渾身の一撃に『それ』は少しだけ怯んだが、すぐ重い反撃を繰り出す。

「う…っぐ…!？」

その一撃を辛うじて防いだものの重く鈍い衝撃が私の体を痛め付ける。

「…『ガリユー』、あの人強いね…苦勞しそう？」

ガリユーと呼ばれた、その『召喚獣』は左右に小さく首を振る。

「…そう。

でも、時間切れ。

インゼクト達がレリックを確保したって。

私達だけでも帰ろう」

ガリユーは小さく頷くと、少女の展開した転移魔法とともに消えていった。

その後まだ多く残っていたガジェットの掃討のため、3人で戦っていた。

しかし、ティアナがクロスファイアを無理に乱射してスバルを誤射しかける事態が発生。

「シュー…あっ!？」

ティアナの射線をスバルが塞いでしまう。

背中を見せているスバルは気づいていない。

私は、2人が近づきすぎている事にかなり嫌な予感がしていた。

そのためスフィアを2人の近くへと移動させ、不測の事態に備えていた。

これが結果的に最悪の事態を防ぐ事となった。

「ティアナっ!!」

何やってるの…今の完全に直撃コースだよ!？」

私はティアナを怒りを露にして怒鳴りつけていた。

スバルは滅多に見せない私の怒鳴り声に驚き、慌ててティアナをフオローしようと言いつくをする。

「あの、私がいけなかったんです！
私がちゃんと、気を付けていれば…」

ティアナは驚きと自責の念で目を見開いている。

「…もういい!!」

あとは全部私がやる…!!

あなた達は少し、反省してなさい!!」

私の叱責につくりと肩を落とす2人。

『…パシンッ!!』

ガジェットを掃討したあと私は憎まれ役を演じる為、ホテルの裏手で2人に平手をうち反省を促した。

怒りはあったもののそれを表には出さず、普段と同じ穏やかな声で2人を叱っていた。

「…ティアナ、常に仲間の動きは把握して。

それと無理は絶対ダメ。

スバル、ティアナが訓練校時代からの相棒だからって警戒しなさすぎよ。

非殺傷設定だって万能じゃない、一歩間違えれば死ぬ事だってあるの。

私達は簡単に人を殺しうる力を持っている…そういう自覚を持たないと、いつか大変な事になるよ?」

私はこの時2人の為を思いあえてきつく注意した。

それが結果的に、ますますティアナを追い詰めていた事になると知らずに…。

「なあ、ティアナの奴何があっただんだ?

いつにも増して鬼気迫った顔で自主練してたぞ」

夜、六課隊舎でヴィータにティアナが休めとの指示を無視して訓練をしていたと聞かされた私。

「…たぶん、私のせいだと思う。
実は昼間ね…」

私は昼間の事をヴィータに説明した。

「…なるほどな。

確かに若いうちは、もっと強くなりてーなんて考えをする奴は多い。
ただどあいつの場合、少し度が過ぎてるってか無理をしすぎるところがある。

自滅するパターン…なんだよな」

「…なのはも、ティアナに軽く注意するって…言っているけど。
何か悪い事が起きなければいいんだけどね…」

「ティアナが、あそこまで拘る理由って何だ？」

「それは…」

6年前。

ティアナの兄のティード・ランスターは、一人の次元犯罪者を追っていた。

実はその時、私も彼と同じ任務についていた。

次元犯を陸士部隊とともに追い詰めたのはよかったが私の判断ミスでティードが撃たれてしまう。

逮捕には成功したものの、ティードは傷がもとで殉職してしまった。事件に際しティードの上司の1人が心無いコメントをしたと聞いている。

それが、当時10歳だったティアナの心にどれ程深い傷をつけたことか。

私は表向きには参加していない事になっていた為に、何も言われる事がなかったのだ。

しかしそれが逆にティードに対する罪の意識となって私の心に影を落とした。

その後の私は、ティアナと同じように力を求めた。

周りの仲間、親しい友人…『大切な人達』を護る事ができる本物の『強さ』を…手に入れる為に。

1年後、私はなのは達との友達付き合いを絶った。

『強さ』を求めて心が醜くなっていく私を見られなくなかったから。

狂ったように仕事をこなし休みは最低限しかとらない生活が続いた。

気がつくと私は、15歳で一等空佐に昇進するほどの実績をあげていた。

事件当時今のはやてと同じ階級だったが、正規局員としてのキャリア

アが長いのと潜在能力の為此ここまで早い出世となったのだ。

私の事を、人は畏敬の念を込めてこう呼ぶ…『聖女の皮を被った悪魔』と。

そう呼ばれるのは構わない…『失う事』に比べたら、何倍も気が楽だ。

そんな背景があるにも関わらず私が昔と同じ穏やかな心をなくさなかったのは…奇跡だと思っている。

私とティアナは、ある意味同じなのだろう。

大切な人を失う、あるいは失いかける辛さを味わっているから。

「侮辱された兄を代わりに見返すため、だと？
…下らん」

今のは昼間、一緒に任務に当たった陸士隊員。

ヴィレイサー・セウリオン一等陸尉、21歳。

私とは2年前から時々だが会っている。

六課と友好的な陸士108隊という事で今回の任務に協力していたのだ。

「あいつの考えはわからん訳でもないが、そんな考えしてたら命が

幾つあっても足りない」

「…私が言える事じゃないけど、ティアナは『証明』したいんだと思う。」

…自分の力を、お兄さんが目指した執務官に…自分になる事で」

「その間違いに、早いとこ気づくといいがな」

ティアナは私達が諫めてもその後過度の鍛練をやめる事はなかった。

そして…ある日の模擬戦でそれは起こった。

「はあ、はあ…。」

あ、もう始まつてる！」

息を切らせて、飛び込んできたのはフェイト。

「今はスターズの番。
なのはが相手してる」

ヴィータが模擬戦の状況をフェイトに伝える。

「私も一緒に訓練できたらよかったんだけど…。
アリスは？」

「万ーに備えて近くで待機してる。
今のあいっすら危なっかしいしな…。
お、クロスシフトだな」

幻術とスバルの攻撃を囿にティアナが、なのはを攻撃していく。

一見、それはいつもと同じように見える。

だが…。

「つく…ティア…!!」

なのはを抑えてティアナの連携を待つスバル。

スバルの移動用魔法である『ウイングロード』を走るティアナ。

『防御を切り裂いて確実に当てる…!!』

自身の『デバイス』クロスミラーージュに、魔力の刃を展開させるティアナ。

「一撃必殺っ!!」

…てええええっ!!」

ティアナは必倒の一撃を、なのはに見事当てた…はずだった。

なのはは何と素手…つまり白刃取りでティアナの攻撃を凌いだ。

スバルの拳を、左手だけで止めながら。

「おかしいな…2人とも、どうしちゃったのかな？」

本番でこんな危険な無茶をするんなら…練習の意味、ないじゃない。私が教えた事、私の訓練…そんなに間違ってる…？」

冷やかな声で2人を諭すのは。

ティアナは大きく離れて、デバイスを構え直す。

「私は…っ！」

もう、誰も傷つけないから…なくしたくないから…だから…強くなりたいですっ…！」

涙ながらに叫ぶティアナ。

「頑張るのはわかるけど、模擬戦は…喧嘩じゃないんだよ？
…少し、頭冷やそうか」

クロスファイア・アクセルシューターを発動させて、なのははティアナを撃とうとする。

「…うああああっ…！！
ファントムブレイク…！」

「…クロスファイア。
シュート」

桜色の光がティアナに襲いかかり、着弾と同時に爆発する。

「ティアあああ…！！
…はっ、バインド…！」

拘束されている事に気づくスバル。

「じつとして…。
…よく見てなさい…」

なのはは2撃目を撃とうとする。

それがティアナに当たろうとする瞬間に、金色の光がアクセルシューターを撃墜した。

「なのは…」

割り込んだのは…私。

「邪魔しないでよ…アリスちゃん。
これは私の『教導』なんだから…」

「…もうやめて…」

こんなのは教導でも、訓練でもない。

それを当てたらティアナは二度と立ち直れないよ。

なのははどうかしてるよ…ストレスの捌け口に、部下を折檻なんて…上司のする事じゃないよ。

ティアナもただどなのはも頭を冷やすべきだよ。

まだ続けるのなら…今度は私が相手になるよ」

私の目からは、自然と涙が溢れてきた。

過ちを、犯してほしくないから。

私はフォトンシューターを発動させる。

なのはは考え直したのか、展開したスフィアを消してもとの穏やか

な顔に戻る。

「…ごめんね。」

そんなつもりじゃなかったけど…ちょっと我慢ができなくてね。今日はここまで、2人とも撃墜扱いで終了ね。

みんなごめんね、しばらく一人になりたいんだ…」

なのははそういつて、先に戻ってしまった。

こんな空気では訓練は続けられないと、ライトニングの訓練は中止となった。

どうにかこの場は収まったようだが、三人の信頼には亀裂が入ってしまった。

この溝は、果たして埋まるだろうか…？

その夜、私は自主練をするティアナの元に行った。

「…あつ、一佐！

…すみませんでした、私を庇ってくれたそうで…」

「気にしないで…」。

私をもっと早く止めるべきだった。

みんなのズレに、気づいていながら…何もしなかった私が悪いの…」

「そんな、顔をあげてください！

一佐…アリスさんは、何も悪くありませんから！」

あわてて取り繕おうとするティアナ。

「少し私の話聞いてもらえるかな？」

…と、その前に」

私はスポーツ飲料が入っている携帯用ポットを彼女に手渡した。

「あ…すみません。

頂きます」

近くのベンチに腰かける、私とティアナ。

「…私はティアナに、謝らなきゃいけない。

6年前の事件、私はあなたのお兄さん…ティードさんと一緒にいたの」

「…えっ？」

「ある次元犯罪者を追っていた私達は、犯人をやつと追い詰めたんだけど…」

驚きつつも冷静に私の話を聞くティアナ。

「あの時、私が早く犯人を取り押さえたくてかなりの無茶をした。今日のあなたみたいに。

彼は罠にはまった私を守るために犯人達に撃たれて…殉職した。

私は記録に載っていない、ある治癒の秘術が使えるんだけど…救えなかった。

そのあとはあなたも知っている通り。

ただ…もつとも責められるべき私は、任務に参加した記録すらなかった。

しかも誰からも、何一つとして非難されなかった。
それが逆に悔しくて…」

「…嘘だ!!」

どこかで聞いたような怒りのセリフを、私にぶつけるティアナ。

「嘘じゃないよ…」

こんな事、作り話にできると思う?

私も12年前に『家族』を失っているからティアナの辛さがわかる。
誰も失いたくないっていう思いも、私にはよくわかるんだ…」

「……」

「それからの私は、大切な人達を守り続けられる強さを求めた。
なのは達と会わなくなったのも…『友達』の優しさに逃げたくなかったから。

ティードさんの死を無駄にしない為、私なりに必死で頑張ってきた
んだけど」

…私はそこで、一度言葉を切った。

「…でも、ダメだった。

私ではただ虚しくなるだけだったの。
それに気づけただけでも、よかったと思うけど…」

私は向き直り、ティアナをじっと見つめる。

「…ティアナ。

あなたには私みたいな過ちをして欲しくないの。
がむしゃらに突き進むだけじゃ、いつか挫折する。

たまには周りを見て、休む事も必要だと思う。

忘れないで…あなたには、頼れる『仲間』がたくさんいる事を。

そしてあなたを追い詰める原因を作ってしまった事を…それだけは
謝りたいの」

「……………」

「ティードさんを死なせてしまった事を、許してくれとは言わない
よ。

いくらでも、恨んでくれていいから……」

「……………」

「ただひとつだけ言わせて欲しいの。
本当に…ごめんなさい」

「……………」

沈黙。

痛いほどの静寂が、私達を包む。

わずかな時間が私には永遠に感じた。

「…もう、いいです。

あなたが兄の死を無駄だと思っていないのなら、私はそれで構わな
い。

あなたを恨んだって、兄は帰ってきませんから。
私の方こそ、あんな無茶をしてすみませんでした。
なのはさんに言われた事の意味、今はよくわかりますから……」

ティアナはそういつて私を許してくれた。

「アリスさん。

…ひとつだけ、わがママを言ってもいいですか？」

「なに？」

「…今日の苦い経験を忘れないために、自分の心を…もっと強くしたい…。」

不甲斐ない自分に、けりをつけるために。

…だから、思いつきり泣きたいんです。

…できれば、あなたの腕の中で…」

意外な頼みだったが、私は快く受け入れた。

「…どうぞ。

私で構わないなら…」

「…う…あ…ああ…。」

…あああああつ!!」

ティアナは私に体を預けて胸に顔を埋め子供のように大声で泣いていた。

私は母親が子供にする時のようにぎゅっ…と抱き寄せ優しく頭を撫でてあげた。

ティアナはしばらく泣いたあと「すみません」とだけ私に言って、隊舎に戻っていった。

ティアナはその後なのはやスバル、ヴィータに謝っていた。

3人も自分達の非を詫び、充分「お話」をして…絆を取り戻した。

ティアナは少しだけ性格が変わったようだ。

ツンツンした感じが和らぎ以前よりもスバル達に対し優しくなった気がする。

それは訓練にもいい影響を与え、以前にも増して凄いスピードで成長しているとなのは太鼓判を押す。

…もう、ティアナは大丈夫だろう。

センターガードには大敵の焦りは微塵もなく、余裕をもって訓練に取り組む事ができているから。

フォワード陣分裂の危機は何とか回避され、彼女達はさらに結束を強めた。

軋轢（後書き）

いかがでしたか？

酷かったですよね…。
すいません。

次はヴィヴィオ登場… かもしれません。

では、また次話で。

休日（前書き）

ヴィヴィオ登場。

相変わらず駄文です。

では、14話をどうぞ。

休日

ある日の早朝訓練でなのははこんな事を言った。

「みんなだいたいいい感じになってきてるね。」

実は今日第二段階の見極めテストだったんだけど」

「…え？」

「私は十分だと思うけど、フェイトちゃん達は？」

私達に新人達の是非を問うのは。

「…うん、合格」

「セカンドモードでも十分対応できると思うよ」

「まあ、こんだけみつちりやってきて問題があるようなら大変だつて事だ」

4人の成長に太鼓判を押すフェイト・私・ヴィータ。

『…やった!!』

「次からセカンドモードをメインに訓練していくよ」

「セカンドのリミッターはリリース（解除）しておくから、あとでシャーリーのところに持っていてって」

私とフェイトが必要事項を伝達する。

「…でね、三人と相談して明日から第三段階を始める事にしたから」

「…え、明日から？」

4人にとっては意外な事をなのは言い、思わず聞き返すキャラ。

「…ああ、訓練再開は明日からだ」

「つまり、今日は4人ともオフシフトっていう事。」

私達も隊舎で待機だから、今日は目一杯羽を伸ばすといいよ」

ヴィータと私が4人の疑問に答える。

が、ここでののはが意外な事を言った。

「…ああ、アリスちゃんも今日はオフシフトだよ。」

最近はまだ休んでいないよね、折角だからこの機に羽を伸ばしたら？」

「え、でも…」

「いいから休めって。」

この間のなのはみてーな事になりてえのか？」

「あう…ヴィータちゃん、それはもう言わないで」

新人達とフェイトは思わず笑えない…とばかりに苦笑する。

ブツンした私が…確かにそうだったらなのは以上にひどい事を
てしまうかもしれない。

能力限定のせいで忘れがちだけど、認定ランクは最高の空戦SSS
+だし。

…結局、私はみんなに押しきられて休む事に。

突然できたお休みに、私はどうしたかというと…。

『…はい』

「すみません、突然」

『いや、構わないさ。』

俺も丁度隊長から、強引に休みとらされたからな。
だが俺といると色々まずくないか？
というか、何でそんな事になった？』

「…新人達がオフになったついでに、最近は働きづめだからって無
理矢理…」

『…なるほどな。』

だが本当にいいのか？
誤解されるだろう、おもにちび狸によって』

「…構いませんよ。』

私はあなたを信頼してますから。

一時間後に ……で、どうですか？」

『…一時間後だな？』

わかった、遅れるなよ』

…聡明な方なら、もう誰か察しただろう。

ともかく私は『その人』と一緒に過ごす事にした。

スバルとティアナは首都で遊び、エリオ達はデートのようなものを
経験。

私は『ある人』と会うため首都のとある場所で待っていた。

「…よう、待たせたな」

「いえ、まだ時間前ですから大丈夫」

「そうか、ならいいが」

「今日は仕事の事は忘れ…る訳にはいきませんが、せめて楽しみ
ましょう」

「…そうだな。

では行くか…アリス」

「ええ、よろしく。

一尉…じゃなかった。

ヴィレイサーさん。

あ、ちなみに敬語は無しでいきますから」

そう、その『相手』とは…ヴィレイサー・セウリオン一等陸尉。

私が信頼する数少ない男性の1人だ。

「…えいつ」

（むにゅん）

「…なっ!？」

私はわざとらしく彼の腕を自分の豊かな胸に押し付け強引に腕を組む。

「ちょ、やめろ…!」

嫌がる彼がかわいく見えたので、私はさらに意地悪をしたくなった。

「…こういう事されるの、嫌だった…?」

不安げな表情・上目遣い・目に涙の、通称『3連凶悪コンボ』。

「…くっ…!!」

頼むからそんな顔するな…あと、胸押し付けるな。
腕くらい普通に組め」

結構手強い。

「素直じゃないなあ…。
本当は嬉しいくせに」

私はさらに、彼の腕を胸に押し付ける。

「恥ずかしい事を止めると言ってるんだ！
…普通に組んでも、当たる大きさだろうが！！」

言ってから彼はしまったという顔をする。

「…もう、どこ見てそんな事をいつてるの？
…すけべ」

「~~~~~！！」

私は頬を染めながら、彼をからかう。

主導権は完全に私のものとなった。

彼は溜め息をひとつついて諦めたように言った。

「はあ…。」

とにかく腕は普通に組め、俺が色々と耐えられん」

「フフフ…了解。
さ、1日は短いよ…全力で楽しまなきゃ」

そして私はヴィレイサーと『デート』を楽しんだ。

ちなみに自分の分は自分で出している。

お互いに全部持つと言って譲らず、妥協案としてそうなったのだ。

ティアナは、ヴァイスから借りてきたバイクでスバルとタンデム（2人乗り）で首都を目指していた。

「で、どこいくの!？」

「首都にすっごい美味しいって評判のアイスのお店があるんだ、そこ行こ!！」

「アンタって本当にアイス好きよね…じゃあ、まずはそこに行きますか!！」

「えへへ、やった!！」

「じゃ、しつかり掴まってなさいよ!！」

「おっつ!！」

ティアナは、バイクを法廷速度一杯に加速。

目的の店に着いた2人は、評判の味に感動した。

その後もゲームセンター等を廻り、存分に休暇を満喫していた。

一方、エリオとキャロ。

こちらも2人なりに休暇を楽しんでいたようだ。

無理に背伸びせず、年相応の付き合いをしてくれればそれでいい……とフエイトは語る。

「大丈夫、キャラ？
疲れてない？」

キャラを気遣うエリオ。

「うん、大丈夫だよ。
エリオ君……私こういう経験した事ないから、なんだか楽しくって……」
『こういう経験』というのは、同年代の異性と遊ぶという意味だろう。

「僕もだよ、キャラ。
僕らは特別な状況だったし仕方ないけどね」

その時とても小さいが異様な音を聴いたキャラ。

「どうしたの、キャラ？」

「エリオ君、今何か聞こえなかった？
重い物を引き摺ったような感じの……」

2人は意識を集中させて、『音』を探る。

（ズツ……ズズツ……）

「…ほら！」

「確かに………うん！？
キャロ、あそこ……！」

エリオが指差した裏路地にフタの開いたマンホールがある。

「…凄く弱いけど、魔力を感じる。

ティアさん達やアリスさんが近くにいると思うから、連絡を……！」

「…う、うん！」

私は丁度、ヴィレイサーと昨年オープンした喫茶店にいた。

「…どうした？」

「ああ、仲間からの念話が入ったの。
近くに、不審な魔力反応があるって。
すぐ近くだから、あなたも一緒に来て」

「…そうか。

互いに休日返上、だな」

「仕方ないよ……放っておく訳にもいかないし」

「…だな」

「…ここです」

新人達と私とヴィレイサーは、例のマンホールの前にいた。

ヴィレイサーと一緒に来た私達に、エリオ達は驚いてティアナは苦笑した。

スバルなんか「デートですか!？」と目を輝かせながら聞いてきた。

別に隠す事でもないの、私は「まあ…そんな感じ」と返した。

…ヴィレイサーは否定していたけど。

取り敢えず私はエリオ達という反応を探ってみた。

「…確かにごく微弱な魔力反応がある。

少しずつだけど、近づいてきてる。

エリオとキャロの2人は、ヴィレイサーと。

ティアナとスバルは私と、この二組で中を探るよ」

『はい』

「了解」

大型水道管内部に入る私達6人。

反応の主はすぐ近くに存在していた。

「…あれは…人!？」

人影を見つけ、警戒しつつそれに接近する。

「…子供!？」

私はその子を見て驚く。

私やフェイトより少し濃い金髪、赤と緑の虹彩異色…オッドアイの少女。

左手には鎖に繋がれた銀のケースを引きずって。

かなりの長い距離を裸足で歩いて来たせいか、顔には疲労が濃く出ていた。

「…大丈夫!？
一体どうしたの!？」

その少女は私達を見つけて安心したのか壁にもたれて気絶してしま
う。

「…いけない、かなり衰弱してる…。
エリオ、キャロ!

この子を上にあげて、応急手当を!
ヴィレイサーとティアナとスバルはもうひとつあったはずのケース
を探すよ!」

『了解!!』

私は救援要請のためロングアーチをコールする。

「…フォワード00より、スターズ及びライティング01とロングアーチへ。」

サードアベニューF-21区画地下にて、レリックと思われるケースを所持した少女を発見。

少女はライティング03と04が地上に搬送、救護を要請する。

私はスターズ03及び04と108隊のヴェイサー一尉と共にもうひとつあると思われるのケースの搜索に当たる」

『スターズ01了解！』

『ライティング01了解』

『ロングアーチ了解！』

付近より多数のガジェット反応を捕捉、警戒を！！』

「フォワード00了解。

みんな、いくよ！！」

『はい！！』

「…ああ！！」

『…セット・アップ！！』

上空と地下、二手に別れて行動していた私達六課。

上空はなのはとフェイトとはやて、地下は陸士108隊のギンガ・

ナカジマ陸曹と合流した私達で当たっていた。

はやてによる超広域攻撃によって上空は何かあったが、地下はアグスタの時の少女とその仲間ケースを奪われてしまった。

さらにヘリへの長距離砲撃があつたが、なのはが寸前で防衛に成功。ティアナの機転で最終的には少女の保護と、レリック1つの死守成功という結果となった。

保護した少女はヴィヴィオという名前だった。

『ママ』を探してあの場所にいたらしい。

聖王治療院での検査でも、異常は見つからなかったが遺伝子パターンがある人物と完全に一致した。

…『オリヴィエ・ゼーゲブレヒト』。

古代ベルカの最後の聖王にして優秀な格闘家でもある『聖王女』。

私達はこの事から、彼女…ヴィヴィオがオリヴィエの生体情報を使って作られた人造魔導師であると断定。

私達がヴィヴィオの里親を探すため、一時的に六課の寮で預かる事になった。

「…お姉さん、誰？」

「ふふっ…はじめまして、ヴィヴィオ。

私はアリス、なのはさんやフェイトさんのお友達。
一緒にお仕事をしてる仲間でもあるんだよ」

ヴィヴィオはすぐに私達になついてくれた。

特にウサギのぬいぐるみをプレゼントしたなのはには一番なついて
いた。

なつきすぎて、少し困った事態にはなっただが。

それは私達が、聖王教会の本部に呼ばれた時の事。

寮母のアイナ・トライトンさんからヴィヴィオが駄々をこねて困っ
ているという知らせを受けたのだ。

「アイナさん！」

「ああ、皆さん！」

すみません…ご覧の通りの状況なんです」

ヴィヴィオは大声で泣いており、相手をするスバル達も困り果てて
いた。

「なのは、ここは私に」

フェイトよりも先に動いた私なのはに志願。

「…大丈夫？」

私が話した方が…」

「任せて…。」

「ちょっと自信あるんだ」

（あう…アリス酷いよ。

私がやりたかった…）

…フェイトが涙目になっているがあえて無視し、私はヴィヴィオの前に屈む。

ヴィヴィオの頭を撫でて、泣き止ませる。

「アリス…お姉さん？」

「ヴィヴィオ、ダメだよ…いつまでも泣いてちゃ。

なのはさんはヴィヴィオを守るためにこれから大事なお仕事があるの。」

ヴィヴィオはなのはさんを困らせたい訳じゃ、ないんだよね？」

…ヴィヴィオはこくん、と頷く。

「…じゃあ、いい子にして待っていないとね。」

ヴィヴィオがいい子にして待ってれば、なのはさんもフェイトさんも元気な顔で…ヴィヴィオを迎えに来てあげられるよ。

もちろん、アリスお姉さんもね。

いつまでも泣いていたら、なのはさんは心配でお仕事できないんだよ？

…わかるよね？」

「…うん」

「…ヴィヴィオは、強い子だもんね。」

アイナさんのいう事をよく聞いていい子にして待っていていられるかな？」

「…うん」

「…じゃ、約束しよう。」

私となのはさんとフェイトさんを困らせないって」

…私は小指で鉤をつくってヴィヴィオと『指切り』をした。

なのは達は私に感心して、フェイトは終始不満げな顔をしていた。

エリオとキャロの親代わりである彼女にとって、自分の方が経験しているという自負があるのだろう。

聖王教会の本部に行く道で私はフェイトに散々文句を言われたのは…
…いつまでもない。

その後、ヴィヴィオの里親探しは難航した。

出生が特殊とあって、誰も色よい返事をくれなかったのだ。

なのはとフェイトの2人はヴィヴィオが聖王教会系の孤児院に入れられるのならいっその事2人で育てようと決めたのだった。

そして2人の『子育て』が始まった。

なのは養母でフェイトと私が法的後見人となって、ヴィヴィオを見守る。

養子縁組に必要な後見人は2人までとなっているので私も後見する立場になれたのだ。

ヴィヴィオは、私達の事を『なのはママ』『フェイトママ』『アリスママ』…と呼ぶようになった。

『自分を見守ってくれる、優しいお姉さん』…というフェイトと同じ理由…だと思いが…私は正直少しだけ恥ずかしい。

すこし厳しいなのはママ、すこし甘いフェイトママの2人のママに見守られて…優しい子に育って欲しいと私は思っている。

アリスママもヴィヴィオの事をいつでも見守っているからね…。

休日（後書き）

アリスのコールサインが、初めて出てきましたね。

『フォワード00』。

スターズにもライトニングにも属さないの、これがいいかと。

ヴィレイサー君、まさかの再登場。

アリスママwww

自分でやっててフィタ。

次回は一気に飛んで、最終決戦かも。

崩壊（前書き）

本局襲撃です。

では、15話をどうぞ。

崩壊

新暦75年9月。

今日は地上本部主導の会議『公開意見陳述会』が開催される。

地上のトップのレジラス・ゲイズ中將が防衛兵器等の導入を通させるために開くとも噂されている。

私達機動六課の主要隊員も会場となる地上本部の防衛に駆り出される事になっていた。

しかし…管理局史上最悪の大失態を防ぐ事は、できなかった。

「新人四人となのはちゃんとヴィータと祝福姉妹は、打合せで今日の夜から。

フェイトちゃんとシグナムとアリスちゃんは私と明日朝イチで現着の予定や。

あとアリスちゃんには敵の対応を頼みたいから、外についてくれる？」

「ん、了解だよはやて」

「ほなヴァイス陸曹、前日組の移動とバックアップは頼むな？」

「了解！」

その夜、なのは達前日組が六課のヘリで現地へ向かう時の事。

「…あれ、ヴィヴィオ？」

どうしたの、ここは危ないところなんだよ？」

「すみません。」

ヴィヴィオが、どうしてもママ達のお見送りするんだって聞かなくて…」

アイナさんが、困った顔で訳を話した。

「なのはママ…」

ヴィヴィオが不安げな顔でなのはを見ている。

「たぶん、なのはが夜勤で出るの初めてだから…不安なんだと思うよ」

ヴィヴィオの不安を、私が代弁した。

「…そっか。」

ごめんねヴィヴィオ。

これからお仕事でお泊まりしなきゃいけないの。

でもヴィヴィオがいい子にして待っていてくれれば、明日の夜にちゃんと帰ってこられるよ。

ヴィヴィオの好きなあれ…キャラメルミルク、作ってあげるから。

アイナさんやママ達のいう事をちゃんと聞いて、いい子でいられるかな？」

「…ぜったい？」

「うん、絶対の絶対。
約束しよっか」

2人は指切りで『約束』をかわす。

なのはは、優しく微笑んだままの顔で本部へ向かっていった。

「さ、ヴィヴィオ。」

戻ろう…今日は私があるのはママのかわりにいてあげるから」

私はヴィヴィオに、優しくそう言ってあげた。

「あ、アリス？」

少し、話があるんだけど…いいかな？

ヴィヴィオ、ママ達大事なお話があるけどすぐに寮に戻ってくるからね。

アイナさんお願いします」

フェイトはそう言って当日組とヴィヴィオ達を隊舎へ戻らせた。

隊舎屋上、私とフェイトの2人だけが立っている。

「それで、話って？」

「…10年前に、母さん…プレシアが言っていた事を覚えてる？
私がアリシアの失敗作だといいい放った時の事。」

あの時アリスがアリシアにそっくりだとも言っていた事…覚えてる

よね？」

私は無言で頷く。

「私もアリスを初めて見た時に思ったの。

気持ち悪いくらいに、私にそっくりだな……って。

事件が終わって私の裁判も終了したあと、私は思ったの。

あなたが、私と同じようにアリシアの遺伝子を持っているんじゃないかって。

闇の書事件で私が書の中に閉じ込められた時ね、私はアリシアに会った。

その時にアリシアは、私にこう言ったの……。

『現実にいる、もう一人の私を……護ってあげてね……』って」

「……」

「事件後、リンディ母さんを通じて私達の遺伝子鑑定を内緒でしてもらった時……私は確信した。

あなたが、何らかの方法で生まれ変わった……アリシアなんじゃないかって。

思い込みかもしれないけど私にはそうとしか考えられなかった」

「……」

「8年前なのはが墜ちた時

『もう誰も墜とさない。

墜とさせはしない』

と私達に言って、あなたは誰よりも強くなろうと決心した。

アリシアと約束した私は、なのはみたいになっていくあなたをただ見てはいられなかった。

なのはも心配だったけど、アリスはさらに周りを突き放すようになっていった…私は耐えられなかった」

「……」

「6年前の事件を契機に、更に強くあろうと努力して私達から遠ざかったアリスを見て私は思った。

私がそこまでアリスに拘る理由って何だろうって。しばらく考えて私は1つの結論を出した」

フェイトは、まっすぐ私をじっと見つめた。

…紅玉ルビーのように紅く綺麗な瞳と整った顔を引き立てる透き通った白い肌に私は一瞬ドキツとしてしまう。

「長くなってしまったけど今から言うね。

私の本当の『想い』を。

…インテグラー佐…いえ、アリス」

「…はい」

予感がした。

決してしてはならない選択をしてしまう予感が。

「…私は、なのはと一緒に私を救ってくれた時から…あなたの事が好きです。

友達だとか、仲間だとか…そういうのではなく。

一個人としてあなたの事を愛しています。

それが、どれだけ間違っているのかはわかってる。

でも、それでも…私の中のこの『想い』をどうしても抑えられないの。

それに気づくのに10年もかかってしまったけれど…私の『想い』を受け入れてくれませんか…？」

フェイトの顔が暗がりでもわかるほど、紅く染まっていく。

私は今までヴィレイサーやアインスと仲良くした事はあったが、その裏で彼女の事も気になっていた。

私は、フェイトを悲しませないために何をしてあげる事ができるのだろうか。

…考えるよりも先に、体が動いていた。

「…んっ…！」

「！？」

私はフェイトの体を素早く抱き寄せ、とても柔らかなその唇を奪った。

わずかでも、永遠に感じる時間。

フェイトを抱き締めたまま私は顔を離す。

「…ぷはっ！

い…いきなり…！？」

フェイトの顔に、明らかな動揺が見える。

「…フェイトの『想い』は良くわかったよ。
私も…同じなんだ。

私を本気で心配してくれるフェイトに少しずつだけど惹かれてた」

「……」

「間違った事だとは…よくわかってたけど。

5年前、私がフェイト達と会わなくなったのにはね…もうひとつ理由がある。

それは…私が、フェイトに抱いてる想いを知られなくなかったからなの。

もし知られたら、友達ではいられなくなる。

それどころかもう会う事も叶わなくなるんじゃないか…って」

「……」

「私は弱くて臆病だから…間違えてたんだと思う。

フェイトがこんなに想ってくれているのにも…気付かないで、自分は想いを心の奥に封印してしまった」

自分の思いの丈をフェイトに伝える。

フェイトは、それを黙って聞いていた。

「…こんな弱い私でもいいのなら…あなたの想いを、受け取らせて貰える？」

…フェイトの答えは、既に決まっていた。

「…うん。
もちろんだよ、アリス」

それ以上の言葉は、要らなかった。

…フェイトは私の体を強く抱き締め、私もフェイトを強く抱き締める事でそれに応える。

「アリス…大好き…
誰よりも…あなたが…」

そして、2度目のキス。

『ん…ふ、うつ…んむっ…くふ…んう…っ…!』

今度は、大人の。

…アインスの時とは違う、恋愛感情が絡む…きちんとした愛の繋がり。

わずかな時間だが私達には充分だった。

お互いの唇から、銀の糸を引きながら…顔を離す。

「…さ、戻ろうか…」

ヴィヴィオが心配しているだろうし」

「…うん」

まだ紅を差す、フェイトの顔。

この日、友達としての私達2人の関係は崩壊した。

そして、新たに『恋人』という関係が築かれた。

ちなみに…待ちくたびれたヴィヴィオが駄々をこねた事は、言うまでもない。

翌朝、はやてからこんな事を言われた。

『…ゆうべは、おたのしみでしたね』

その一言で私もフェイトも顔が真っ赤に。

どうやらはやてに一部始終見られていたらしい。

気を取り直して、公開意見陳述会だ。

アグスタの時と同じようになのは・フェイト・はやてが本部内に。

はやての護衛はシグナムとアインス、私はヴィータと外警備組の指揮のために打ち合わせをした。

…開始まで3時間、何事もなければいいが…。

「はやて、シグナム！
なのは、フェイト！！」

…ダメ、中と念話が繋がらない！」

「通信もダメだ！」

くそ、やられた…！！」

異変はいつも、突然襲って来る。

陳述会開始から数十分後、突如上空と地上に戦闘機械ガジェットが大量出現。

私とヴィータは本部にいるのは達と連絡を取ろうとするが、通信も念話も全く繋がらなかった。

本部の管制センターがある辺りからは煙があがる。

さらに本部へオーバーSの航空戦力が接近。

「…私はガジェットの掃討援護に当たる！」

ヴィータはツヴァイと一緒に航空戦力を止めて！

4人はなのは達にデバイスを届けて…ヴィータ！」

「あいよ！」

…ちゃんと届けろよ…！」

『はい…！！』

はやて達の救出をスバル達に任せ、私は地上武装局員の混乱を抑えにかかる。

「ヴィータ、ツヴァイ！」

…気をつけて…！」

「おう、お前もな…！」

「くれぐれも、無理だけはしないで下さいです…！」

『ユニゾン・インっ…！』

ヴィータとツヴァイは接近する未確認戦力にを抑えに当たった。

「セットアップ…！」

素早くバリアジャケットを展開する。

「…アルティ！」

マルチバースト…！」

『了解…！』

ガジェット5機を同時攻撃で落とす。

「みんな、頑張つて！」

私が前に出て抑える…！」

防衛に当たっている局員達を鼓舞する。

「おお、あなたは…！」

「インテグラ―佐！」

…よし、これで形勢を立て直せる…！」

局員達と協力して、大勢が決した時私はひとつの疑問を抱く。

「妙だな…」

攻撃が粗すぎる。

施設の破壊や陳述会が目的なら、普通は戦力を集中し一気に叩くはず。

これだけの戦力を投入しているのなら、それも不可能じゃないのに…」

そして私は、ある結論へと達する。

「まさか、本部の襲撃は陽動!？」

だとしたら狙いは…!

ロングアーチ…!」

私は急ぎ、ロングアーチへ連絡を取る。

が、応答はなかった。

胸騒ぎを感じつつ、六課へ戻った。

一方、局員の助けによって脱出したなのは・フェイトはスバル達と合流。

なのは達スターズは『戦闘機人』と交戦中と思われるギンガの救援に。

フェイト達ライトニングは脱出を果たしたシグナムと六課に戻る。

「…む？」

テストロッサ、インテグラ…お前達は先に行け。
私はヴィータの方に行く」

「何かあったんですか？」

フェイトが訊ねる。

「ツヴァイがユニゾン中に意識を失った。
グラーファイゼンも、破壊されたらしい…」

「…わかりました。
気をつけて…」

私が送り出す。

「ああ、お前達もな」

シグナムと別れ、エリオ達とフェイトと六課へと急ぐ私。

「…はっ!？」

アリス、危ないっ!!」

咄嗟にフェイトが私の前に出て庇う。

敵の奇襲攻撃を、どうにかやり過ごす。

前方には、揃いの戦闘服を着た2人の少女がいた。

「さすがフェイトお嬢様。

今の一撃が通るとは思っていませんでした…」

ヘッドギアのようなものをつけた方が言う。

「フェイト、彼女達…」

フェイトは怒りを露にした表情をする。

「そう…戦闘機人。

広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッティが製作した人機融合の人造生命体。

この前とは、また違う子がいる…！」

「『ナンバーズ』？
トーレだ」

「お初にお目にかかりますお二方。
『ナンバーズ』？、セツテと申します」

私は直感した。

この2人相手にインパルスフォームのままのフェイトは勝てない。

だが、ソニックを使わせる訳にはいかない。

「フェイト、2人と一緒に先に行つて」

「え、けど…！」

「…いいから!!」

私の剣幕に思わずたじろぎエリオ達と機動六課へ急ぐフェイト。

「フェイトさん!

いいんですか!?!」

キャロがフェイトに聞く。

「いいの…。」

彼女の実力なら、最低でも負けないはずだから…」

「…懸命な判断だ。

何れ全て無駄になるが」

「…アルティ!

サイド・フォーム『エクスカリバー』!!」

『了解!!』

デバイスの刀身が格納され輝く魔力の刃を展開。

「IS発動!

ライドインパルス!!」

「…IS発動。

スローターアームズ」

トーレとセツテも『IS』を発動させる。

『はああああっ!!』

怒号にも似た気合を発し、私は2人に斬りかかる。

フェイトはエリオ達と六課へ急ぐが、その途中で戦闘機人2人と召喚師の少女に接敵した。

「…うわあああっ!!」

「エリオ君っ!!」

「エリオっ!!」

…うぐ…っ…!!?

フェイト達はナンバーズのオットー(?)とディード(??)と召喚師の少女の『相棒』ガリユーに苦戦を強いられる。

「ツインブレイズ!!」

「…しまっ…!!?

きやあああああっ!!」

一瞬だけできた隙を突かれディードのISに斬られて海へと墜ちるフェイト。

援護をしていたキャラも、彼らによってフリード共々撃墜された。

「あら…つい力を入れ過ぎましたね」

「一応捕獲対象だったんだ…やりすぎだと思う。
ドクターが何ていうか」

「…くう…っ…！」

私はトーレとセツテに苦戦を強いられていた。

「…ここまでです。」

私達戦闘機人は、あなた方生身の人間の何倍もの時間を戦えます。
…もっとも、そんな事にはならないですが」

「…はあ……はあ……」

体力と魔力を削り取られ、体の動きが鈍い。

「これでわかつたろう。」

半端な力は、私達には通用しないことを。

他の妹達も、撤退を始めている頃だ…私達も退かせてもらおうか。
ひとつ言っておく…お前は何も守れやしない。
小さな命すらな」

「…小さな…命…！？
まさか…！！！」

撤退していく2人。

「そんな…そんな…!!
…ヴィヴィオ…っ!!
…あああああ!!」

最悪の夜が明けて。

あのと、施設破壊を実行しようとするガジェットはキャロが召喚した大型竜騎『ヴォルテール』によって殲滅。

しかし、地上本部と六課が受けた傷はひどかった。

死者こそ出なかったものの重軽傷者数百名。

重体であったヴァイスや、海に墜ちたフェイトも峠は越えたが依然予断を許さぬ状況だった。

ヴィヴィオとギンガが拉致され、レリックも奪われて私達は敗北した。

そんな状況でも、なのははいつも通りに振る舞う。

ヴィヴィオがさらわれて、一番辛いはずなのに。

聖王治療院。

負傷した六課隊員がここで治療を受けている。

私はティアナと共にスバル達を見舞いに訪れた。

ティアナをスバルのもとへ向かわせ私はエリオ達からフェイトの様子を聞く。

「…峠は越えました。

ただ空から叩きつけられたのと長時間海にいたせいかな…眠ったままです。

早めに目覚めれば、すぐにでも復帰できると思いますが…」

「…ごめんね、2人共。

私の判断ミスで、フェイトまでこんな目に…！」

気にしないでと言う2人の優しさが、私には逆に辛いものでしかなかった。

私は病室で眠るフェイトに一言だけ詫び、彼女の愛機バルディッシュ・アサルトに伝言を託した。

…あなたの代わりに、必ずスカリエッツィを逮捕するから…と。

その夜、私はなのはの様子を見に行った。

「アリスちゃん…」

「なのは、大丈夫…？」

「…うん、どうにかね」

そう言つて伏目がちになるなのは。

「ヴィヴィオの事…考えてたの？」

「約束…破っちゃったな、って。

私がママ代わりだよって、護つてあげるって約束したのに…！
側にいてあげられなかった…護つてあげられなかった…あの子、き
つと泣いてる…！！

それに、フェイトちゃんもあんな事に…っ！」

「なのは…」

私はなのはを抱き締める。

「悲しい思いや痛い思いをしているかもしれないって思うと…体が
震えて…どうにかなりそうなの…！！

今すぐ助けにいきたい！

だけど…私は…っ！！」

「大丈夫…。

ヴィヴィオも、フェイトもきつと大丈夫…！

ヴィヴィオの『ママ』で、フェイトの親友のなのはが…2人の事を
…信じてあげないと」

「うつ…うつ…！」

「ヴィヴィオがさらわれてフェイトがああなったのは私のせい…。だから、信じよう。2人は大丈夫って」

「あ…ああ…あ…!!」

私の胸で、ただ泣き続けるのは。

「絶対に、助けよう…」。

私達で…!

フェイトも、それを望んでいるはずだから…!!」

半壊した六課隊舎の代わりに、かつて私達が所属していたアースラが使われる事になった。

最大就役年数の経過により退役が決まっていたが整備と改修を経て、再び私達の『翼』となった。

「アースラ…懐かしいな。」

私達4人の中では私が一番長く関わってるから…」

「隊員の住居とか、諸々を考えると…本部は絶対必要やしね」

「今後を鑑みるに、移動が可能な本部が必要になる…と部隊長は仰ってるよ」

『…ロツサー!』

ヴェロッサ・アコース。

本局の査察官で、聖王教会の騎士カリム・グラシアの『義弟』。

はやてにとっては『義兄』でもある、クロノの幼馴染なのだ。

「アリス、久しぶり。

クロノとはやての頼みで、僕が許可を取ったんだ。

君達の、思い出の艦だから…ね」

「そうなんだ…。

アースラ、もう少しだけ…私達と頑張ろうね。

全て終われば、ゆっくりと休めるからね…」

私は長い間共に戦ってきた『戦友』に、励ましの言葉をかけたのだ
った。

崩壊（後書き）

やっぱり難しい…。
頑張ります。

次回はゆりかご戦。
長くなると思います。

決戦（前書き）

一本に纏めたかったのですが、無理でした。

ゆりかご決戦・前編。

では、16話をどうぞ。

決戦

『痛いよ、怖いよ…！』

ママ……！』

「ヴィヴィオ…っ！！」

レイジングハートを握る手に力を込めるのは。

あの悪夢から1週間。

スカリエッティは、大型の戦闘艦『聖王のゆりかご』を起動させて
宣戦布告。

同時に首都・クラナガンにナンバーズ3人と洗脳したギンガ、大量
のガジェットを差し向けて攻撃をかけるのだった。

首都防衛もだがゆりかごが軌道上に到達すれば、破壊は不可能にな
る。

私達機動六課は仮の本部・アースラにて、事態に対処するべく動い
ていた。

「ゆりかごは絶対に止めなあかんし、首都の防衛かて疎かにはでき
ん。

スカリエッティを逮捕せなならん事考えると、三手に別れるべきや。
本局や地上本部も、私達に協力してくれる。

なのはちゃんとヴィータがゆりかごに。

アリスちゃんはシャッハとロッサに合流して、スカリエツティの逮捕に。

残りは首都防衛優先しつつゆりかご組の支援や。

アインス、久しぶりの実戦になるけど…ええか？」

「はい、我が主。

この私…祝福の風・リインフォースは、最後まで共にあります」

はやての傍らに控える美女リインフォース・アインスは、まだまだ現役だという意味を見せる。

「フォワードのみんなにはまた負担かけてしまっけどよろしく頼むな」

『はい！！』

「グリフィス…アースラの指揮、任せてええか？」

「もちろんです！」

レティ・ロウラン本局統括官の息子の、グリフィス・ロウラン。

彼ははやて不在時のロングアーチ指揮を担当。

「ギン姉…」

「スバル…」

敵となった姉ギンガを思うスバルと、彼女を心配するティアナ。

「…シスター・シャツハ、ロツサ…そちらは？」

私はアジトに先行しているヴェロツサとシャツハに、現状を確認した。

『おそらく、まだアジトにいるかと思われます』

『早く来てくれ…こちらこそそう長く持たないよ』

フェイトの復帰は期待できないから、スカリエツティは私が逮捕するしかない。

今回は現行犯という事で、私にも逮捕権がある。

「…了解。

では…騎士カリム、私達の限定解除申請承認をお願いします」

『…わかりました。

高町なのは・八神はやて・シグナム・ヴィータ及び、リインフォー
スアインスとアリス・インテグラの能力限定完全解除を承認。
解除時間・無制限。

リミット…リリース！』

「フェイトさんの悔しさを必ず晴らして下さいね」

執務官を目指すティアナが私を励ます。

「うん、わかってる。

…スバル、ギンガは絶対に助けられるよ。

あなたがそう信じていれば絶対に…！」

私はスバルを励ます。

「…はい。

ありがとうございます」

私達は出撃のために、降下ハッチへ向かう。

スバル達4人はヴァイスの後輩アルト・クラエッタがヘリで首都まで運ぶ。

『セットアップ！！』

バリアジャケット展開。

「あ、アリスちゃん！

その格好は…！！」

「うん、フェイトのバリアジャケット。

バルディッシュにデータを譲って貰ったの」

私は、いつものジャケットではなく…フェイトが着る黒のバリアジャケット。

これは…私の『覚悟』。

フェイトの『魂』と共に、必ず作戦を成功させ…無事生還するとい
う私の決意の表れなのだ。

「フォワード00。

アリス・インテグラ…。

行きます!!」

「スターズ01!

高町なのは!

行きます!!」

「ロングアーチ00!

八神はやてと、祝福の風・リインフォースアインス…いくよっ!!」

「スターズ02!

鉄槌の騎士ヴィータ!

いくぜっ!!」

「ライトニング02!

剣の騎士シグナムとリインフォースツヴァイ…!

行くぞっ!!」

それぞれの目標を目指し、アースラから出撃する。

ゆりかごの軌道到達まで、あと…4時間を切った。

「Sideフェイト」

「…う…んっ…」

明るい部屋で、目を覚ます私。

『It awakes .

Good morning Sir』

(お目覚めですね、お早うございます…サー)

「…バルディッシュ…私、どのくらい眠ってた?」

『It is just one week』

(丁度、1週間です)

「…えっ、そんなに!?」

『To come straight to the point ,
there is a message from Miss
integrator』

(早速ですがミス・インテグラより伝言があります)

「…アリスから?」

『Yes .

“I'm sorry for becoming such a
thing .

Because I will surely dispel y
our chargin .

Because Scaglietti is arrested
without fail instead of you”』

(はい。

『こんな事になってごめんなさい。

あなたの悔しさは…私が、きつと晴らしてみせる。

あなたの代わりに…スカリエッティを、必ず逮捕するから』(

「…アリス…！」

彼女のメッセージに、私は拳を強く握る。

『Are what the situation is confirmed?』

（現在の状況を確認なさいますか？）

「…うん、お願い」

『Yes, Sir』

バルディッシュが、現状をモニターに表示する。

スカリエッティによる古代兵器『聖王のゆりかご』の起動。

その玉座に拘束されているヴィヴィオ。

首都を襲撃するガジエツトの大群とナンバーズ。

その中にいるギンガ。

ゆりかごの撃破の為に戦う六課と本局魔導師。

ギンガ達を止めるべく追跡するスバル達。

軌道上で最終ラインを形成する次元航行部隊と、それを指揮する義兄クロノ。

ヴィヴィオを救うために、ゆりかごへと向かっているのは。

先行しているヴェロッサとシャッハに合流し、スカリエッティのアジトへと突入するアリス。

しかもアリスのジャケットは、私と同じ黒でデザインも同じ。

私は…油断したばかりに、乗り遅れてしまった。

「…バルディツシュ、私達も行くよ!」

『Yes , Sir!』

私は『相棒』と共に、戦場へと向かう。

ザフィーラやヴァイスも、重傷の体を引きずり戦場へ戻ったらしい。

ゆりかごの軌道到達まで、あと、3時間…。

〔Side out〕

〔はやてSide〕

「ふう…」

途中から数えるのをやめたガジェットを撃破し、私は溜息をついた。

「大丈夫ですか、主?」

『初代』リインフォース・アインスが私を気遣う。

「ん…平気や。」

この程度でへばつとつたら笑われてまうしな。

アインスの方こそ、大丈夫なんか？

実戦は、実に10年ぶり…なんやろ？」

「私も大丈夫ですよ。」

私が独立する為に…と主に頂いたリンカーコアはまだ余裕があります。

それにしても…こう間近で見ると大きいですね」

「せやな…。」

私ら魔導師が束になっても太刀打ちでけん程や」

私は気合を入れ直した。

「さ、まだまだ来るで！」

少しでも地上の被害を抑えるんや！」

「はい、我が主！」

貫け…バルムンクっ！！」

アインスが、ガジェットを同時攻撃魔法バルムンクで撃ち落としていく。

こりゃ、私も負けていられへんな…！

何たって私は、機動六課の隊長やから！

ゆりかごの軌道到達まで、あと…3時間。

Side out

くなのはSide

私は焦りを感じていた。

一刻も早くゆりかごを停止させなければならない。

そのために、ヴィヴィオを救出したいのに…突入口が見つからない。

刻々と迫るリミット、疲弊していく戦力。

このままゲームオーバーを待つだけなのだろうか？

最後まで諦めたくない。

私は不屈の闘志、管理局が誇る無敵の若手戦技教導官『エース・オブ・エース』高町なのはだから…！

『高町一尉！

見つけましたよ…！』

不意に、本局航空魔導師の一人から通信が入る。

私は急ぎ表示された地点へ向かう。

10年来の友人で部下でもあるヴィータちゃんも突入地点にやって来た。

「ここです。」

気をつけて下さい…AMF濃度がかなり高いと思われます」

「了解です」

「2個小隊は、あたし達と突入だ、あとから来い。
他ははやて達の援護に」

『了解しました、ヴィータ二尉！』

私達はゆりかごの内部へと突入する。

ゆりかごの軌道到達まで、あと…2時間40分。

ヴィヴィオ、待っててね…ママが迎えに行くから！

くSide outく

くスバルSideく

「ギン姉…ギン姉っ！..」

信じられなかった。

信じたくなかった。

でも、これは現実…嘘でも幻でもない。

あんなに優しかったギン姉が『敵』として…私の前に立っている。

かなり強力な洗脳を受けているらしく、無表情で私を攻撃してくるギン姉。

私の『師匠』としての力は健在で、私の技がほとんど意味を成さない。

防がれ、受け流されて私はその度に重いカウンターを食らってしま
う。

ギン姉とは戦えない…戦いたくない！

私の思いとは裏腹に、容赦なく私に振り下ろされる…ギン姉の拳。

ティアは他のナンバーズの3人と、エリオとキャロはルーテシアと
いう召喚師の女の子と戦ってる。

突破口が、反撃の糸口さえ見つければ…！

「ウイング…ロード…！」

ゆりかこの軌道到達まで、あと…2時間半。

ギン姉は、私が必ず救ってみせる！

Side out

ティアナSide

ミスったな…。

私一人に、向こうは3人…更に私は足に怪我。

相手は格闘系のノーヴェ、砲撃系のウェンディに双剣使いのディード。

スバルもエリオ達も、敵の攻撃で分断された。

組織戦で勝つ為には、相手戦力を分断させるのが最も効果的だとなのはさんから教わってたのに…！

「ほらほら！

いつまでも隠れてないで、出てくるっすよ…！！」

11番…ウェンディが私を挑発する。

もちろん、のこの彼女達の前に出ていくつもりなど毛頭ない。

考えろ…どうすれば、この圧倒的に不利な状況を逆転できるのか…！

なのはさん達から教わった知恵と戦術…それを総動員してひとつの作戦を閃いた私。

タイミングがちょっとでもずれば、私は確実に死ぬだろう。

だが…やるしかない、無事生きて帰るために！

「私を守ってね…！」

クロスミラージュ…！！」

私は小さくそう呟き、相棒に力を込めたのだった。

ゆりかこの軌道到達まで、あと…2時間20分。

唯一の反撃のチャンスは、刻々と迫っていた…。

＼Side out＼

＼エリオSide＼

「ストラダー！！」

スバルさんやティアさんと引き離されてしまった。

僕達の相手は、あの召喚師の女の子・ルーテシアと…彼女の相棒の『召喚獣』・ガリユー。

アリスさんからガリユーの強さは聞いてたけど…彼女でも苦戦する相手なのに、僕達では勝ち目が薄い。

何とか、ルーテシアを説得できれば…！

ゆりかごの軌道到達まで、あと…2時間15分。

僕はもう一度ルーテシアを説得にかかった…。

＼Side out＼

＼シグナムSide＼

クラナガン上空。

私はかつて死亡したはずの『ストライカー』ゼスト・グランガイツと、ユニゾンデバイスのアギトと…対峙していた。

「何をしに本局へ？」

私はゼストに問う。

「古い友人に会う。
それだけだ」

「それは…。
復讐のためですか？」

「…理解してもらおうとはもとより思っていない。
道を塞ぐならば…押し通るまでだ」

「言葉にしてもらわねば…伝わらぬものもある」

私は眼前の武骨な騎士に、我が相棒で応える。

互いにユニゾンして、剣を交える。

ゆりかこの軌道到達まで、あと…2時間10分。

先程テストロッサが、目を覚ましてインテグラの元へ向かったらしい。

間に合うと良いが…。

Side out

Side

「は…は…！」

なのはと別れて、駆動炉に向かったアタシ。

なのははヴィヴィオを救出するため、玉座に向かっていった。

だけど…。

ちくしょう…ドジを踏んじまった。

8年前、なのはは大怪我を負わせたガジェット…。

あいつに、一撃をもらっちゃった。

駆動炉の方からわらわらと出てきやがったあいつらは何とか全部潰せたけど。

体力も残りカートリッジも少ない…。

「待ってるよ…！」

すぐに…ぶっ壊して…やるからな…!!」

どうにか、駆動炉に着いたアタシは…力を振り絞ってアイゼンを振り下ろす。

「…ラケーテン…！」

…ハンマー…っ!!」

予想通りバリアに阻まれるアタシの一撃。

まだまだ、叩き続けてりゃその内壊れんだろ…!!

ゆりかこの軌道到達まで、あと…1時間45分。

Side out

Side

ロツサとシスターシャツハのお陰でスカリエッティのアジトへ侵入できた私。

さきほど聖王治療院から、フェイトが目覚めこちらへ向かっている…との連絡を受けた。

ロツサは別行動、シャツハもナンバーズの6番セインと交戦。

つまり、私一人で最深部…スカリエツティのいる場所へ向かっているのだ。

途中で幾つもの生体ポッドを発見。

話には聞いていたが、彼はどれ程の命を弄んだのか…想像に難くない。

更に進み、私はナンバーズ2人と接敵。

この前に戦った…トーレとセツテだ。

トーレが口を開く。

「…フェイトお嬢様。

ここに来られたのは、帰還ですか？

それとも…反逆ですか」

どうやら私を、フェイトと勘違いしているようだが…それならそれで逆に好都合か…。

今の私は、アリス・インテグラでありフェイト・T・ハラオウンなのだから。

「…どちらも違う…！
広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッツィの逮捕
それだけだ…！！」

私はデバイスを構えた。

トーレとセツテが驚く。

「…フェイトお嬢様…じゃない！？
お前はっ！？」

「やっと気づいたか…。

私はアリス・インテグラ…機動六課、特別遊撃要員の一等空佐だ！」

前回のリターンマッチ。

今度は、負けない…！

しかし、そこへ思わぬ人影が。

「くくく…戦線離脱した『妹』の為によく来たね…アリス・イン
テグラ」

スカリエッツィだ。

相変わらず、不敵な笑みを浮かべている。

「いや、敢えてこう呼ぶのでしょうか…。
アリス・テストロッサ」

「!？」

わからない。

私がなぜ、アリシアという名で呼ばれたのか。

そこへ後ろからもう一筋の金の閃光が。

「アリスっ!!」

「…フェイト!？」

早すぎる到着に驚く私。

「おやおや…『金の閃光』二筋が揃い踏みか」

不敵な笑みを全く崩さないスカリエッティ。

「スカリエッティ…!!」

怒りを露にするフェイト。

「ああ…そうだ、フェイト・T・ハラオウン…君にも知ってもらおうかな。

『彼女』の真実を…」

「何…!？」

不敵な笑みを浮かべつつ、私達に話を始める…スカリエッティ。

ゆりかごの軌道到達まで、あと…1時間45分。

審判の時は、刻々と迫っていた…。

Side out

決戦（後書き）

バルディッシュが、何だかレイジングハートみたいな事になってますね。

フェイトを出さないと話が盛り上がりませんよね。

次回は後編になります。

なのははヴィヴィオを無事救えるのか？

スバルはギンガに勝てるのか！？

絶体絶命のティアナの運命は！？

エリキヤロはルーテシアを説得できるのか！？

アリスの記憶と、フェイトの思いの行方は！？

次回、最終回（予定）、

『母娘』。

希望溢れる、輝く未来へ… テイクオフ！！

母娘（前書き）

魔法少女リリカルなのは・Twin Lighting。

最終回「母娘」。

…はじまります。

母娘

くアリスSideく

私の『真実』…！？

スカリエッティの、言葉の意味がわからなかった。

「今から14年前だ…」

君はミッドの外れにある、小さな村で保護された…という事らしいね。

そして、それ以前の事は…全く覚えていないそうじゃないか…。

まあ、無理もない話だ。

何しろ…記憶は消されたのだからね。

この、私によってな…」

「…何…！？」

「プロジェクトF。」

君達も知つての通り、人造魔導師計画とも呼ばれる…『使い魔を越える人造生命の作成と死者蘇生』…。

フェイト執務官の母君でもあるプレシアが拘った計画だ…。

プレシアは死亡した愛娘、アリシアの遺骸から遺伝子情報を抜き出してフェイト執務官を創った。

まあその辺は今更説明など要らんだろう」

『……………』

「…私は14年前、とあるきっかけでひとりの少女を保護した。

私だって親もいない小さな子供を見捨てられるほど、外道ではないつもりだ。

この少女を詳しく調べて、私は驚いたものだ。生体情報がプレシアの愛娘アリシアと完全に一致したのだからね…。プレシアが、幼い成功体を捨てるはずはない。私は考えて、あるひとつの結論に達した」

『……………』

「…科学者として、こんなオカルティックでファンタジックな話はしたくないし信じてもないが…。この少女は何らかの方法で蘇りを果たした…アリシアなんじゃないかってね」

『……………！？』

フェイトも気づいていた、ひとつの可能性。

「…ともかく、私は少女の生体情報を抜き出しながら元気になるまで大切に保護した。しかし私は世にいう犯罪者だ…わずかに残った良心が少女を置いてはおけぬと、苦渋の選択をさせた。当時のアジトの割と近くにあった村、その付近の森にわざと見つかるよう置いてきたのだ」

「まさか…その村は！？」

認めたくない事実。

「そう…」。

12年前に、謎の大爆発で消滅したあそこだよ。

君が唯一の、生き残りでもある…な。

そのあとは、君の方がよく知っているだろう。

君は過去に私と会っているんだよ…アリス君。

いや…『アリシア』。

君は覚えてないだろうが、確かにそう名乗ったよ。

アリシア・テストロッサ…とね」

呼吸がうまくできない。

「まさか…本当に…！」

アリシア…姉さん…！？」

驚愕の表情を浮かべているフェイト。

しかし、スカリエッティの方へすぐさま向き直る。

「生体情報は何に使った…言え、スカリエッティ…！」

激昂するフェイト。

「焦らずとも言うよ…」。

フェイト執務官…しかし、哀れだね…プレシアが。

自分が拒絶した娘と一緒に本当の『娘』がいた事にも気づかなかつたとはね」

「…母さんを…！」

…侮辱するなあっ…！」

床を蹴りスカリエッティに斬りかかるフェイト。

トーレとセツテが、それを迎撃してスカリエッティが拘束する。

「くくく…普段は温厚だが熱くなりやすい…」

君のその性格は、実に母君譲りだよ。

さて、生体情報の使い道…だったな。

私は既に戦闘機人の理論を完成させていた。

完成していた数体を除いて能力強化にこの生体情報を使った。

もうわかるだろう、彼女達ナンバーズの多くは…君の妹達でもあるのだよ…！」

『！…！』

「…くっ…！」

スカリエッティ…！」

更に激昂するフェイト。

「……だから……？」

ポツリと呟く私。

「ん？」

「…だから……何だ……？」

驚く程冷ややかな声で呟く私。

「全て思い出した…」。

確かに私は、プレシアの娘アリシア・テストロッサ…それは変わら

ない。

だが同時に、時空管理局の魔導師アリス・インテグラ一等空佐だ……！」

スカリエツィを、紅玉の瞳で睨み付ける私。

「過去どんな事があっても私は私……フェイトにとって『親友』であり『仲間』であり『姉』だった存在。

彼女は共に戦い……傷つき……そして喜びを分かち合う……かけがえのない時間を共有する、大切な人だ……！！」

「アリス……！！」

フェイトの^{まなじり}眦にはうつすらと涙。

「臆病かもしれない、間違えたかもしれない。

でも、それも全て……私自身なんだ……！！

これから私は、アリシアとして進んでいく……！！

しかし、その前に為すべき事はしなければ……！

フェイト、屈んで……！！」

小さく屈むフェイト。

私はデバイスを構え、横に薙ぐ。

「……切り裂け！

アークブレイド……！！」

フェイトの頭上を帯電した剣圧が通りすぎていく。

拘束が解かれ、立ち上がるフェイト。

私達とナンバーズの2人、スカリエッティとの戦いが始まった。

ゆりかこの軌道到達まで、あと…1時間30分。

＼Side out＼

＼スバルSide＼

『相棒』マツハキャリバーのお陰で、何とかピンチを脱した私。

「…モード…！」

『エクセリオン』っ…！」

『Yes, A.C.S. driver!』

フルドライブを『相棒』に指示する。

絶大な魔力ダメージを一撃で叩き込んで一気に決めてみせる…！

「ウインググロード…！」

…おおおおおっ…！」

私とギン姉の拳が、相手のシールドに衝突する。

まだまだ…まだ…！！

「一撃…必倒…っ…！」

ギン姉の攻撃を避けながら拳を開き、強引にシールドをこじ開ける。

「…デイベイン……！
…バスター…っ…！」

右手から放った私の魔力光に包まれるギン姉。

勝った…！

倒れこんだギン姉を、抱きかかえる私。

「ギン姉…ギン姉っ！」

軽く体を揺すって、意識を取り戻させる。

「…う……っ…！
スバル…？」

「ギン姉…っ！
よかった…！！」

私の名を呼んでくれた。

瞳も戦闘機人の象徴である金色から元に戻ってる。

「ごめん…ね…！
ごめんね…スバル…！！」

ポロポロと涙を流して私に謝るギン姉。

「大丈夫だよ、ギン姉。
さ、みんなと合流しょ？」

「…うん…っ！」

『お姉さん』とはいってもギン姉はまだ17歳。

私の知ってる可愛い顔で、ギン姉は頷いた。

さあ、ティア達と合流してゆりかご組の援護に行かなきゃ…。

「スターズ03よりロングアーチへ、ナカジマ陸曹の奪還に成功。
小休止のあとスターズ04並びにライトニング03・04の救援に
向かいたいと思います！」

『ロングアーチ、了解』

ゆりかごの軌道到達まで、あと…1時間25分。

時間はもう、あまり残っていない…。

「…ねえ、スバル。
本当に…強くなったね」

「そう…かな？
えへへ…嬉しいよ。
ギン姉…大好き」

ようやく取り戻した姉妹の絆は…もう誰にも壊させはしない。

Side out

ザフィーラSide

聖王治療院でヴァイスの妹ラグナに会った。

彼女は昔、犯罪者に人質として囚われた事があるそうだ。

その際犯人を狙撃しようとしたヴァイスが、ラグナの左目を…誤射してしまっらしい。

非殺傷設定のお陰で失明は避けられたが、ヴァイスは責任を感じて…武装局員を辞してパイロットに。

今日も彼女は、兄の見舞に訪れた。

私は未だ迷いを抱く彼に、一言だけ言った。

「どう生きるか、どう戦うべきか…決めるのはあなた自身」と。

ヴァイスは迷いを振切り、私やシャマルと首都防衛のために動いた。

そして、地上部隊の司令塔ナンバーズ8番オットーを発見した。

とある廃棄建造物を覆つ、隔離結界。

その近くの反応…どうやらビンゴだったようだ。

「あなたが地上の司令塔、当たりだったようね。
どんなに巧妙に隠れても、クラールヴィントの探知はごまかせない
わよ。」

機動六課所属の、シャマル三尉です」

「…同じ女性体として気は進まないが、これも私達の仕事でね。
同じく機動六課所属・特別捜査官補佐の、ザフィーラ三尉だ。
大規模争乱罪の現行犯で、君を逮捕する！」

「く…！」

「逃さん…はあっ…！」

私の『鋼の軛』とシャマルのバインドで、逃走を図るオットーを拘束する。

同時に結界が消えて、中のティアナの様子を掴む事ができた。

不利のようだが助けるのは彼女の為にならない。

ここは自分の力だけで打開してもらおう。

ゆりかごの軌道到達まで、あと…1時間30分。

Side out

「ティアナSide」

周りの結界が消えた。

シャル先生とザフィーラさんがうまくやってくれたのだろう。

付け入る隙は…ある。

一見、完璧な連携だけど…完璧すぎる分読み易い。

狙うは連携の初動…砲撃のウエンディ！

「おおおおおっ！！」

ノーヴェとデイドが私に止めを刺すべく迫る。

まだだ…あと少し…！

「…ここだあっ！！」

クロスファイアで、2人の突進軌道を逸らす。

同時にスフィアを飛ばし、ウエンディの砲を攻撃して暴発させる。

ノーヴェの攻撃をかわしてデイドの斬撃を、ダガーモードで防ぐ。

残ったスフィアを操作してデイドの後頭部に一発を当て、昏倒させる。

「ウエンディ！」

デイドっ!!」

ノーヴェが叫ぶ。

私は爆煙越しにノーヴェヘデバイスを突きつける。

「…動かないで!

武装を解除しなさい…!!

あなた達を保護します!!」

チェックメイトだ。

私はバインドで3人を拘束する。

どうにか、勝つ事ができたようだ。

さあ…早いとこスバル達と合流して、ゆりかご組の…援護へ向かわないと…。

ゆりかごの軌道到達まで、あと…1時間25分。

私はもう、凡人なんかじゃない。

『ストライカー』の卵の、一端の魔導師なんだ…。

Side out

エリオSide

ナンバーズ？クアットロの仕業で、ルーテシアは強引に能力を解放された。

キヤロが何とか説得しようと試みるが、ルーテシアは悲しみに心を囚われており僕達の声が届かない。

遂に彼女は大型竜騎白天王まで喚び、僕達を殺そうと力を振るう。

僕達と彼女は、同じなのだと思う。

誰も信じられずに、暖かい居場所と優しくしてくれる人を求めているだけで。

フェイトさんという大切な人がいる僕達の事がきつと羨ましくて。

そして妬ましくて、憎いんだと思う。

ガリユーも、悲しい戦いを続ける主人に…涙を流したように見えた。

「ルー！

もう悲しみと憎しみだけで力を使っちゃダメだ！！

そんな事しても、周りを傷つけるばかりで何も手に入らないんだ
！！」

「そうだよルーちゃん！

あなたのお母さんは私達が捜すのを手伝うから！
絶対に約束するから！！」

それでも尚攻撃をやめないルーテシア。

白天王はキャロの大型竜騎ヴォルテールで。

地雷王という中型召喚獣は小型召喚獣インゼクト諸共フリードの火球・ブラストレイで。

ガリユーは僕がストラダで放ったシグナム師範代の技・紫電一閃で、それぞれ制圧した。

ブラストレイの直撃を受け傷ついた事で催眠状態から脱したルーテシアを、無事僕達は『保護』した。

一刻も早くスバルさん達と合流して、ゆりかご組への援護に向かわないと…。

ゆりかごの軌道到達まで、あと…1時間30分。

Side out

くなのはSide

嫌な予感がした。

玉座へ通じている一本道へ入った瞬間、魔力の高まりを感じた。

「5……4……3……」

「…エクセリオン…！」

バスター……っ!!」

嫌な予感というのは、往々にして当たりやすい。

どうにかバスターで砲撃を止めたが、それだけ。

私は押し切るため、禁断の力に手をつけた。

「ブラスターシステム!

リミット1リリース!!」

『All right,

Blast er release!』

ブラスターモードで強引に出力を上げ、ナンバーズの?・ディエチの武装へヴィバレットを押し切る。

リミット1で、既に全身が悲鳴をあげている。

だが、決して止まる訳にはいかない。

ヴィヴィオを助けて、更にゆりかごを止めないと。

ディエチを拘束し、玉座へ進む。

ゆりかごの軌道到達まで、あと…1時間40分。

ヴィヴィオ…ママがすぐに助けるからね…!

Side out

シグナムSide

地上本部・レジラス中將の執務室。

私が踏み込んだ時の、その光景に目を疑った。

中將は殺害され、その後ろには戦闘機人の遺体…2番ドゥーエがいた。

そしてそれを見つめる男…ゼスト・グランガイツ。

「…騎士ゼスト、友人との話は叶いましたか？」

「…ああ、あとは私の為すべき最後の仕事を全うするだけだ。ルーテシアを救うために、スカリエッティを止めねばならん」

「ルーテシア・アルピーノなら、先程私の仲間が保護しました。スカリエッティも同様に、私の仲間が逮捕したと報告を受けています」

「そうか…」。

ならば、私のやるべき事はひとつだ。

私の残りわずかの命、全て燃やし尽くす」

「旦那あー!!」

融合騎アギトが、ゼストに抗議する。

「ならば私も全力をもってそれに応えましょう」

私はレヴァンティンを抜き刀身に炎を宿らせる。

ちなみに、ツヴァイは先にゆりかご組の援護へ回っている。

私とゼストは互いに武器を交え、そして…。

「紫電…一閃!!」

一太刀で決着がついた。

リボンが解けて、金色姉妹のような髪型になったが…まあ些細な事だ。

ゼストは死に際、アギトを私に託した。

私はアギトのロードとなりユニゾンを果たす。

安らかに眠れ…『正義』を愚かなまでに貫き通した、誇り高き武人よ。

私は彼の亡骸にそう呟いてゆりかご組の援護へと急行した。

ゆりかごの軌道到達まで、あと…1時間。

高町とヴィータは、うまくやっているだろうか…。

Side out

くアリスSideく

『…はあ……はあ……』

A M Fが重い…。

フェイトも辛そうだ。

病み上がりで全力、しかもA M F状況下では…無理もないか…。

「半病人の状態でここまで粘るとはね…さすがだ。
フェイト執務官。

アリシア…君も出来損ないの妹を持つと大変だね」

スカリエッティが、私達を嘲る。

「黙れ…っ！

フェイトは出来損ないでも劣化コピーでもない！」

「だが、見るからに2人共辛そうじゃないか。

これ以上戦っても、意味がないと思わないかね？」

「黙れ…黙れ…っ！！

まだカードはある…！！

フェイト、いくよ！」

「…うん、アリス！」

『オーバードライブ…真・ソニックフォーム…!』

ギリギリまで装甲を削り、機動性に特化した神速形態真・ソニックフォーム。

ちなみに私はいつもの白いバリアジャケット。

「装甲が薄い…」

当たれば墜ちる!」

トーレが一撃でも当てると意気込む。

しかし、それは間違い。

なぜなら…この姿の私達を接近戦で倒せる者など存在しないのだから。

『兵は神速を尊ぶ』…とは少し意味が違うが、神速を極める私達を
まともに捉えられる者はほとんどいないのだから。

『はあああああつ!…!』

「ぐわっ…!」

「ぐうっ…!」

私はトーレを、フェイトはセツテを一刀のもとに叩き伏せる。

「…アルティ!

エクスカリバー・バスターフォーム!!」

『はい!!』

バルディッシュのザンバーフォームのように、刀身が巨大化していく。

「おおおおおっ!!」

私はそのまま斬りかかっていった。

スカリエッティは手袋型のデバイスで私の斬撃を受け止める。

「ああ…素晴らしい!!」

やはりこの力、手元に残すべきだったよ！
だがね、君の力は呪われた力なんだよ！
君の妹…フェイト執務官と同じようにな!!」

「黙れ…黙れえっ!!」

私の…私達の力は呪われてなんかいない!!
泣いている人を、救う事ができる力だ!!
そうしたのは貴様だろう、スカリエッティ!!」

フェイトは無理が祟ったか後方で膝をついている。

「はあああああっ!!」

一旦離れ、再びバスターを振りかぶる。

スカリエッティは、不適な笑みを浮かべたまま身動きひとつしない。

「…ぜあぁっ！！」

野球のように、バスターを振り抜く。

スカリエッツィの体は簡単に吹き飛ぶ。

「はぁ…はぁ…！」

アル…ティ…。

あれを…出して…」

『…はい』

アルティは記録メディアを取り出し、私はそれを再生した。

スカリエッツィに歩み寄り私は宣告する。

「はぁ…はぁ…！」

…緊急逮捕特別令状だ！

広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッツィ！

大規模争乱の首謀・教唆、古代遺失物不法占有！

並びに局員拉致と未成年者略取教唆等管理局法違反の容疑で…逮捕する！！」

私はスカリエッツィを厳重にバインドで拘束。

本当はフェイトの方がいいのだが、仕方がない。

その時、地響きが施設内を襲う。

この揺れ…地震なんかじゃない！

「くっ、自爆装置か…！」

私は歯噛みする。

「クアットロが施設破棄を決めたのだよ。
こちらの私はもう用済み、という事だ…」

「止める方法はないの？
言いなさい！」

体力が回復したフェイトが詰め寄る。

「クアットロを拘束または無力化して、更に解除命令を入力するし
かない。

だが、忘れるな。

ナンバーズが一人でも生き残れば、私は何度でも復活できる…。
悪夢は終わらないんだよ…くっくっ…」

ゆりかこの軌道到達まで、あと…1時間。

＼Side out＼

＼ヴィータSide＼

目が、かすみやがる…。

血い流しすぎたか…？

もう何回、ぶっ叩いたかも忘れちゃった。

なのに…！

「何で、傷一つ付かねえんだよ…！！

アタシは鉄槌の騎士だ！

これをぶっ壊さなきゃ……みんなが困るんだ…！！
…うおおおっ…！！」

…アタシは最後の力を振り絞ってアイゼンを動力炉に叩きつけた。

だけど…ダメだった。

万全のアタシなら、できたかも知れねえが。

はやて…なのは…アリス…フェイト…！

みんな…済まねえ…！

受身を取る力もなくして、頭から落ちていく。

その時だった。

「謝る事なんか…」

天使がいた。

「何もあらへん…！」

黒い翼を持った。

「鉄槌の騎士・ヴィータとグラーファイゼンが…」

誰よりも優しい。

「こんなボロボロになる程頑張って…」

夜天の王が。

「壊せへん物なんか…」

アタシの『主』。

「有る訳無いやろ…！」

八神はやてが。

駆動炉に輝が入り、すぐに広がっていく。

クリスタル状の駆動炉は、粉々に砕け散った。

ゆりかごの軌道到達まで、あと…55分。

これで少しは時間が稼げるだろうな…。

アタシははやてに抱かれてそんな事を考えていた。

Side out

くなのはSide

「ヴィヴィオ…!？」

「ママを…返して…!」

玉座の間。

クアットロの策略によって『ゆりかごの聖王』として覚醒したヴィヴィオ。

私はクアットロこそが元凶であると踏み、スフィアを使いゆりかごの内部を搜索していた。

何としても、クアットロを見つけるまで…ダメージの蓄積を抑えなければ…!

私は、ヴィヴィオの猛攻に対抗する為ブラスター2を解放。

更なる負荷が体を襲うが、倒れる訳にはいかない!

ブラスタービットで障壁を展開、時間を稼ぐ。

まだ…見つからないの……レイジングハート!

『It discovered it!

Present location is displayed!』

（発見しました！

現在位置を表示します！）

最深部か…辿り着けないし行ってる余裕もない。

なら…答えは一つ！

ヴィヴィオを、バインドで拘束してから準備する。

大火力砲撃の特権、壁抜き攻撃を！

フレーム強度ギリギリまでチャージしたブラスター3ディバインバスターなら、隔壁抜いて攻撃できる！！

何十発ものカートリッジを使ってチャージする私。

「ブラスター…3つ！！」

その瞬間私はクアットロの戦慄に歪む顔を見たような気がした。

「…ディバイン………！！
バスター………！！！！！！」

幾層もの隔壁を突き破り、クアットロに届いた。

それと同時にガジェットも機能を停止したらしい。

あとは、ヴィヴィオを洗脳から解放して脱出だ。

「うう…うああ…！」

ママ…なのはママ…！」

「ヴィヴィオ…！」

正氣に戻りかけてる、悪夢の終わりも近い。

「ヴィヴィオ！」

「…来ないで！」

私、わかったんだ…。

私は古代ベルカの『聖王』オリヴィエのクローン。

300年前に戦没した王を基にして作りだされた人造生命体だつてこの『ゆりかご』を動かす『鍵』として生み出された生体兵器だつて」

「ヴィヴィオ…！」

それは違うよ！」

「違わないよ！」

私のママは、もういない…なのはさんやアリスさん、フェイトさんは『代わり』にしか過ぎないの！

いくら望んだつて…もう、手に入らない！

私は…生まれちゃいけない子供だつたんだよ…！」

「ヴィヴィオ…！」

違う…違うよ！

ヴィヴィオがどんな過去を持ってたからつて…私達にとってヴィヴィオは大切な『娘』なの！

そうやってすぐ泣くのも…転んで一人で立てないのもピーマン苦手なもの…全部私の…大事な、ヴィヴィオなんだよ！

だから…生まれてきちゃ、いけなかったなんて悲しい事を言わないで…！

ヴィヴィオの本当の想い…ママに聞かせて…！」

「私は…！」

私はママと一緒にいたい…ママ…助けて……！」

嘘偽りなしの魂の叫び。

私は娘の想いに応えた。

「助けるよ…！」

いつだって！

どんな時だって……！」

私は、レイジングハートを構えた。

彼女を縛る鎖・レリックを破壊するために。

「ヴィヴィオ…。」

もうすぐだからね…。

ちよっとだけ、痛い我慢できるよね？」

「…うん…」

小さく頷くヴィヴィオ。

「全力…全開…っ…！」

スターライトお………！！！」

目を瞑るヴィヴィオ。

「ブレイカー……！！！！！！」

着弾の瞬間、ヴィヴィオの体からレリックが抜け出てきて…。

「うう…うああ…ああ……あああああつ！！」

ヴィヴィオの悲鳴とともにレリックが砕け散る。

閃光が収まり、着弾点にはあの小さな…ヴィヴィオが倒れていた。

「ヴィヴィオっ！！」

私は思わず、駆け寄ろうとする。

「…こないで！

ひとりで…たてるよ…！

つよくなるって…やくそくしたから…！」

よろよろと立ち上がった、私の『娘』。

私は駆け寄り、娘を優しく抱き締めた。

私達は今、本当の『母娘』となった。

ゆりかごの軌道到達まで、あと…45分。

だが、駆動炉系がほとんど出力を落としたから実際はもう少し長いだろう。

Side out

フェイトSide

地響きは続いている。

生き埋めか、または爆発に巻き込まれるか。

どちらにせよ愉快な話じゃ無い事は確かだ。

急がないと本当にそういう結果になってしまう。

『アリスにおいしいところ取られちゃったしね、最後までいいはカッ
コつけさせて欲しいな?』

…なんて事、言わなければよかったかな。

自虐的な笑みを浮かべて、作業を加速させる。

アースラから援護されてるとはいえ、少々厳しい。

アリスは魔力と体力を使いすぎて、壁際に座り込んでしまっている。

その時、アースラから光明がもたらされた。

『強制解除コードの解析に成功しました、そちら側で実行して下さい!』

「ルキノ、ナイス!!」

私は送られてきた強制解除コードを実行。

程無く揺れは収まる。

「止まつ…た…?」

「いえ、まだです。

ここから早く脱出しないと崩落が再発するかも…」

「しかし、ここから歩いてだと時間がかかるよ?

それも護送対象者を6人、要保護対象者を数人連れて歩けないだろう?」

その時ここに近づいてくる魔力反応。

この波長は…!

「フェイトさん!!」

アリスさん、シスター!

アコース査察官!!」

『…エリオ(君)!!』

「すぐ救助隊が来ます。

先に脱出を!」

こうして、スカリエッティ一味は壊滅した。

あとはゆりかご撃破だけ…なのは、大丈夫かな…。

ゆりかごの軌道到達まで、あと…40分。

くなのはSide

やられた…。

『聖王の器』である少女・ヴィヴィオを失って、自律稼働を始めたゆりかご。

通路との扉が閉じられて、私とヴィヴィオとツヴァイとはやてちゃんAMFの檻に閉じ込められた。

魔法が使えない状態では、外からの救助を…待つしかない。

諦めかけたその時、入口の扉が爆発した。

出てきたのは…。

「助けに来ました!」

「スバル、ティアナ!!」

スバルは、AMFの影響が少ない『戦闘機人モード』で。

ティアナはヴァイス君から借りたバイクで、ここまでやって来たら

しい。

2人の『救助』によって、私達は無事にゆりかごから脱出した。スカリエッティのアジトに行ったアリスちゃん達も、無事脱出したそうだ。

そして、クロノ君が率いる次元航行部隊の艦隊によりゆりかごは撃破された。

死んだ人や、殺された人もいたけれど…事件は無事に終結した。

そして、時は流れて…。

＼Side out＼

＼アリスSide＼

ゆりかご事件から、早くも半年が経った。

機動六課も、あと1ヶ月で解散となる。

長いようであつという間に過ぎていったこの一年。

苦しい事もあつたけれど、みんないい思い出。

同員の進路も全員決まり、限られた時間で業務を継続しながらそれぞれの夢へと進んでいる。

なのはは教導隊に戻って、ヴィータとともに局員達の教導。

フェイトは新たにティアナを補佐として執務官復職、シャーリーも補佐復帰。

はやては陸士隊に戻り特別捜査官に復帰、指揮官には当分戻らないらしい。

シグナムは武装局員を続けザフィーラは首都防衛隊の隊長職に、シヤマルは本局医療部に復帰。

グリフィスとルキノは共にオペレート職を続けるため本局、ヴァイスとアルトはヘリパイロットとして地上本部に。

マリーも技術士官として、本局に復帰した。

スバルは湾岸警備隊の特別救助隊、エリオはキャロと一緒に辺境自然保護隊へと転属が決まった。

そして私は今までの功績が認められ、准将への昇進が決定した。

19歳での准将昇進は当然史上初。

局員達には私は最早3提督以上の伝説扱い。

もちろん固く辞退したが、それで済まないのが人々の噂というもの。

また、みんなとの差が開いちゃったな…。

私はみんなと楽しく仕事ができれば、それだけでいいのに…。

ルーテシアは母メガーヌ、相棒ガリユーと無人世界で静かに暮らしている。

スカリエッティは、更正を拒否したナンバーズと共に次元拘置所に収監。

更正の意思を見せた子達… チンク・ノーヴェ・ウエンディ・ディエチはスバルの義理の妹に。

セイン・オットー・ディードは聖王教会預かりに決定した。

そしてヴィヴィオは本人の希望により聖王教会系列の魔法学院『Stヒルデ学院』へ入学した。

新暦76年4月28日。

遂に、六課解散の日。

私達は今日、新たな門出を迎える。

はやての挨拶が終わって、武装要員は全員集合という事になっている。

VR訓練場に満開の桜。

私達はここで、最後の合同模擬戦をするのだ。

フェイトは聞いてなかったらしいが…。

「それじゃみんな？
正々堂々全力全開で…」

『レディ……GO!!』

大事な友達、頼れる仲間。

そして大切な家族…。

これからも、私…。

アリス・インテグラ…。

いや、違った。

アリシア・テストロッサ・ハラウンは…。

明るい未来へ、知恵と力と勇気で…。

力強く進んでいく…。

それが、この14年で私が学んだ…。

『生き様』なのだから…。

母娘（後書き）

この長さを24時間で纏めるのは大変でした…。

このあとは、アリフェイのその後が描かれる、短めのエピソードを載せて終わりです。

エピソードぐ姉妹ぐ（前書き）

一度書き上げたエピソードですが、追加エピソードを盛り込んで上書きです。

こちらでもやっぱり2人がガチ百合です。
苦手な方はご注意&ご了承下さい。

エピソード〜姉妹〜

機動六課解散から1年。

次元航行部隊へと復帰した私は、ある人物の部屋へと向かっていた。

短めのインターホン。

「どうぞ」

「失礼します」

「元気そうですね。」

ハラオウン一佐」

「…お変わり無いようで、何よりです。」

ハラオウン執務官」

堅苦しい挨拶のあと私達はクスクスと笑いあった。

「…変だよな。」

私達は姉妹なのに」

「…そうだね。」

アリシア『姉さん』」

そう、彼女はあれ以降私の事を姉と呼んでいる。

「一年出向してどう？」

でも六課解散直後に、また出向なんてね」

「…仕方ないよ。」

「そういう仕事だから」

私はこの一年、ある部隊へ長期出向命令を受けていたのだ。

「引く手数多はいいけど、加減して欲しいよね…」

「仕方ないよ、何たって…『管理局の白い死神』。」

アリシア・テストロッサ・ハラウン一等空佐だからね…」

「そんな二つ名は、重荷なだけだよ…」

「でもこれで、ようやく…『ツインライトニング』で仕事できるね。ずっとこの時を待ってたんだよ…？」

私は甘えた声のフェイトに一瞬戸惑いながら、用件を話し始める。

「フェイト、明日から数日休み取れないかな？」

「どうしても2人で行きたい所があるんだけど…」

「シャーリーとティアナに相談してみないと、何とも言えないかな…」

フェイトはそう言い、通信で2人に相談し始めた。

結果はOK、艦の停泊期間を延ばしてもらい許可…となった。

ちなみに、この依頼休暇の後私に空将への昇進命令が下った。

『辞令』ではなく『命令』なのが重要。
私が、上層部からの打診をずっと断り続けているから強制的に上げてしまおうというのだろう。

未だに上が満足に機能していない現在『極めて強力なカリスマ』の存在が必要というのが、上の意向なのだろうか。

翌日、ミッドの草原地帯。

ここに飾り気のない墓標が二つある。
もっとも、納められるべき遺骨はないのだが。

片方の墓標にはこう刻まれている…『プレシア・テストロッサ』と。

そう、ここはミッド南部のアルトセイム。

私達2人にとって、色々な思い出の詰まった『故郷』である。

「12年…かあ…。

プレシア母さんが逝って、そんなに経ってしまったんだね。

広域次元犯罪者だったとはいえ、私は…何て親不孝な娘なんだろうね」

『母』プレシアの墓前で、自虐的に微笑む私。

フェイトは、もうひとつの墓標…ヒューラント一家の墓前で手を合わせる。

お互いに多忙な身なので、墓は建てたものの…ろくに来られないの

だ。

「母さん、リニス…。」

それにお義父さん達も。

私はまだ、そちらへは行けそうもありません。

私には、この10年以上の間に…自分の全てを捧げてでも護りたい、大切な人ができました。

だから、元々はそうなっていたはずの『宿命』^{フエイト}に…もう少し抗ってみます」

私は小さな声で墓前にそう報告し、フエイトと一緒に『最後の』墓参りを済ませたのだった。

「…フエイト、ありがとうね…私の『家族』の墓にも手を合わせてくれて。

そろそろ、行こう。

…ぐずぐずしてたら、^{クラナガン}首都に着く前に夜になっちゃう」

フエイトはこちらを向いて小さく頷き、立ち上がって私と一緒に歩き出す。

…もう、ここを訪れる事は無いだろう。

今の私…私達に必要なのは過去を振り返る事ではなく未来を見る事。

これからも現れる後進達のためにも、よき手本であり続ける事が今の私達の使命なのだから…。

夕方、クラナガンへと戻り職員寮に帰った私達。

ちなみに今日使ったのは、フェーリー似のフェイトの車ではなく…
私が地球から持ち込み電気自動車に改造したイテグだ。

え、伏せ字になってない？
細かい事は気にしないで。

それはそれとして、私達はとても仲のいい姉妹として知られている。
けれど、私達には…あまり知られていない一面が存在する。

それは…。

夜、私の部屋。

「一年…待ったんだよ。
今夜は、一緒に…ね？」

「…うん、姉さん」

…そう、私達は姉妹であり恋人同士でもあるのだ。

一般的には、認められない関係であっても。
私達の間には芽生えた感情は法律では縛れない。

法を遵守すべき管理局の人間が…なんて言わないで欲しい。
ミッドは『そういうの』も認められている…世間体はともかく。

しかも地球では研究段階にある技術も、ミッドチルダでは実用化されている。

そのため、今のミッドでは女性同士で子供を産む事も珍しくない。もつとも私達は今のところその予定は無いが。

先に惚れたのはフェイトの方だ…しかし今となっては些細な事でしかない。

私達は目の前にいる相手を愛している…理由なんて、それで十分だ。私達の辞書には『同性愛』なんて言葉は存在しないのだから…。

私達は地球の某名曲のように…軋むベッドで優しさを持ち寄り、体をきつく抱き締めあう。

「ねえ…さあ…ん…！」

私…もう、離れない…！」

私にとって…たった一人の『肉親』だから…！」

艶かしい甘声で私を求めてくるフェイト。

ティアナはもちろんだが、シャーリーもこんな彼女を知らない。

甘えんぼな上に強気なのか気弱なのかよく解らない、しかも結構うつかり屋。

ティアナやシャーリー達がこんなフェイトを知ったらどんな顔をするやら。

「…わたし…も…」。

フエイト…大好き…。

絶対に…離さない、から…ずっと…私を…見守って…いてね…？」

私はフエイトの『想い』に全力で応える。

『んく…う、ふ…ん…っ…んむ…うん…んん…！』

互いの唇で、体で触れ合い『感情』^{アヴァロン}を確かめる。

そして、生きながらにして『理想郷』へと2人で到達した。

今更だが某歌劇風作品的に言えば、私がオ カル役になるのだろうか？

…って、そんな事はこの際どうでもいいか。

それにオ カルは私よりもシグナムの方が近いし。

…まあ、何はともあれ私が一度死んでしまったあの日から実に25年以上。

本来なら魔導師にはなれなかった私だけど…『神』は魔導資質^{シンカーコア}以上に、たくさんのモノをくれた気がする。

多少は歪んでしまった気がしなくもないが、今の私は概ね幸せだ。何といっても切望していた『妹』が居るのだから。

その他にも、暖かい家族や親友に囲まれて…これ以上望むべくもないほどに充実している。

…『妹』を『恋人』にするような、ダメな『姉』でも何も言わずに

慕ってくれる優しさ。

時空ときを越えて刻み込まれる悲しみの記憶すらまっすぐに受け止める
芯の強さと。

たとえ創られた命だったとしても、偉大なる魔導師の『娘』である
事に胸を張る事ができる気高さ。

それらが溶け合い、とても絶妙な均衡を保っている…雄々しきひかり黄金
の女神てんしフェイトと一緒にいられる事。

それが、今この瞬間の私にとっての何よりの『幸せ』なのだ。

私は、これからも…ずっとフェイトと共に『未来』を歩いていき
たい。

私の同位体クロンであり、親友であり家族でもあり…とにかく大切な人
である事には変わりはないのだから。

…そして『私だけの』彼女フェイトであるという事にも…。

魔法少女リリカルなのは

- Twin Lighting -

- Fin -

エピソードぐ姉妹ぐ（後書き）

これがこのサイトで処女作となった訳ですが、色々と拙さを露呈しています。

ちなみに書けなかった話もあり、そちらは続編に収録されてたりします。

ネタバレですがアリシアがストライクアーツの有段…いや、達人だったり。

…そんな訳で、アリシアが幸せになる話はここで一旦終幕となります。

可能な限りミッド組全員に出番を与えたつもりですが『このキャラもつと出せ』等の意見は勘弁願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7230q/>

リリカルなのは -Twin lightning-

2011年7月11日23時04分発行